仙台市文化財調査報告書第309集

仙台城跡 7

—平成18年度　調査報告書—

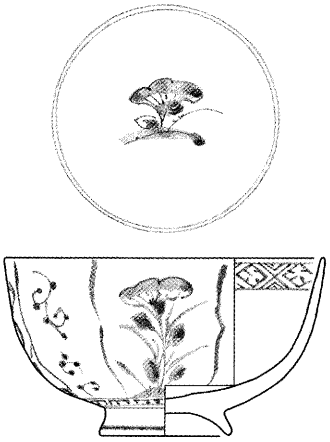
2007年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第309集

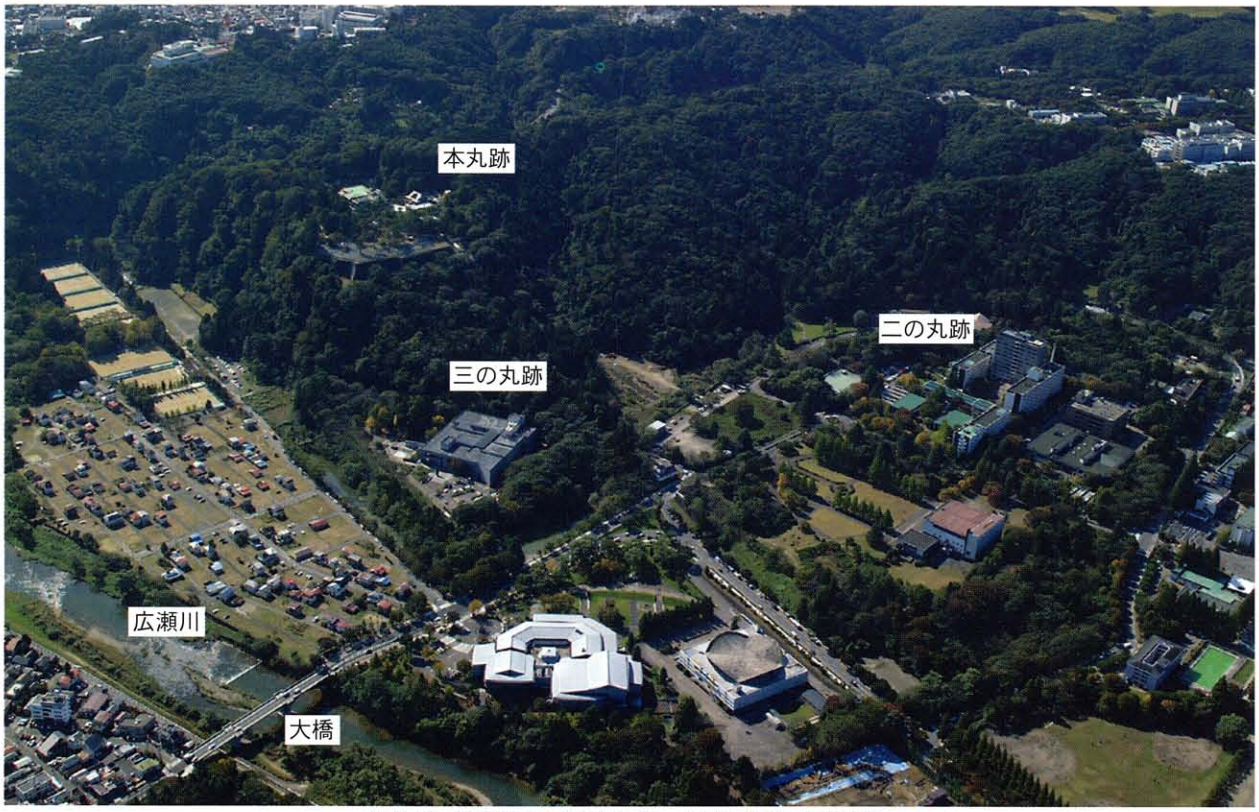
仙台城跡 7

—平成18年度　調査報告書—

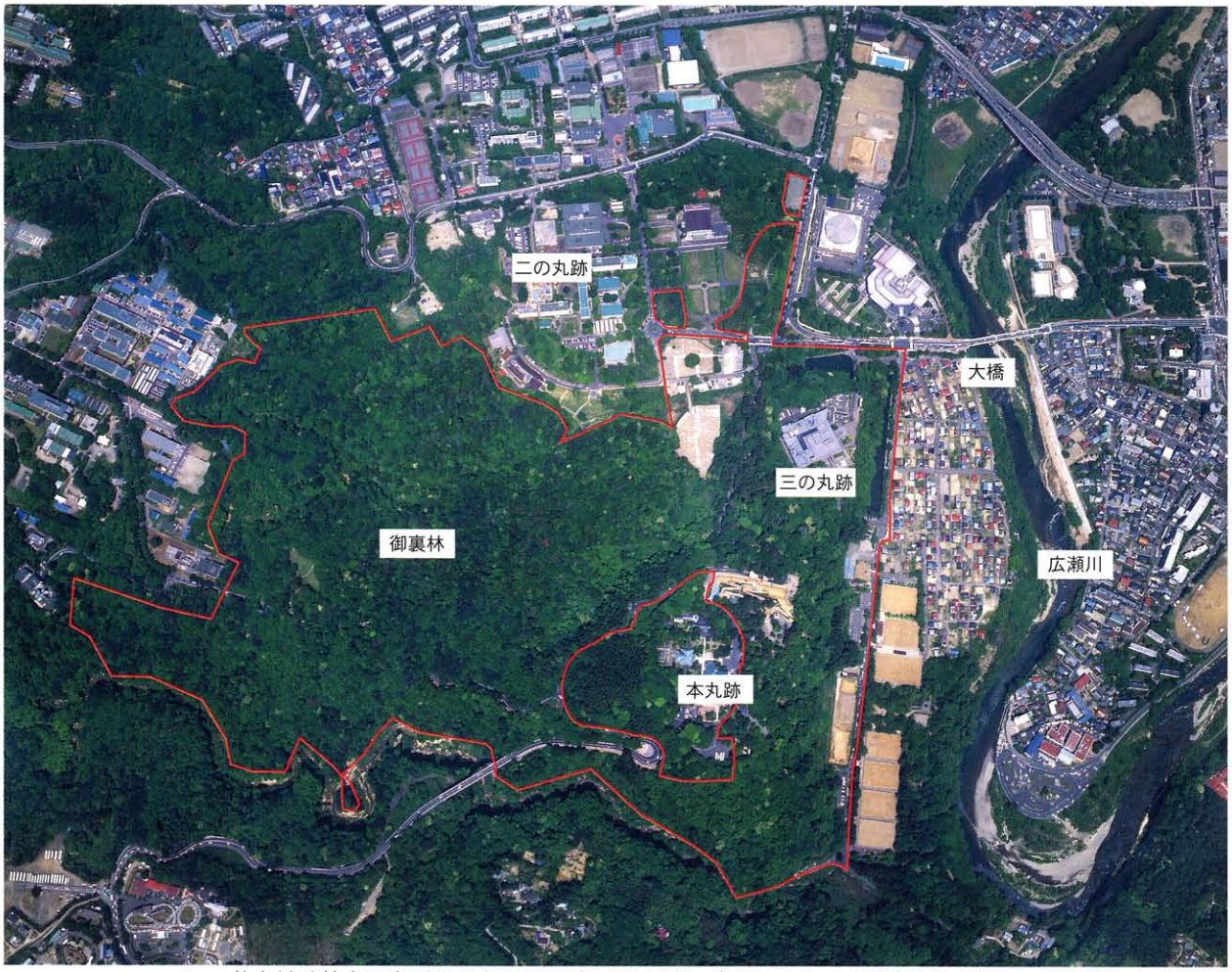


2007年3月

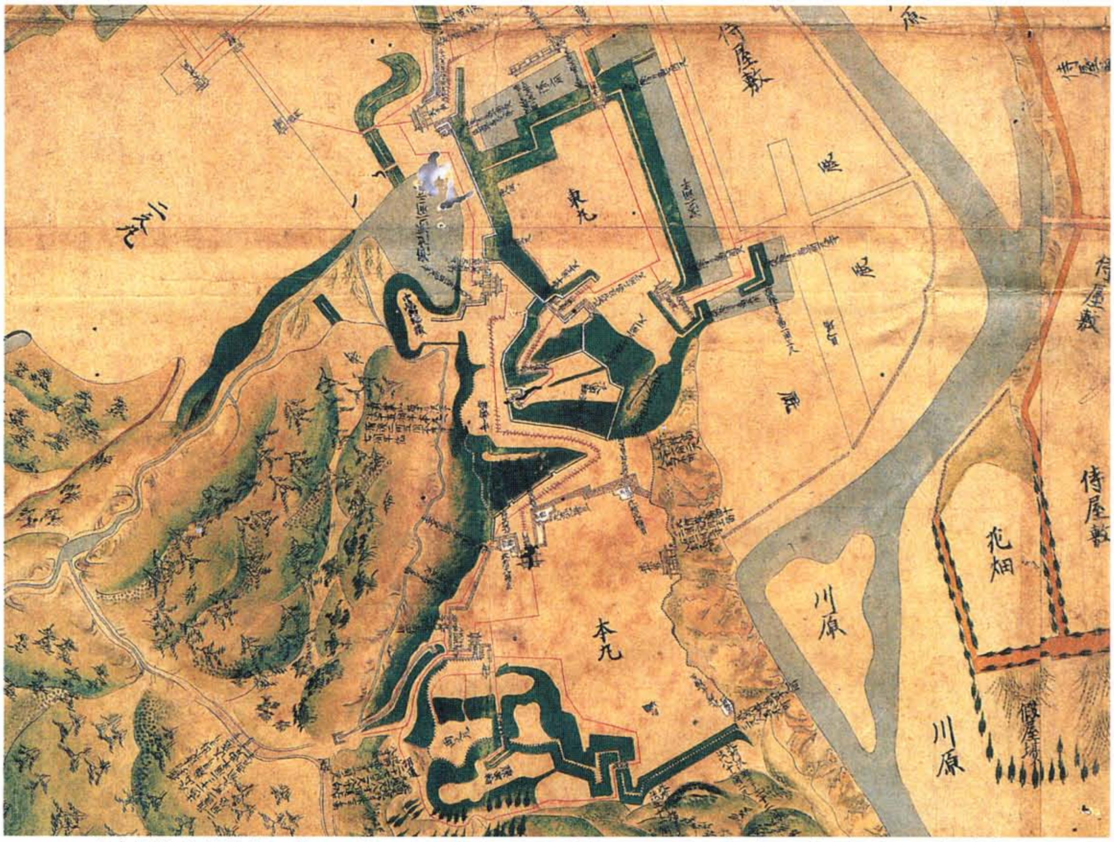
仙台市教育委員会



仙台城跡鳥瞰写真（北東より・2005 年 10 月撮影）



仙台城跡航空写真（北が上・2002 年 1 月撮影・赤ラインは国史跡指定範囲）

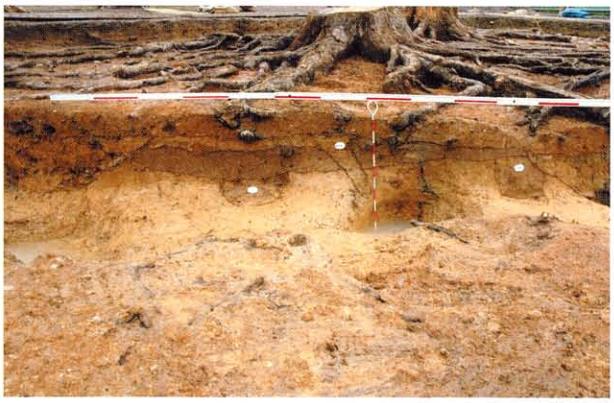


「奥州仙台城并城下絵図（北が上、本丸・三の丸部分、天和２年〔1682〕）宮城県図書館蔵」

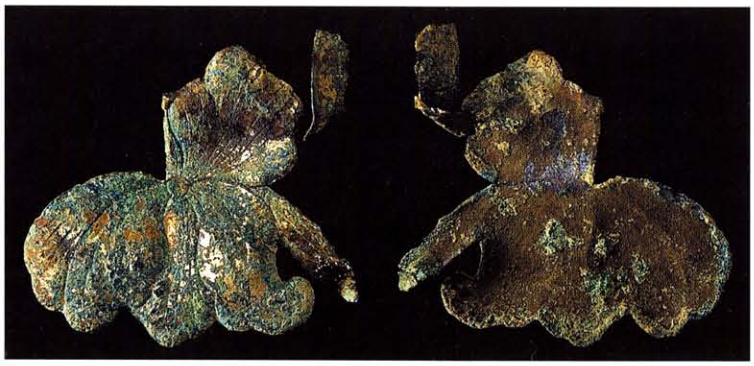
肯山公造制城郭木写之略図（北が上、本丸部分、17 世紀後半～18 世紀）宮城県図書館蔵

第15次　調査区全景（北東から）

第15次　１区北東部遺構検出状況（東から）



第15次　１区基本層序（北東から）



第15次　１区出土金銅金具（No.146）縮尺約1/1

第15次　１区KS-432検出状況（北から）

第16次　３区Ⅲ層出土磁器

第16次　３区Ⅲ層出土土師質土器他

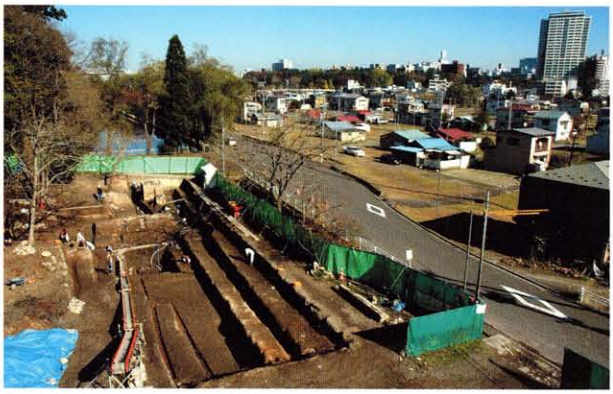
第16次　３区Ⅲ層出土金属・石・ガラス製品

第16次　３区Ⅲ層出土陶器

第16次　３区Ⅳ層上面・Ⅳ層出土陶磁器

第16次　３区北壁断面（南東から）

第16次　３区Ⅲ層遺物出土状況



第16次　１区全景（南西から）

第16次　２区全景（東から）

序　　文

慶長５年［1600］、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下に仙台のまちづくりを行ってから、四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が、近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中にあって、仙台城跡は市街地から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で、市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城は、平成９年度から15年度まで行われた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や平成13年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城、そして伊達氏の居城としての全容が徐々に明らかとなってきました。

これらの発掘で新たに判明した複数の時期に亘る石垣構築の変遷や、ヨーロッパ産のガラスや金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は平成15年８月、我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、仙台城跡整備基本計画が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっております。

こうした中で、平成18年度は本丸御殿の主要な建物である大広間跡の周辺を中心とした発掘調査、三の丸巽門跡周辺の発掘調査が行われました。大広間跡に関する調査は今年度で６年目を迎え、北東周辺における塀跡などの区画施設を発見し、大広間と他の建物や庭園などの位置関係を考えていく上で大きな成果が得られました。また、昨年度に引き続き大広間よりも古い玉石敷きを発見し、大広間完成以前の遺構の拡がりが明らかになりました。

巽門跡周辺の調査では、近代に埋没したとみられる堀跡の北岸と西岸を確認し、南北幅が35m以上、深さが現地表面より６ｍ以上となる大規模なものであることが明らかになりました。

今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成19年３月

仙台市教育委員会
教育長　**奥山　恵美子**

例　　言

1．本書は、仙台城跡の平成18年度遺構確認調査及び史料調査の報告書である。

2．本調査は、国庫補助事業である。

3．本報告書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆　　鹿野仁子（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章）

鈴木　隆（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ章）

渡部　紀（Ⅶ章）

編集は、渡部・鈴木がこれにあたった。

4．土壌サンプル分析は㈱古環境研究所に委託した。

5．本書中の地形図は、国土地理院発行の１：50,000『仙台』と１：10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。

6．遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。

7．遺構略号は、全遺構に通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS-　）を付した。

8．本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・佐藤：1970）を使用した。

目　　次

序　　文

例　　言

Ⅰ　はじめに…… 1

Ⅱ　仙台城跡の概要…… 3

Ⅲ　調査計画と実績…… 6

Ⅳ　第15次調査

1．調査目的及び調査経過…… 8

2．旧地形及び基本層序…… 9

3．検出遺構……10

4．出土遺物……28

5．まとめと考察……32

Ⅴ　第16次調査

1．調査目的及び調査経過……33

2．旧地形及び基本層序……34

3．検出遺構……37

4．出土遺物　……57

5．考察　……84

6．まとめ　……87

Ⅵ　理化学分析　……88

Ⅶ　絵図・文献史料の調査　……91

Ⅷ　総括　……97

Ⅰ　はじめに

平成18年度は、仙台城跡遺構確認調査第２次５カ年計画の１年次にあたり、下記の体制で臨んだ。(敬称略、順不同)

調査主体　　仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

発掘調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。なお、平成18年10月をもって調査指導委員会の任期が終了したため、同年11月から新たに調査指導委員会を組織した。

委員長　　齋藤　鋭雄（宮城県農業短期大学名誉教授　近世史）

副委員長　　岡田　清一（東北福祉大学教授　中世史）

委　　員　　鈴木　　啓（福島県考古学会会長　考古学）〔平成18年10月まで〕

西　　和夫（神奈川大学教授　建築史）

北垣聰一郎（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員　石垣・城郭研究）

千田　嘉博（奈良大学文学部助教授　城郭考古学）〔平成18年10月まで〕

藤沢　　敦（東北大学特認助教授　考古学）〔平成18年11月から〕

岡崎　修子（㈶仙台ひと・まち交流財団仙台市山田市民センター館長）〔平成18年11月から〕

仙台城跡調査指導委員会開催日

第15回：平成18年11月10日　第１次５ヵ年計画成果報告・第２次５カ年計画報告・第16次調査中間報告

第16回：平成19年３月23日　第15・16次調査最終報告・追廻調査報告

（仙台城跡の調査指導会を平成18年７月12日に実施し、平成18年度調査計画報告・第１次５カ年計画成果報告・第15次調査成果報告を行った。）

発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々からご協力をいただいた。

宮城県護国神社

資料提供　　宮城県図書館、㈶斎藤報恩会、仙台市博物館

さらに、下記の諸機関の方々から適切な御教示・御協力をいただいた。

本中　眞、坂井秀弥、白崎恵介（文化庁文化財保護部記念物課）、後藤秀一、笠原信男、（宮城県教育庁文化財保護課）、須藤　隆（東北大学）、北野博司（東北芸術工科大学）、関根達人（弘前大学）

藤沢　敦、高木暢亮、柴田恵子（東北大学埋蔵文化財調査研究センター）、鈴木裕子（株式会社　四門）

佐藤　洋、高橋あけみ、菅野正道、齋藤　潤（仙台市博物館）

調査担当　　文化財課　　参事兼課長　　阿部　　功

主幹兼仙台城史跡調査室長　　金森　安孝

主任　　熊谷　俊朗

主任　　渡部　　紀

主事　　鈴木　　隆

文化財教諭　　鹿野　仁子

調査参加者　　相澤　守、相澤美佐子、天野美津枝、伊藤竜子、伊藤美代子、内山陽子、遠藤誠子、太田裕子、小野寺美智子、小山政志、菅家婦美子、木幡真喜子、小林正夫、古山友子、佐藤悦子、佐藤　央、庄司明美、菅野　元、清藤智子、瀬川和代、大黒洋一郎、高野誠一、高橋弘子、竹内美江子、田中世津子、田中春美、対馬悦子、永野くみ子、畑田　峻、畠山昌子、菱沼みのり、星野宗行、堀内泰子、増田瑞枝、三上　剛、三嶋典子、山田君代、結城龍子、吉田秘絽子、渡邉　優

城館跡		15	茂庭西館跡	窯跡		43	西台畑板碑群	58	山田条里遺跡
1	仙台城跡	16	茂庭けんとう城跡	29	荒巻杉添窯跡	44	長町駅裏古碑	59	富沢遺跡
	天然記念物青葉山（網かけ部分）	17	富沢館跡	30	杉添東窯跡	45	宅地古碑群	60	山口遺跡
2	若林城跡	18	沖野城跡	31	五城中学校北窯跡	46	古峯神社板碑	61	下ノ内浦遺跡
3	北目城跡	19	日辺館跡	32	与兵衛沼窯跡	その他の中・近世の主な遺跡		62	六反田遺跡
4	西館跡	20	今泉遺跡	板碑・石碑		47	山田団地東南遺跡	63	元袋遺跡
5	茂ヶ崎城跡	21	小館（古館）跡	33	燕沢蒙古の碑	48	梨野Ａ遺跡	64	下ノ内遺跡
6	小鶴城跡	寺院・墓所		34	東昌寺裏経石出土地	49	仙台東郊条里跡	65	伊古田遺跡
7	郷六城跡	22	臨済院跡	35	澱不動尊文永十年板碑	50	カナクソ遺跡	66	王ノ壇遺跡
8	葛岡城跡	23	林子平墓	36	郷六大日如来の碑	51	南小泉遺跡	67	皿屋敷遺跡
9	郷六御殿跡	24	経ケ峯伊達家墓所	37	大梅寺建武の碑	52	養種園遺跡	68	大野田古噴群
10	国分鞭館跡	神社		38	郷六建武碑	53	御堂平遺跡	69	欠ノ上Ｉ遺跡
11	南目城跡	25	東照宮	39	川内古碑群	54	町田遺跡	70	高田Ｂ遺跡
12	谷地館跡	26	大崎八幡宮	40	片平仙台大神宮の板碑	55	北前遺跡	71	八ツ口遺跡
13	茂庭大館跡	27	亀岡八幡宮	41	馬越石塚	56	杉土手（鹿除土手）		
14	峯館跡	28	熊野新宮社宿坊跡	42	蛸薬師古碑群	57	山田上ノ台遺跡		

第１図　仙台城跡と周辺の遺跡

Ⅱ　仙台城跡の概要

１．仙台城跡の地理的環境と現況

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口渓谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約40mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には御裏林と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物青葉山となっている。御裏林跡では、３条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡東側に位置する大手門跡付近には、約９mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和42年に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を水堀と土塁に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川護岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

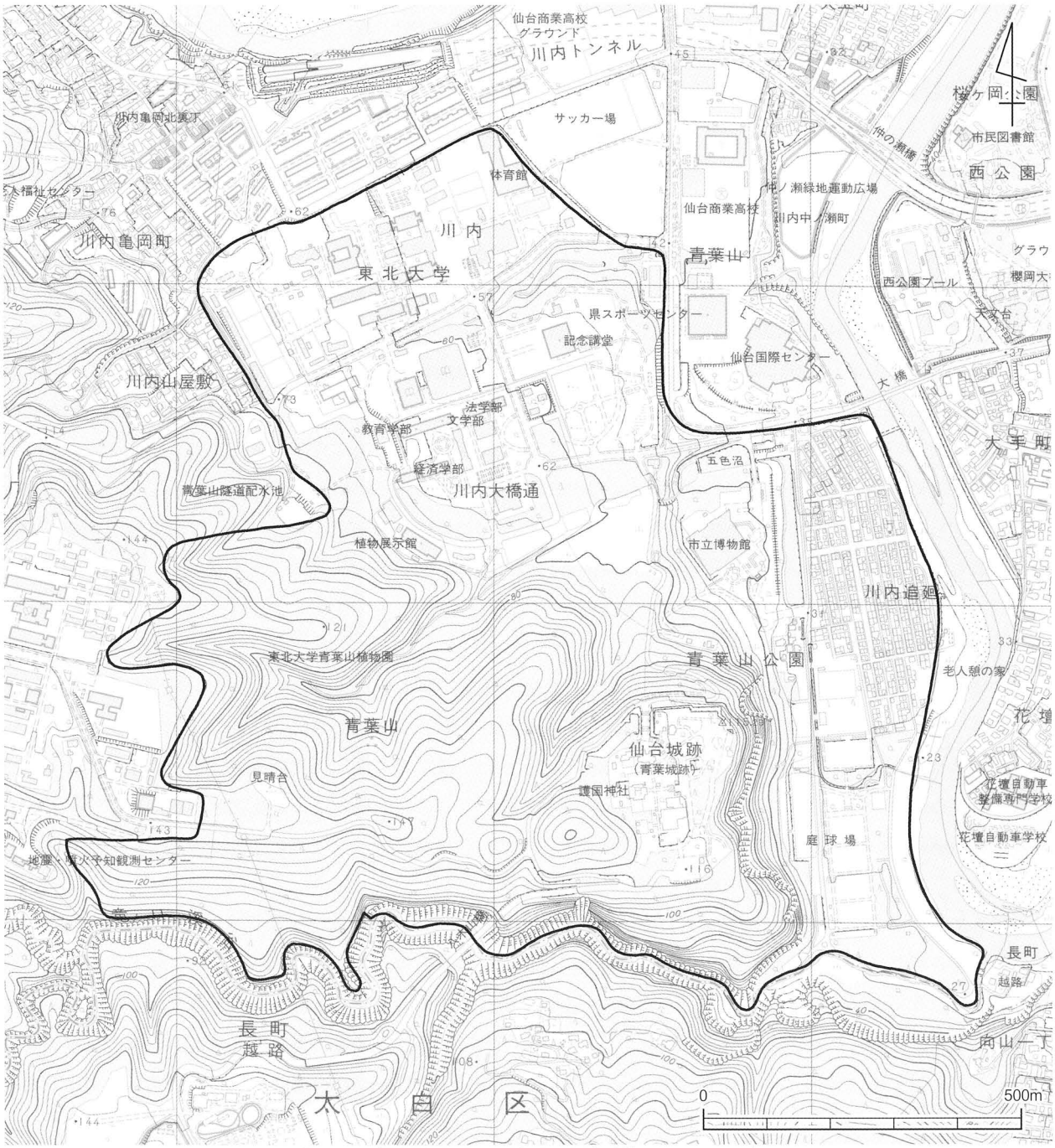
２．仙台城跡の歴史的背景

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長５年［1600］12月24日、城の縄張りが開始され、翌年１月から普請に着手、工事は慶長７年［1602］５月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通って中門を経て本丸詰門に至るものと、巽門、清水門、沢門を通るものがある。

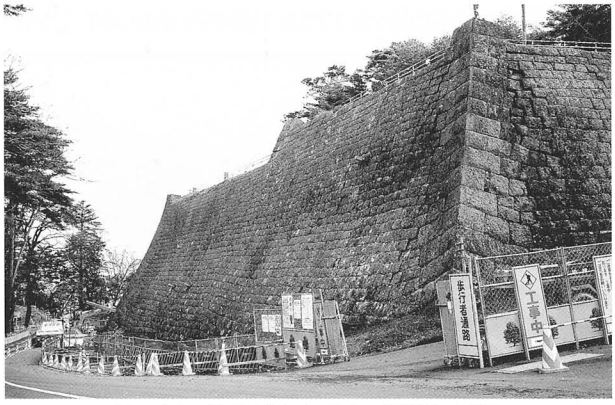
絵図や文献などによれば（註１）、本丸には詰門を入った東側に天皇家や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・艮櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保３年［1646］４月の地震によって倒壊したとする記事がみられ（註２）、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年［1882］の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年［1945］７月、太平洋戦争による米軍の空襲によって焼失した。現在では、本丸北壁や随所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており（註３）、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。

第２図　焼失以前の大手門と脇櫓（1935年頃）



第３図　仙台城跡（現況地形図と遺跡範囲・1/10,000）



第４図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣
解体修復工事前（北西から）

第５図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣
解体修復工事後（北東から）

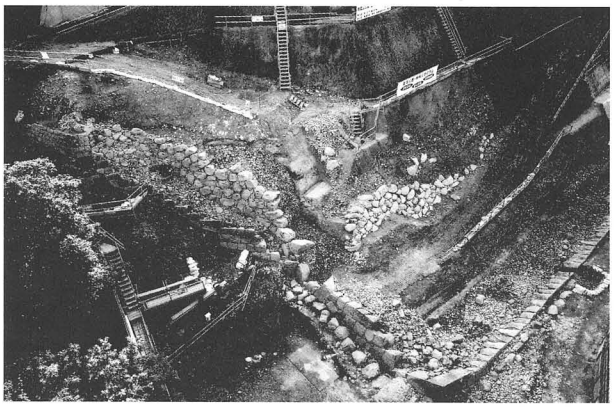
3．仙台城跡の発掘調査

仙台城跡のこれまでの調査には、昭和58年［1983］から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査（註４）と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58･59年［1983･1984］に実施された三の丸跡の発掘調査（註５）があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第１次発掘調査である。

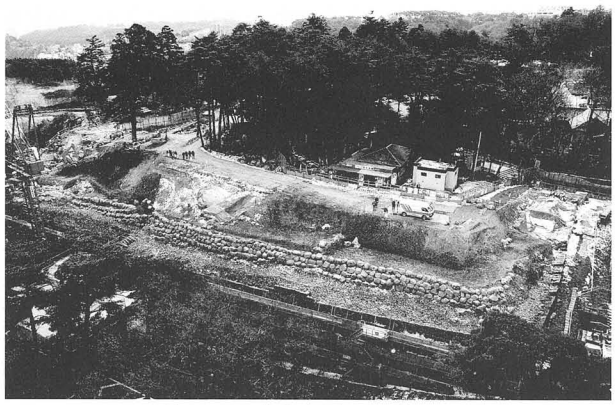
本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成９年［1997］度から実施されている。（註６）この石垣修復工事に伴う本丸１次発掘調査は、平成９年［1997］７月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年［2000］９月に石材9,106石と、Ⅱ期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年［2004］３月に工事が終了した。

石垣解体に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、Ⅰ期からⅢ期までの石垣の変遷や構造を確認した。石材調査では各種の刻印や朱書、墨書などを多数検出し、矢穴や石材加工技術の変化も確認している。石垣は表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容が顕著であり、発掘調査で石垣背面の土木工事の痕跡を考古学的な手法によって層位的に精査し、盛土の重複関係や採集遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により大別している。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（Ⅰ期）し、地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（Ⅱ期）され、その後の地震によりこのⅡ期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（Ⅲ期）されたとして検討を重ねている。（註７）

註１　『仙台城下絵図』（寛文４年［1664］宮城県図書館蔵）や『肯山公造制城郭木写之略図』（四代藩主綱村時代、17世紀後半（推定）宮城県図書館蔵）には本丸御殿の建物群が描かれ、『貞山公治家記録』にも大広間の記事が散見できる。建物群の考察については、佐藤巧「仙台城の建築」（仙台市教育委員会『仙台城』1967）・「仙台城館および周辺建物復元考」（仙台市博物館『調査研究報告第６号』1986）・伊東信雄「仙台城の歴史」・三原良吉「仙台城年表」（仙台市教育委員会『仙台城』1967）などがある。
註２　義山公治家記録、正保３年［1646］４月28日條
註３　貞山公治家記録、慶長５年［1600］12月24日條
註４　東北大学埋蔵文化財調査年報１～17（東北大学埋蔵文化財調査センター1985～2002）
註５　発掘調査報告書『仙台城三ノ丸跡』（仙台市教育委員会1983）
註６　仙台城跡石垣修復等調査指導委員会（平成13年度に仙台城石垣修復工事専門委員会と改編）資料・議事録（仙台市建設局1997～2003）
註７　本丸１次発掘調査成果に係る主な参考文献　金森安孝「仙台城本丸跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル442号』1999）・金森「仙台城本丸の発掘と出土陶磁」（『貿易陶磁研究No.19』1999）・金森/我妻仁「仙台城本丸跡　築城期及び修復石垣の発見」（『考古学ジャーナル456号』2000）・我妻「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」（『宮城考古学第２号』2000）・金森「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」（『日本歴史第626号』2000）・我妻「仙台城本丸跡石垣における階段状石列の構造と役割（予察）」（『宮城考古学第３号』2001）・金森/我妻「仙台城本丸跡Ⅲ期石垣の発掘調査－現存石垣の構築技術－」（『考古学ジャーナル474号』2001）・金森/根本光一「仙台城石垣の石材調査」（『考古学ジャーナル484号』2002）・伊藤隆「仙台城石垣の石材調査」（東北芸術工科大学『石垣普請の風景を読む』2003）・金森『仙台城本丸跡、１次調査 第４分冊 石垣図版編』（仙台市教育委員会 2004）



第６図　本丸北壁石垣北東角部
旧石垣（Ⅰ・Ⅱ期）検出状況（北東から）



第７図　本丸北壁石垣背面
階段状石列検出状況（北西から）

Ⅲ　調査計画と実績

平成18年度は、仙台城跡遺構確認調査の第２次５カ年計画１年次にあたる。昨年度までの第１次５ヵ年計画では、国指定史跡仙台城跡の全体像を把握することを目標として、遺構の遺存状況、種類、規模、配置等の確認を目的とする遺構確認調査と、石垣の破損状況や石積みの特徴を確認することを目的とする石垣現況調査、測量調査を実施してきた。また、これまで５年次にわたる調査により、本丸大広間跡や巽櫓跡、本丸での遺構現況調査などを行ってきた。

第１表　これまでの調査実績

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第１次	大広間跡（１次）	185㎡	平成13年９月17日～12月27日
第２次	清水門跡付近石垣	210㎡（立面）	平成13年11月30日～平成14年２月13日
第３次	大番士土手跡・御守殿跡・懸造跡	1,400㎡	平成14年５月20日～平成15年１月31日
第４次	巽櫓跡	110㎡	平成14年５月20日～８月31日
第５次	大広間跡（２次）	470㎡	平成14年８月５日～12月20日
第６次	仙台城跡（全域）	約145ha	平成15年５月７日～８月８日
第７次	大広間跡（３次）	258㎡	平成15年８月４日～12月25日
第８次	登城路跡	58㎡	平成15年11月12日～12月25日
第９次	広瀬川護岸石垣	50㎡（立面）	平成15年12月９日～平成16年２月５日
第10次	大広間跡（４次）	397㎡	平成16年７月20日～12月24日
第11次	登城路跡・広瀬川護岸石垣	349㎡（立面）	平成16年12月18日～平成17年３月31日
第12次	大広間跡（５次）	446㎡	平成17年５月26日～10月19日
第13次	三の丸堀跡（１次）	86㎡	平成17年11月１日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣	627㎡	平成18年１月16日～１月20日

第２次５カ年計画では、引き続き、国指定史跡仙台城跡における全体像の把握を目的として、遺構確認調査と石垣現況調査、測量調査、絵図等の資料調査などを実施する予定である。今年度は、本丸大広間周辺及び三の丸巽門跡周辺における遺構確認調査を実施した。発掘調査費については総経費36,532千円、国庫補助額18,266千円との内示を受けたことから、以下の調査計画を立案した。

第２表　調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間
第15次	大広間跡（６次）	230㎡	平成18年５月22日～８月31日
第16次	三の丸堀跡（２次）	472㎡	平成18年９月１日～11月30日

これまで、本丸では５次にわたる調査により、仙台城本丸御殿の中心的建物である大広間の礎石跡や雨落ち溝跡などを検出し、大広間建物跡の位置及び規模（東西33.5m、南北26.3m）を確認した。また、大広間の西側に位置する御成門跡の礎石や、そこから大広間跡に延びる通路跡と考えられる石敷き遺構を検出した。さらに大広間の北側では、大広間に先行する、石敷きを伴う礎石建物跡を一棟、確認した。

第15次調査は、大広間跡の北東角および北東周辺（１区）、南東角（２区）における遺構確認等を目的として実施した。調査では、大広間雨落ち溝跡北東角、南東角を検出した。また、大広間内部の整地層直下より、石敷き遺構を検出した。石敷きは大広間跡内部から雨落ち溝跡の外側にも分布しており、昨年度の調査成果と合わせて大広間に先行する遺構の拡がりが明らかになった。大広間跡の北東周辺では暗渠や塀跡等と考えられる溝跡５条を検出した。これらには時間的な変遷が認められ、大広間とその周辺の建物や庭園などとの位置関係や御殿全体の配置を検討する上で重要な成果である。遺物は、瓦・磁器・陶器・金銅金具・銅釘などが出土した。

第16次調査は、三の丸巽門跡東側周辺の遺構確認を目的として実施した。堀跡の調査（１区）では、堀の北岸と西岸を確認し、北岸・西岸ともに杭列を検出した。堀の規模は、南北幅が35m以上、深さが現地表面より６m以上となる大規模なものであることが明らかとなった。土塁の調査（３区）では、土塁の積み土を検出し、異なる土を版築状に積んでいることを確認した。遺物は、瓦・磁器・陶器・木製品・鉄製品などが出土した。特に３区では、18世紀後半から19世紀前半を主体とする良好な遺物包含層が確認された。

第３表　調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第15次	大広間跡（６次）	311㎡	平成18年６月１日～８月４日
第16次	三の丸堀跡（２次）	522㎡	平成18年９月１日～11月30日

第８図　仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図（1/5,000）

Ⅳ　第15次調査

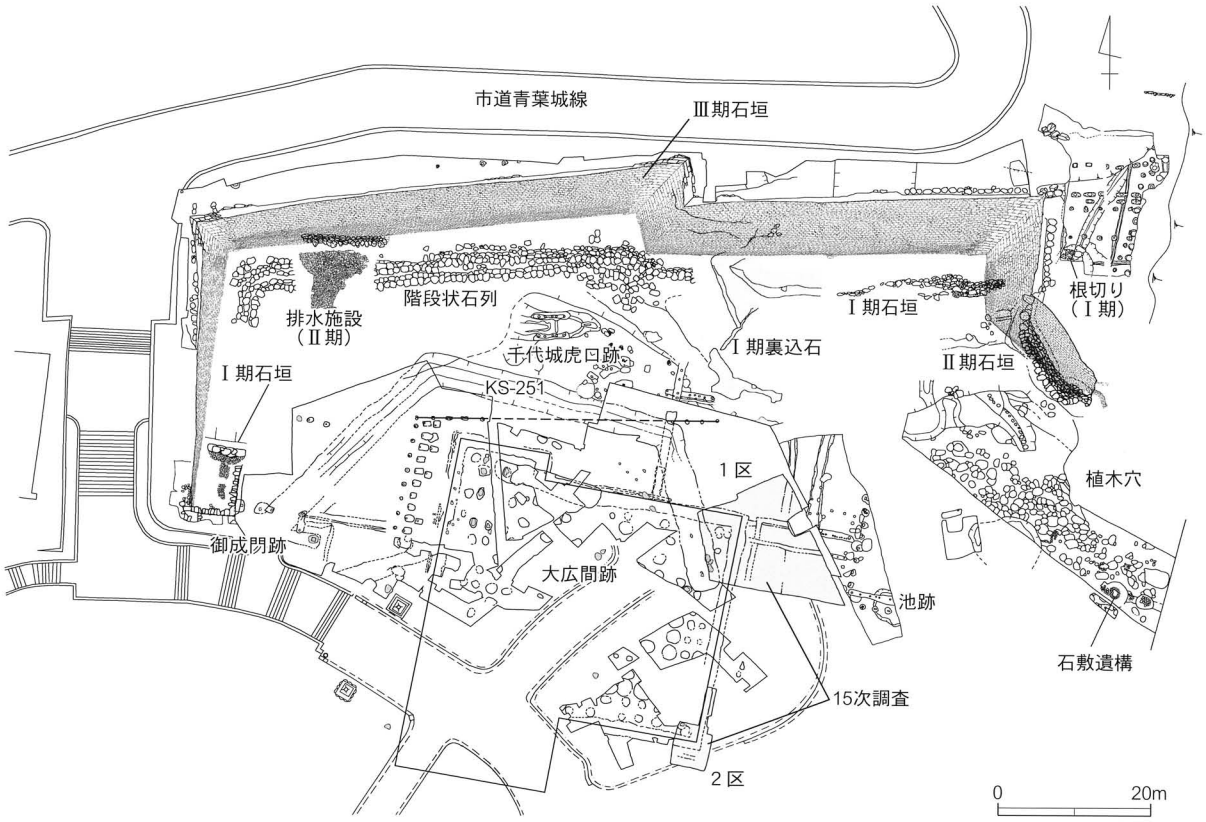
1．調査目的及び調査経過

第15次調査は、大広間跡の北東角および北東周辺（１区）、南東角（２区）における遺構確認を目的として平成18［2006］年６月１日から同年９月30日まで実施した。調査面積は、青葉山公園として管理されている仙台市有地内の311㎡である。大広間跡に関する調査としては第６次にあたる。

調査目的は、①大広間北東側周辺における遺構確認、②昨年度調査で大広間の北側より確認された、大広間に先行する石敷きを伴う礎石建物跡に関連する遺構の確認、③大広間南東角および周辺の遺構確認の３点である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影、遺物の表面採集等の後、５月24日から安全フェンスを設置し、６月１日から重機による表土の除去作業を開始した。人力による遺構面の検出作業は６月１日から開始した。電気ケーブルや水道管を埋設した際の掘り方といった極めて新しい時期の遺構である、撹乱の除去作業に伴い、その壁面および平面の精査を行いながら明治時代以降の整地層であるⅡ層を除去し、江戸時代の盛土層または整地層であるⅢ層の上面で遺構検出作業を行った。

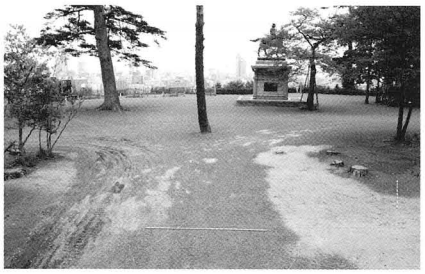
調査では、大広間雨落ち溝跡北東角、南東角を検出した。また、大広間内部の整地層直下より、石敷き遺構を検出した。石敷きは大広間跡内部から雨落ち溝跡の外側にも分布している。雨落ち溝跡北東角の北30cmでは、これらの石敷きを伴う礎石を１基検出しており、昨年度検出した礎石建物跡と一連のものと考えられる。これにより、大広間に先行する遺構の拡がりが明らかになった。大広間跡の北東周辺では暗渠や塀跡等と考えられる溝跡５条を検出した。これらの間には時間的な変遷が認められ、大広間とその周辺の建物、庭園などとの位置関係や御殿全体の配置を検討する上で重要な成果である。遺物は、磁器、陶器、土師質土器、金銅金具、銅釘、瓦などが出土した。



第９図　仙台城本丸跡北部・大広間跡調査区位置図（1/1,000）

第15次調査は、平成18年３月23日の第14回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了解を得て実施した。７月４日に宮城県、７月11日仙台城跡調査指導委員の現場指導を受け、平成18年７月12日に開催された仙台城跡調査指導会において、調査成果の中間報告を行い了承を得た。７月20日に記者発表、７月22日に現地説明会（450名参加）を実施した。８月２日には調査区の埋め戻しやフェンス撤去等の作業を終え、調査箇所は現状に復した。平成19年３月23日に第16回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。

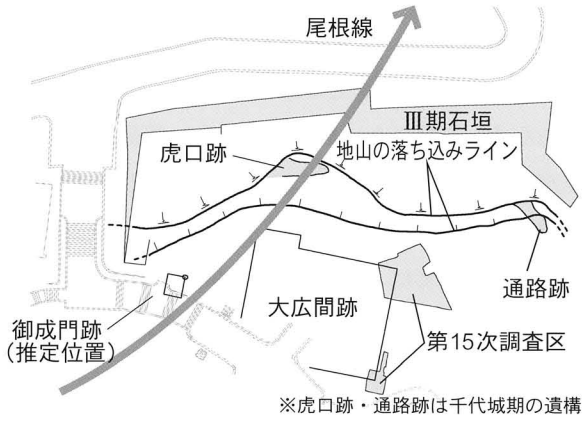
第10図　調査前状況（北から）



第11図　調査前状況（南から）

２．旧地形及び基本層序

大広間周辺の原地形をみると、その北側前方に中世千代城の虎口跡が検出された尾根の張り出しがある（第12図）。この尾根線は、御成門跡付近から大広間跡の北西角部を通り北東方向へ延びるもので、大広間のある平場の地形は、本来東へ向けて緩やかに傾斜していたものと考えられる。



第12図　本丸跡北部平面模式図（旧地形と検出遺構）

基本層は、Ⅰ層（現表土）、Ⅱ層（近代以降の整地層）、Ⅲ層（近世の整地層）、Ⅳ層（地山直上の旧表土層）、Ⅴ層（地山）に大別される（第４表）。以下、概要を記す。

Ⅱ層はa～c層に細分した。Ⅱa、Ⅱb層は、一部白色粘土ブロックを含む近代以降の盛土層で特に２区に分布する。Ⅱc層は、大広間雨落ち溝廃絶直後の盛土層である。１、２区ともに分布するが、２区でより厚く堆積している。上面は硬く締まっており、一定期間路面であったと考えられる。

Ⅲ層は１区の大広間外側に堆積する盛土層のⅢ-１層、Ⅲ-２層と２区を中心に確認されたa～d層とに細分した。Ⅲ-１層は近世期の最も新しい盛土層で、その上面はKS-403・406（東西方向の塀跡）やKS-405（暗渠状遺構）の検出面である。Ⅲ-2層はⅤ層またはⅣ層の直上にのる整地層で、KS-404・407（南北溝跡）の検出面である。大広間に先行する石敷き遺構もこの層の上面で構築されたものと推測される。Ⅲa層はⅡ層直下にみられる旧表土層で、特に２区においては層厚10～15cmと一定の厚さで堆積している。一部雨落ち溝縁石抜き取り後のくぼみ内にも堆積していることから、大広間廃絶時からⅡc層が堆積するまでの旧表土層であったと考えられる。Ⅲb層は２区でのみ確認された盛

第４表　第15次調査基本層注記表

遺構番号	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
基本層序	Ⅰ	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有	弱	現表土層
	Ⅱa	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有	強	白色粘土ブロック、礫を多量含む
	Ⅱb	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	暗褐色砂質シルトブロック、礫を多量含む
	Ⅱc	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	有	中	明黄褐色粘質シルトブロックをやや多く含む。炭化物を多量含む。
	Ⅲ-1	7.5Y5/6	明褐色	粘質シルト	有	強	
	Ⅲ-2	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	にぶい黄橙色粘質シルトをまだら状に含む。Ⅴ層土をブロック状に多量含む。
	Ⅲa	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	弱	旧表土層
	Ⅲb	10YR4/5	褐色	砂質シルト	有	強	
	Ⅲc	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	強	7.5YR4/6褐色粘土ブロックをやや多く含む
	Ⅲd	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	
	Ⅳ	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	φ1～5　の炭化物粒を多量含む。旧表土層
	Ⅴ	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	強	地山層

土層である。この盛土により、大広間内部の整地面と雨落ち溝上面との間にあった10cm程の段差を埋め、その上面から雨落ち溝を掘り直していることが確認された。Ⅲc層は、2区で確認された大広間跡内部の整地層である。地山土を主体とする。1区における大広間内部の整地層（Ⅲe層）に対応する（Ⅲe層については「仙台城跡6」参照）。Ⅲd層は2区北部の大広間の外側に分布する盛土層で層相は異なるが1区Ⅲ-1層に対応する。

Ⅳ層はⅤ層（地山）上面に堆積した旧表土層とみられ、1区東側でのみ検出された。Ⅳ層上面では焼土遺構（KS-411）や溝跡（KS-410）などが一部面的に検出されている。断面観察でも、Ⅳ層上面およびⅤ層上面でそれぞれ遺構が確認されており、いずれも中世以前のものと考えられる。

3．検出遺構

（1）大広間跡

大広間礎石跡（KS-133、426、132、425、166、242）、雨落ち溝跡（KS-53）について記述する。

・KS-133礎石跡　1区、大広間落縁の北東角に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢe層上面である。平面形は、南側大部分を撹乱に切られているがほぼ円形であったと推測される。規模は、東西110cm以上、南北30cm以上、深さ34cm以上である。根固め石は、径5～10cmとKS-426に比べて小さく、多くが埋土下部にみられる。埋土はⅢe層土に極めて類似している。KS-426とKS-133は、その検出位置から、ともに大広間落縁の北東角にあたる。撹乱のため直接の切り合い関係は無いが、根固め石の大きさの違いとその位置関係から、両者には時間差があったものと考えられる。後述するが、大広間南東角では2基の礎石跡に切り合い関係が確認された。

・KS-426礎石跡　1区、大広間落縁の北東角に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢe層上面である。平面形は、北側大部分を撹乱に切られているがほぼ円形であったと推測される。規模は、東西70cm以上、南北20cm以上、深さ25cm以上である。根固め石は径5～25cmで、一部Ⅲe層上面より露出した状態で検出された。

・KS-132礎石跡　1区KS-426の南約1.8mで検出された。大広間落縁東辺に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢe層上面である。平面形は、不整円形である。規模は東西79cm、南北70cmである。根固め石の大きさは面的な検出に止めているが、径5～20cmのものが確認されている。

・KS-425礎石跡　1区KS-132の南約2mで検出された。大広間落縁東辺に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。KS-251（近代溝状遺構）の壁面で検出されており、遺構上部のほとんどが削平されている。規模は、東西38cm以上、南北51cm以上である。根固め石の大きさは径5～10cmである。

・KS-166礎石跡　2区、大広間落縁の南東角に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢb層上面である。平面形は不整円形である。規模は東西100cm以上、南北99cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。南東に隣接するKS-242礎石跡を切る。

・KS-242礎石跡　2区、大広間落縁の南東角に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢc層上面で、Ⅲb層に覆われる。平面形は不整円形である。規模は東西140cm以上、南北110cm以上である。根固め石の大きさは径5～25cmである。北西に隣接するKS-166礎石跡に切られる。

・KS-53雨落ち溝跡　今回の調査では、北東角（1区）および南東角（2区）を検出した。縁石はほとんど抜き取られており、両縁石の間に充填されていた玉石のみが帯状に検出された。今回の調査でも特に2区において、昨年度と同様、雨落ち溝跡に掘り直しによる改修の痕跡が確認された。

2区西壁の観察から、雨落ち溝に2つの掘り方を確認した。それぞれ、Ⅲc上面、Ⅲb上面と掘り込み面が異なり、時間差が認められた。

古段階の掘り方はⅢc層上面を掘り込み面とする。この段階では、雨落ち溝から大広間内部にかけて高さ10cmほどの段差がみられる。2区の雨落ち溝南辺より検出された6石の縁石は、帯状に残る玉石の上面より、いづれも10～15cm低く、かつ面的にほぼ水平で内側の面も揃っていることから、雨落ち溝古段階の縁石であると推定される。縁

石は割り面または平坦な自然面をもつ石材で、周囲には形状を整えるための剥離痕が複数認められる。

新段階の掘り方はⅢb層上面を掘り込み面とする。この段階の埋土は、おおむね縁石抜き取り後に堆積したⅢa層に切られ、わずかに残されている。Ⅲb層の堆積によって、雨落ち溝と大広間内部の整地層との間にあったレベル差は無くなっており、これに伴い縁石、玉石ともに少なくとも20cm程度かさ上げされたものと推測される。

・KS-84素掘り溝跡　1区西寄りの箇所で雨落ち溝を東西に切る撹乱の底面で長さ90cm を検出した。上部を雨落ち溝の掘り方に切られており、掘り込み面は不明である。規模は、上端幅25cm、下端幅15cm、深さ18cm 以上である。断面形は、底面がほぼ平坦で壁がやや外傾して立ち上がる逆台形を呈する。埋土は地山土を含む人為堆積土である。これらの特徴から、これまで大広間西辺、北辺で検出されてきたKS-84素掘り溝跡に連続するものと判断した。埋土中より遺物の出土は見られなかった。

（2）大広間北東周辺の検出遺構

ここでは、1区大広間北東周辺より検出された、大広間建物跡と基軸を同じくする遺構を一括して扱う。これらの遺構には時間的前後関係が認められる。検出面の古い順に記述する。

・KS-407溝跡　大広間雨落ち溝北東角から東約5.5mで検出された南北方向に延びる溝跡である。調査区の北端から南端の壁面でも確認されており、全長約14.5mを検出した。その軸線は大広間南北軸線にほぼ平行する。規模は、上端幅約100cm、下端幅約60cm、深さ35cm 以上である。断面形は、壁が湾曲して立ち上がるU字形を呈する。埋土は1層であることから、比較的短期間に埋没したものと考えられる。

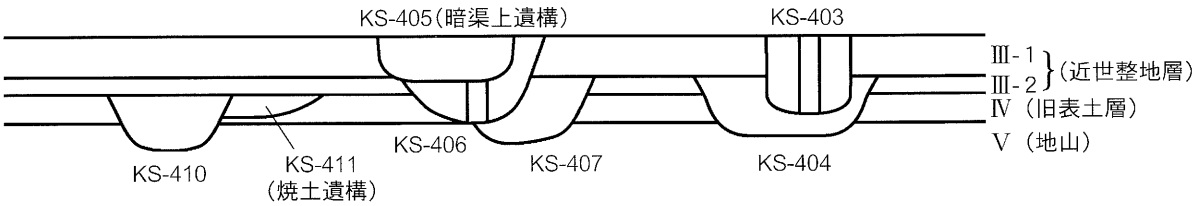
・KS-404溝跡　KS-407にほぼ平行して、その東約3mで検出された南北方向に延びる溝跡である。KS-407と同様、掘り込み面はⅢ-2層上面で、Ⅲ-1層に覆われる。調査区の南端でも確認されており、全長約8.5mを検出した。規模は、上端幅約200cm、深さ40cm 以上である。断面形は、壁が湾曲して立ち上がるU字形を呈する。埋土は1層であることから、比較的短期間に埋没したものと考えられる。

・KS-406塀跡　雨落ち溝跡北東角の東約2mで検出された、東西方向に延びる塀跡である。検出面はⅢ-1層上面である。約3.5m分を検出した。雨落ち溝跡北辺ラインの延長線上に位置するが、その西端でKS-405に切られる。しかし、撹乱の壁面観察によりそこから西へは延びないものと考えられる。

規模は、上端幅推定70cm、深さ約40cm で埋土中央に幅10cm の柱痕跡が確認された。断面形は、底面がほぼ平坦で壁がやや外湾して立ち上がる。

・KS-405暗渠状遺構　KS-406の北約30cm でそれとほぼ重なるように検出された暗渠状遺構である。検出面はⅢ-1層上面である。KS-406の西端で南に90°折れるL字形に全長約10.5mを検出した。規模は、上端幅60～70cm、深さ20cm で、断面形はⅢ状を呈する。埋土上部には径5～20cm の円礫が帯状に配されている。中央が一段低く、砂質土の堆積がみられた。堆積環境を調べるため土壌サンプルの珪藻分析を行った（Ⅵ理化学分析参照）。

・KS-403塀跡　KS-406に平行して、その南約2.5mで検出された。大広間建物跡推定ライン北辺の延長線上に位置する。検出面はⅢ-1層上面である。規模は、上端幅50～60cm、深さ40cm 以上である。断面形は、両壁がほぼ垂直に立ち上がる長方形を呈する。埋土は1層である。KS-403は雨落ち溝東辺の中心から東約4mの箇所で途切れており、その端部に柱痕跡がみられることから、この部分に戸がついていた可能性が高い。柱痕跡は西側でのみ検出し



第13図　大広間北東周辺断面模式図

たが、対となる柱との間隔は1.5m程であったと推測される。遺構の西端は雨落ち溝跡に近接するが、KS-430に切られる。

・KS-430　KS-403の西端で検出された。検出面はⅢ-１層上面である。規模は、東西110cm、南北65cm、深さ26cm である。柱の抜き取り等KS-403塀跡の廃絶に関わる可能性が高い。

（３）大広間南東周辺の検出遺構

ここでは、２区大広間南東周辺より検出された遺構を一括して扱う。

・KS-458　北部で検出された。検出面はⅢd層上面である。雨落ち溝跡掘り方に切られる。長軸は東西方向を向くが、平面形は不整形を呈する。規模は東西50cm、南北40cm である。雨落ち溝との関係は判然としないが、この部部に残された縁石の向きが東西方向となっており、何らかの関連性を持つ可能性が指摘される。

・KS-442　KS-166（大広間落縁南東角礎石跡）の東約2.5mで検出された。検出面はⅢa層上面である。規模は南北35cm、深さ46cm である。断面形はV字形を呈する。埋土は２層に分かれ、底面に径５～８cm の円礫が多量見られる。

・KS-455　KS-442の直下から断面のみ検出した。上部を雨落ち溝跡の掘り方に切られており、掘り込み面は不明である。規模は、南北38cm、深さ46cm 以上である。底面が20cm の幅で一段低く窪んでおり、柱痕跡である可能性も考えられる。

・KS-439　雨落ち溝南東角の南約2.5mでL字形の溝跡で全長約2.5mを検出した。掘り込み面はⅢd層上面である。規模は、上端幅40cm で深さ42cm である。大広間と軸線を同じくするが性格は不明である。

・KS-440　KS-439に切られる形で部分的に検出した。掘り込み面、規模ともに不明である。

・KS-456　雨落ち溝跡南東角から南へ延びる暗渠状遺構であるが、東西の幅は不明である。深さ約52cm で埋土中に多量の円礫を含む。KS-439を切る。

・KS-452　２区南壁寄りで東西に長く検出した。検出面はⅢa層上面である。規模は、東西長2.3m以上である。

（４）その他の近世遺構

上述した以外の近世遺構を一括して扱う。記述は検出面毎に行う。遺構は全て１区より検出されたものである。

〈Ⅲ-１層上面検出遺構〉

・KS-402　調査区南東部の東壁際で検出された。北半を撹乱で切られており、平面形は不明である。規模は、東西36cm 以上、深さ20cm である。断面形は浅いⅢ形を呈する。

・KS-408　調査区東部より検出された。平面形は不整円形である。規模は、東西90cm 以上、南北70cm で、深さは12cm と浅い。底面の凹凸が著しい。埋土中に多量の炭化物を含んでいる。KS-443を切る。

・KS-424　調査区中央より平面のみ検出された柱穴。規模は、径約31cm である。やや北寄りに径13cm の柱痕跡が確認された。

・KS-428　調査区東部より検出された土坑。平面形は不整形である。規模は、東西125cm 以上、南北100cm 以上、深さ39cm である。断面形は碗形を呈する。KS-403塀跡を切る。

・KS-429　調査区東部より平面のみ検出された。平面形は東西に長い楕円形である。規模は東西185cm 以上、南北118cm 以上である。埋土中に径10～30cm の非常に風化した凝灰岩礫を多量含む。

・KS-431　雨落ち溝跡北東角付近で検出された。検出面はⅢe層上面である。一部北側を撹乱により切られるが、平面形は不整円形である。規模は、東西78cm、南北65cm 以上、深さ30cm である。雨落ち溝跡の掘り方を切る。KS-403,430の延長線上に位置する。

・KS-438　調査区中央より断面のみ検出された柱穴。規模は、上幅30cm、深さ43cm である。埋土中に幅10cmの柱痕跡が確認された。

・KS-451　調査区中央より平面のみ検出されたピット。平面形は円形である。規模は、径約15cmである。雨落ち溝跡の掘り方を切る。

〈Ⅲ-２層上面検出遺構〉

・KS-400　調査区南東部より検出された土坑である。検出面はⅢ-２層であるが、付近が近代以降の削平を受けているため、Ⅲ-１層上面より掘り込まれた可能性もある。西半部を撹乱で切られるが、平面形はほぼ円形を呈するものと考えられる。規模は、東西80cm 以上、南北85cm 以上、深さ30cm 以上である。断面形は碗形を呈する。

・KS-401　調査区南東部より検出された。遺構の中央を撹乱で切られており、西側をⅢ-１層で覆われるため平面形は不明である。規模は、東西110cm 以上、南北88cm 以上、深さ29cm である。埋土は3層に分かれるが、均質な褐色粘質シルトを含むことから、植栽痕である可能性が考えられる。

・KS-416　調査区南東部より断面のみ検出された。規模は、深さ26cm 以上である。KS-404を切る。

・KS-417　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅58cm、深さ42cm である。KS-416に切られる。

・KS-422　調査区東部より断面のみ検出されたピットである。規模は、幅18cm、深さ30cm である。

・KS-433　調査区北西部より断面のみ検出された。規模は、上幅70cm 以上、深さ38cm 以上である。埋土は２層に別れるが、中央が柱状に立ち上がり、瓦片が出土した。

・KS-441　雨落ち溝跡北東角付近より断面でのみ検出された。掘り込み面については、上部を雨落ち溝跡の掘り方に切られており、Ⅲ-１層上面である可能性もある。規模は、幅20cm、深さ40cm である。断面形はV字形を呈する。

・KS-444　調査区北東部より断面のみ検出された。規模は、幅22cm、深さ42cm である。Ⅲe層に覆われる。

・KS-445　調査区東部より断面のみ検出された。規模は、幅26cm、深さ41cm である。Ⅲ-１層に覆われる。

・KS-457　調査区中央やや南側より検出された。平面形は長楕円形である。規模は、東西71cm、南北160cm である。埋土中に割り礫、瓦片を多量含む。KS-405暗渠状遺構を切る。

〈その他〉

・KS-443　調査区東部、KS-408の直下より検出された。掘り込み面は不明であるが、埋土の特徴がKS-407に類似することから近世遺構の可能性が高いと判断した。規模は、上幅46cm、深さ42cm 以上である。

（５）大広間に先行する近世遺構

・KS-432礎石跡　１区の北側から石敷きを伴う礎石跡を１基検出した。礎石は、長径35cm 以上、短径35cm で平坦面を持つ安山岩質の石材である（第５表）。柱の痕跡等は確認されなかった。

第５表　礎石観察表

調査次数	No.	長径（cm）	短径（cm）	上面レベル（m）	備考
15	KS-432	35.0～	35.0	115.392	灰色、安山岩質
12	1	28.5	26.5	115.572	やや黒味を帯びた灰色、安山岩質
12	2	33.5	26.5	115.574	白色、多孔質
12	3	38.0	31.0～	115.513	やや青味を帯びた灰色
12	4	48.0	29.0	115.494	灰白色、安山岩質

遺構の構築順序は、地山（Ⅴ層）上面から掘り込まれた掘り方内に礎石を据えた後、その周縁部に直接して層厚２～５cm の粘質土（Ⅲ-２層）が貼られている。Ⅲ-２層は昨年度調査のⅢg層に対応する。さらに、その粘質土の上面に径１～３cm の玉砂利が敷かれており、玉砂利の一部は礎石の周縁を覆うように検出された。なお、KS-432は雨落ち溝跡の外側で検出されたが、周囲の石敷きの一部が、雨落ち溝跡の掘り方に切られており、大広間に先行するものと考えられる。これらの特徴は、昨年度大広間の北側で検出された礎石建物跡と同様であり、一連のものである可能性が高い。ただし、礎石上面をレベルを見ると、大広間北側の礎石群に比べ10～18cm 低い。礎石近くの撹乱壁面において、Ⅲ-２層中より近世期と思われる瓦片が出土した。

・石敷き遺構　大広間内部の整地層（Ⅲe層）直下または大広間の東側Ⅲ-１層に覆われた状況で検出した。石敷きは、撹乱等の壁面や一部面的に確認されており、分布は、１区北西部より南部にかけて拡がっており断続的ではあるが南北約７m、東西約３mの拡がりが確認された。

（６）中世以前の遺構

掘り込み面は、近世整地層直下のⅣ層（旧表土層）上面とⅤ層（地山）上面の２面認められる。近世整地層より下位の遺構として中世以前と一括したが、埋土中からの遺物の出土は無く、より詳細な遺構の年代については不明である。以下検出面毎に記述する。

〈Ⅳ層上面検出遺構〉

・KS-410　１区北部より検出された溝跡である。調査区北東より緩い弧を描きながら西へ延びており、今回の調査では全長約８ｍを検出した。規模は、上幅50～90cm で、深さは東側で40cm 以上となるが、西側では20cm と浅い。断面形は皿形を呈する。KS-411焼土遺構を切る。

・KS-411　１区北西部より平面のみ検出された焼土遺構。平面形は不整形である。規模は、東西112cm、南北135cm である。埋土中より、放射性炭素年代測定用サンプルを3点採取した。その結果、層年代補正値で、概ね15～16世紀の年代が得られた（Ⅵ　理化学分析参照）。KS-410に切られる。

・KS-435・436・437　いずれも1区西側のKS-251近代溝状遺構の東壁で断面のみ検出された。KS-435･436はKS-410の直下で検出された。規模は不明である。掘り込み面も不明であるが、埋土の特徴がKS-410に類似することから同じⅣ層上面の遺構と判断した。KS-437についても同様である。KS-437はKS-436の南50cm で検出された。規模は、上幅78cm、深さ20cm である。断面形は皿形を呈する。石敷き遺構に覆われる。

・KS453　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅30cm 以上、深さ20cm である。

〈Ⅴ層上面検出遺構〉

・KS-415　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅23cm、深さ21cm である。

・KS-419　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅38cm、深さ24cm である。埋土中に、柱状の立ち上がりがみられる。

・KS-420　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅68cm、深さ22cm である。埋土中に、柱状の立ち上がりがみられる。

・KS-421　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅26cm、深さ8cm 以上である。

・KS-423　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅26cm 以上、深さ16cm 以上である。KS-407に切られる。

・KS-454　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅94cm、深さ24cm である。KS-419に切られる。埋土中に、柱状の立ち上がりがみられる。

・KS-446　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅20cm 以上、深さ16cm 以上である。KS-404に切られる。

・KS-447　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅36cm、深さ42cm である。KS-448を切る。

・KS-448　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅26cm 以上、深さ10cm である。KS-447に切られる。

・KS-449　１区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅54cm、深さ22cm である。

〈その他〉

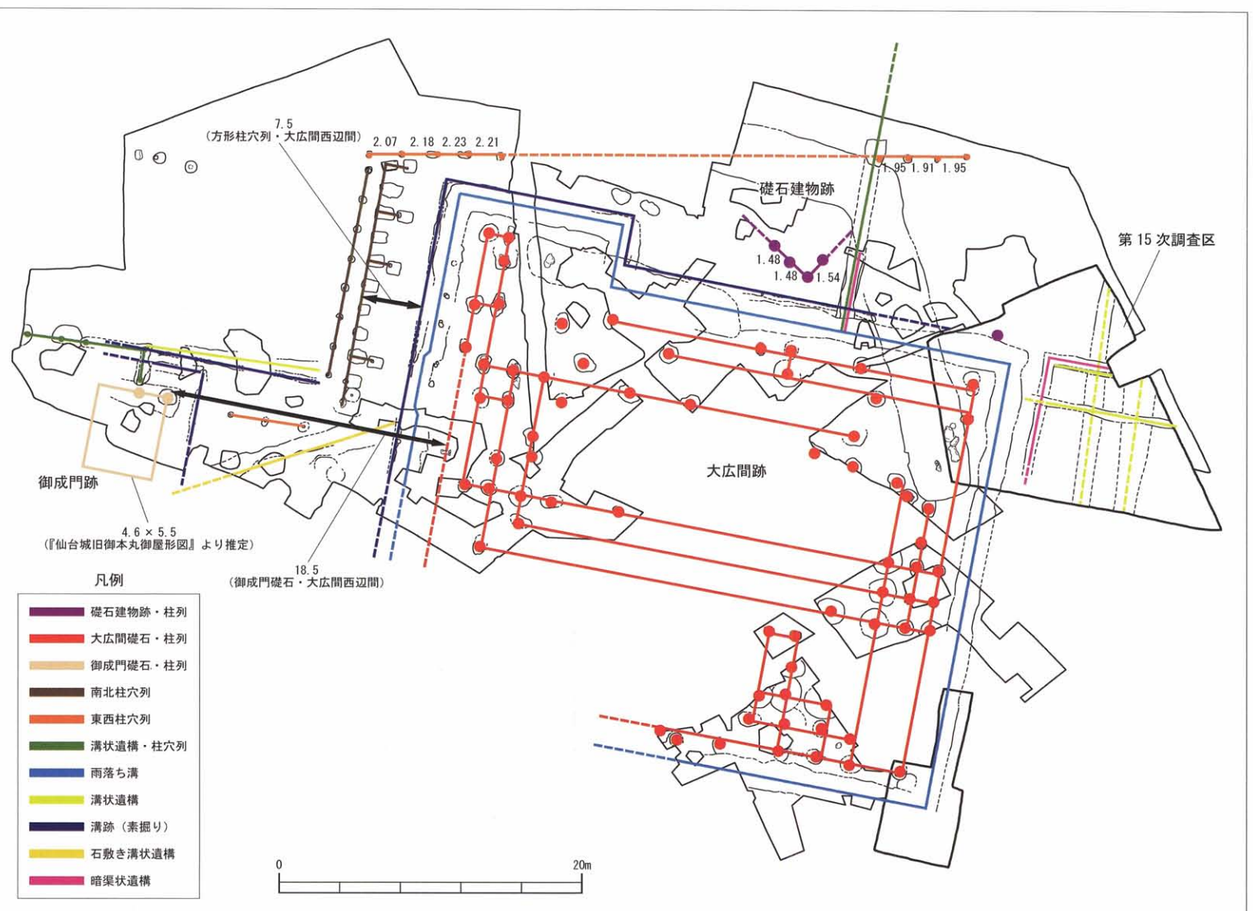
・KS-434　雨落ち溝跡北東角付近で断面のみ検出された。掘り込み面は不明であるが、黒色の均質な埋土は、他の近世遺構には全く見られず、上部を雨落ち溝に切られることと合わせて中世以前のものと判断した。規模は、推定で東西150cm 以上、南北160cm 以上、深さ20cm 以上である。

（７）近代遺構

・KS-251　大広間跡を一部壊しながらその北側にみられる大規模な溝状の遺構である。これまでの調査成果から、全長は約90mに及び全体形は両側が開いた「コ」字状をなす。規模は上端幅４ｍ、下端幅１ｍで深さは約1.6mである。昨年度の調査で底面より19世紀後半の磁器皿が出土している。

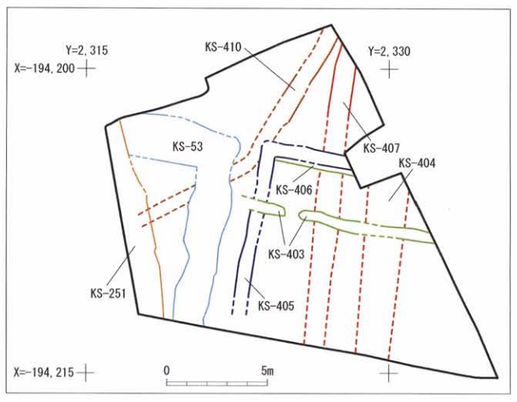
第12次調査　遺構検出状況（南から）

第12次調査　礎石建物跡検出状況（北から）



第16図　遺構計測図（1/400・数字の単位はm）

1区雨落ち溝平面合成写真（1/100）

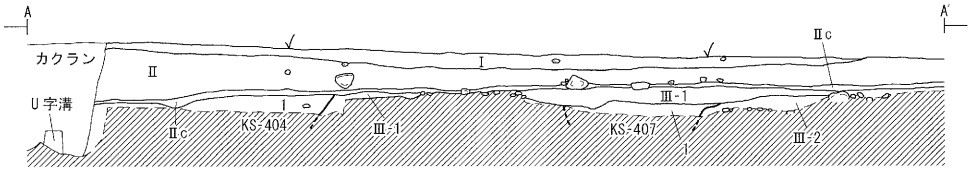


1区溝状遺構模式図（1/300）

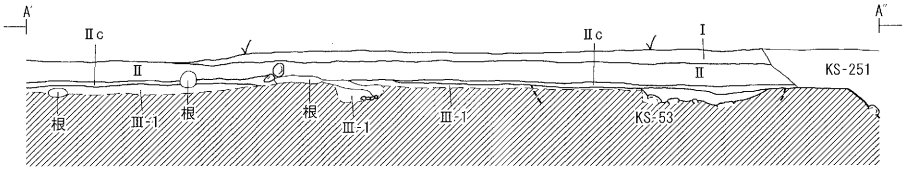
第17図　第15次調査全体遺構平面図（1/100）

2区平面合成写真（1/100）

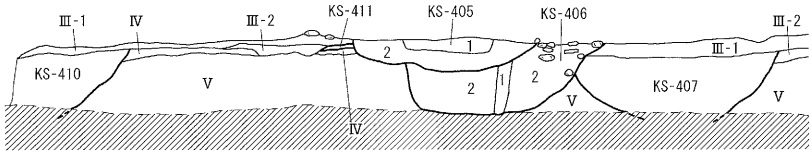
0　5m



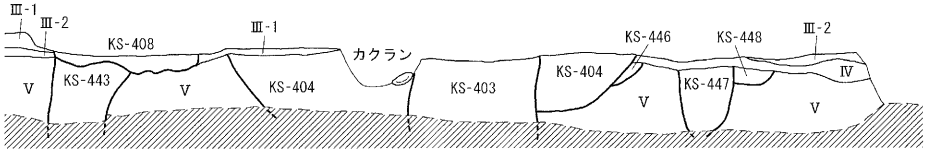
南壁断面図ａ



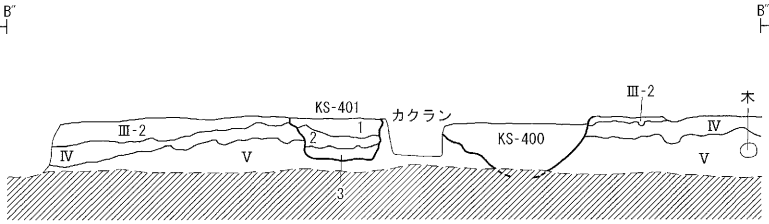
南壁断面図ｂ



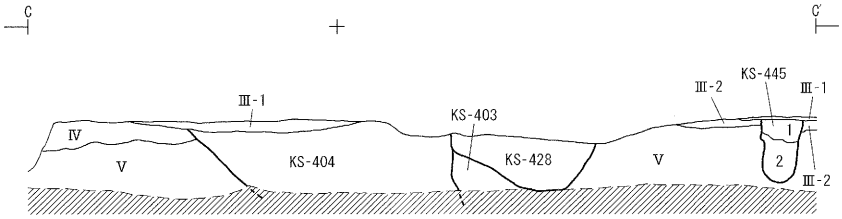
東部カクラン東壁北部断面図ａ



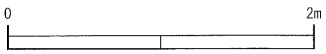
東部カクラン東壁北部断面図ｂ



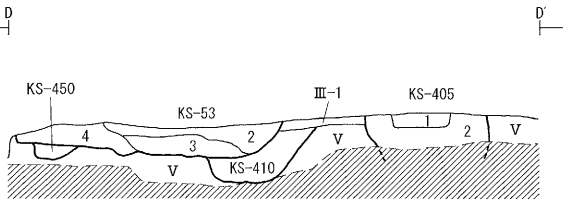
東部カクラン東壁北部断面図ｃ



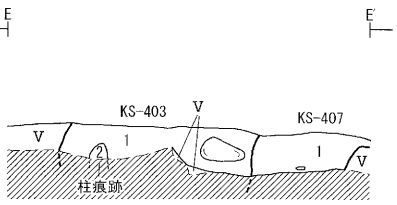
東部カクラン西壁断面図



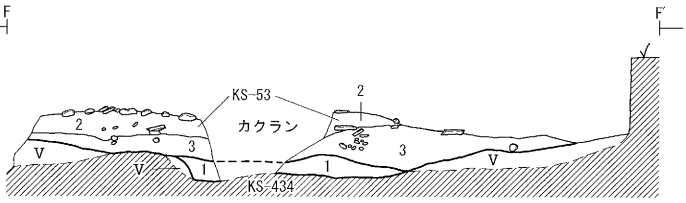
第18図　第15次調査　１区断面図１（1/50・S.L＝116m）



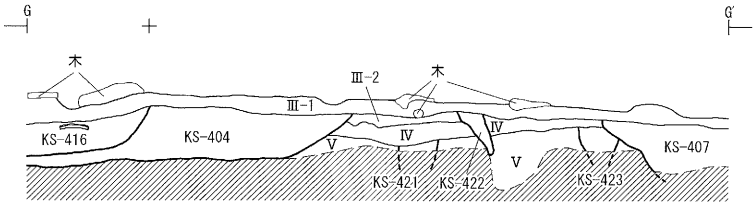
雨落ち北東角部断面図



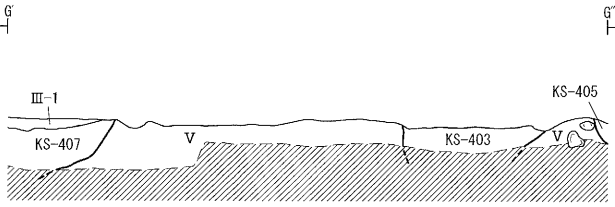
中央カクラン東壁断面図



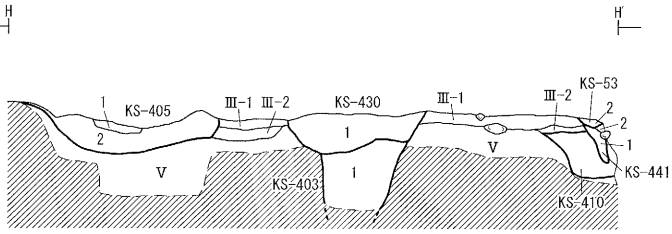
北西部カクラン西壁断面図



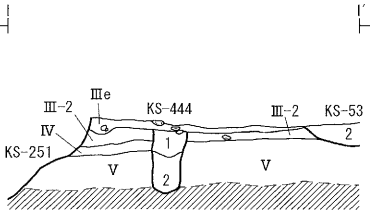
東部基本層序断面図ａ



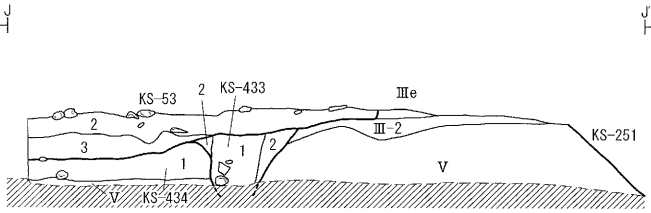
東部基本層序断面図ｂ



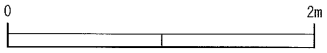
中央カクラン西壁断面図



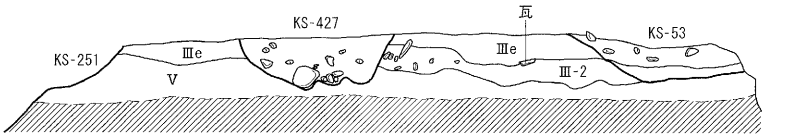
北西部カクラン北壁断面図



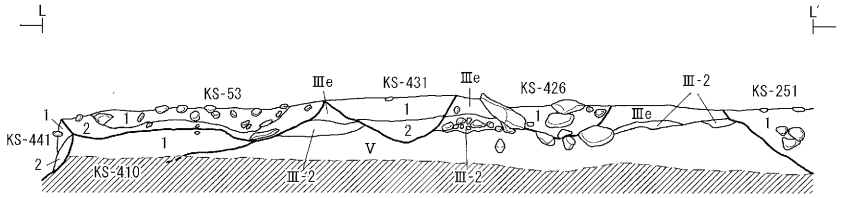
北西部カクラン南壁断面図



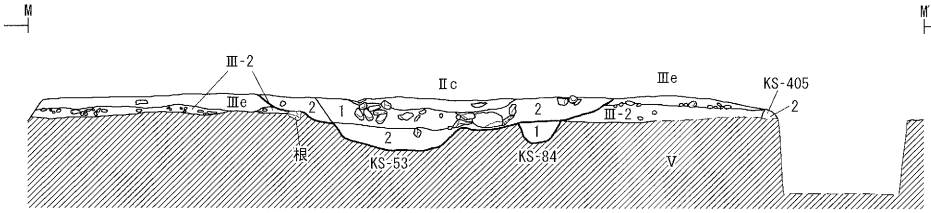
第19図　第15次調査　１区断面図２（1/50・S.L＝116m）



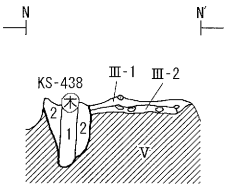
北西部カクラン北壁断面図



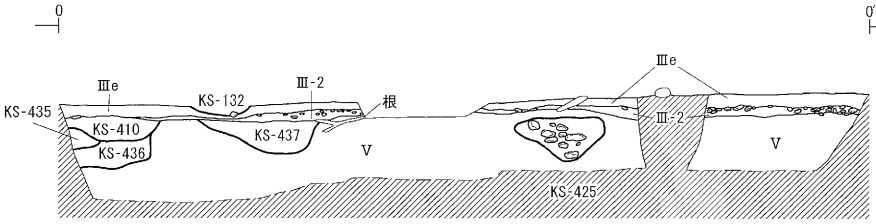
北西部カクラン南壁断面図



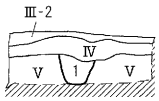
西部雨落ち断面図



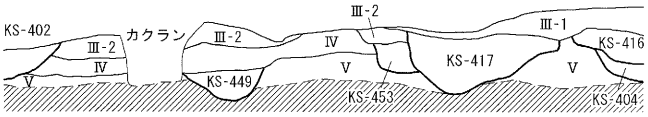
中央コンクリート枡
カクラン南壁断面図



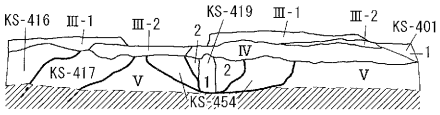
KS-251断面図



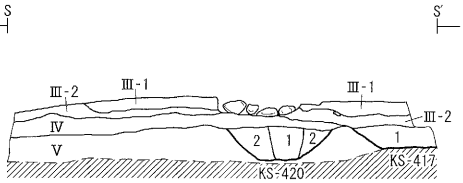
南東部KS-415断面図



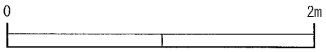
南東部カクラン南壁断面図



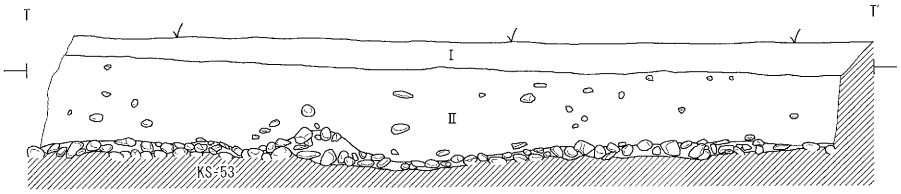
南東部カクラン北壁断面図



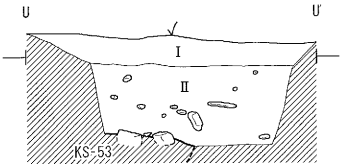
南東部カクラン南壁断面図



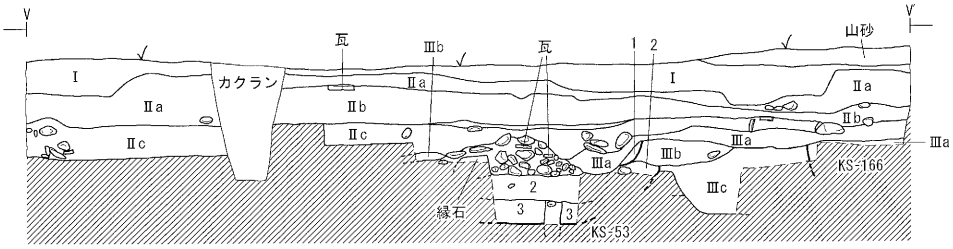
第20図　第15次調査　1区断面図3（1/50・S.L＝116m）



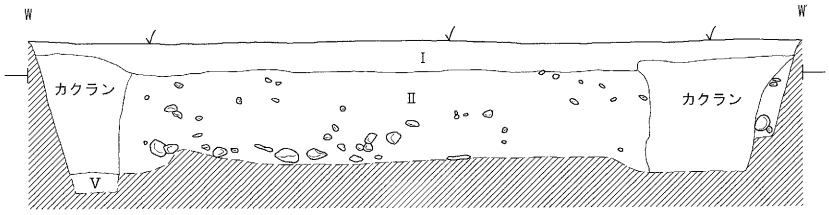
北部西壁断面図



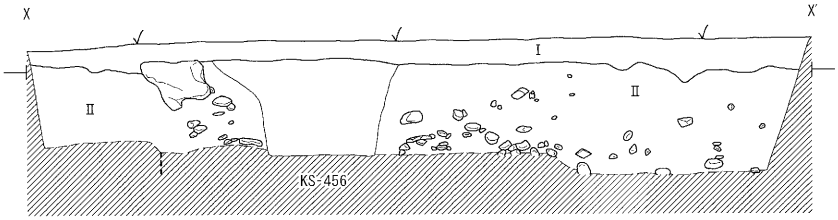
北部北壁断面図



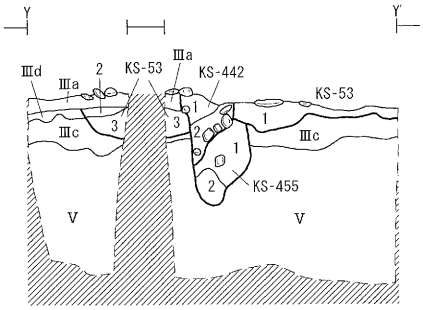
西壁断面図



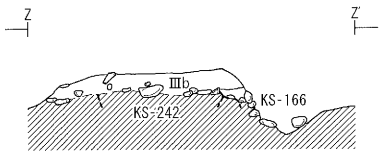
南壁断面図



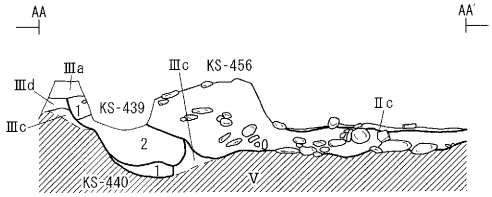
東壁断面図



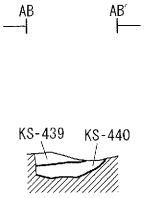
KS-418カクラン南壁・西壁断面図



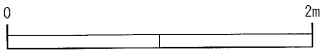
北西部南壁断面図



南東部カクラン東壁断面図



南東部
KS-439・440
断面図



第21図　第15次調査　２区断面図（1/50・S.L＝116m）

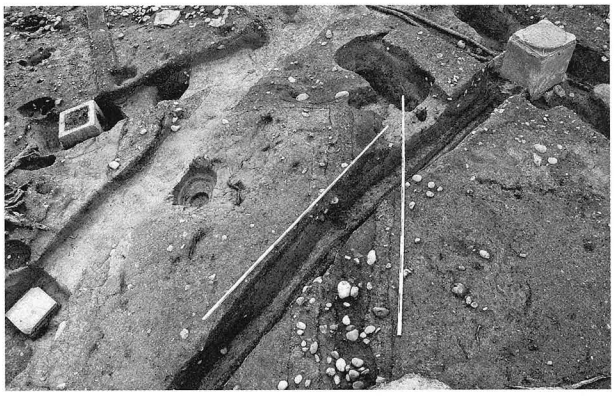
第６表　第15次調査基本層注記表

区	遺構番号	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘性	しまり	
1,2	基本層	Ⅰ	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有	弱	現表土層
		Ⅱa	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有	強	白色粘土ブロック、礫を多量含む
		Ⅱb	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	暗褐色砂質シルトブロック、礫を多量含む
		Ⅱc	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	有	中	明黄褐色粘質シルトブロックをやや多く含む。炭化物を多量含む。
		Ⅲ-1	7.5Y5/6	明褐色	粘質シルト	有	強	
		Ⅲ-2	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	10YR7/4にぶい黄橙色粘質シルトをまだら状に含む。Ⅴ層土をブロック状に多量含む。
		Ⅲa	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	弱	旧表土層
		Ⅲb	10YR4/5	褐色	砂質シルト	有	強	
		Ⅲc	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	強	7.5YR4/6褐色粘土ブロックをやや多く含む
		Ⅲd	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	
		Ⅳ	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	φ1～5　の炭化物粒を多量含む。旧表土層
		Ⅴ	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	強	地山層
1	53	埋土1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有	中	φ3～5cmの円礫をやや多く含む　掘り直しの埋土
		埋土2	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質砂	有	中	Ⅴ層土をφ1～2cmの粒状に少量含む　φ1～3cmの円礫を含む
		埋土3	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘質シルト	有	中	10YR5/4にぶい黄褐色シルト質砂をまだら状に多量含む　鉄分を多く含む
		埋土4	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質砂	有	中	Ⅴ層土をφ1～2cmの粒状に多量含む
1	426	埋土1	7.5YR4/6	褐色	粘質シルト	有	強	φ3～20cmの円礫、木っ端石を含む　炭化物を含む
1	133	埋土1	7.5YR4/6	褐色	粘質シルト	有	強	φ3～10cmの円礫をやや多く含む　Ⅲe層土に類似
1	425	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	φ3～10cmの円礫をやや多く含む
1	84	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	中	φ1～2cmのⅤ層土をブロック状に少量含む
2	242	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	強	7.5YR4/6褐色粘土ブロックをやや多く含む
2	166	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	強	7.5YR4/6褐色粘土ブロックを少量含む
1	407	埋土1	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	10YR7/4にぶい黄橙色粘質シルトをまだら状にやや多く含む　φ1～3cmの円礫をやや多く含む
1	404	埋土1	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	10YR7/4にぶい黄橙色粘質シルトをまだら状にやや多く含む　φ1～3cmの円礫を多量含む
1	406	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	弱	柱痕跡
		埋土2	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	φ1～4cmの白色粘土粒を多量含む
1	405	埋土1	10YR4/4	褐色	シルト質砂	有	弱	
		埋土2	10YR5/8	黄褐色	シルト質砂	有	中	φ1～4cmの白色粘土粒を少量含む
1	403	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	10YR5/6黄褐色シルト質砂をまだら状に多量含む　炭化物を少量含む
2	439	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	φ5～10cmの凝灰岩粒を少量含む
2	440	埋土1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有	中	
2	442	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	弱	
		埋土2	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有	中	Ⅴ層土をφ1～3cmのまだら状に少量含む　径5～8cmの円礫をやや多く含む
2	455	埋土1	10YR7/8	黄橙色	砂質シルト	有	中	φ1～3cmの白色粘土をまだら状に少量含む
		埋土2	10YR7/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有	強	
2	456	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	弱	φ4～12cmの円礫を非常に多量含む
1	408	埋土1	7.5YR5/6	明褐色	粘質シルト	有	強	炭化物を多量含む
1	428	埋土1	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	10YR7/4にぶい黄橙色粘質シルトをまだら状にやや多く含む　φ1～2cmの礫を少量含む
1	429	埋土1	7.5YR5/6	明褐色	粘質シルト	有	強	φ10～30cmの風化凝灰岩礫を非常に多量含む
1	430	埋土1	7.5Y5/6	明褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をφ1～3cmの粒状にやや多く含む
1	444	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	弱	
1	402	埋土1	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	10YR7/4にぶい黄橙色粘質シルトをまだら状にやや多く含む　10YR4/6褐色粘質シルトをまだら状に多量含む
1	400	埋土1	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	10YR7/4にぶい黄橙色粘質シルトをまだら状にやや多く含む
1	401	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をφ1～3cmの粒状にやや多く含む
		埋土2	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有	中	
		埋土3	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	Ⅳ層上をまだら状に多量含む
1	416	埋土1	10YR5/8	黄褐色	シルト質砂	有	中	φ1～3　の凝灰岩粒をやや多く含む
1	422	埋土1	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	10YR7/4にぶい黄橙色粘質シルトをまだら状にやや多く含む　Ⅳ層土をφ2～5　の粒状に少量含む
1	441	埋土1	7.5Y5/6	明褐色	粘質シルト	有	中	
1	438	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	中	柱痕跡
		埋土2	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	中	
1	445	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をブロック状にやや多く含む
		埋土2	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をブロック状に少量含む
1	433	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をまだら状に少量含む
		埋土2	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	10YR3/2黒褐色砂質シルトをφ1～4cmのブロック状にやや多く含む
1	434	埋土1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有	強	Ⅴ層土をφ1～2cmの粒状に少量含む
1	443	埋土1	10YR6/8	明黄褐色	シルト質粘土	有	強	φ1～2cmの白色粘土粒を少量含む
1	410	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	10YR6/4にぶい黄橙色シルトをまだら状に少量含む
1	411	埋土1	2.5YR4/6	赤褐色	砂質シルト	有	強	炭化物を多量含む　年代測定サンプル3点採取
1	417	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をブロック状にやや多く含む
1	435	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	10YR6/4にぶい黄橙色シルトをまだら状に多量含む
1	436	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	10YR6/4にぶい黄橙色シルトをまだら状に極少量含む
1	437	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	10YR6/4にぶい黄橙色シルトをまだら状にやや多く含む
1	453	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をまだら状にやや多く含む
1	415	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をまだら状に少量含む
1	419	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をまだら状に少量含む
		埋土2	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	Ⅳ層土をまだら状に少量含む
1	420	埋土1	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	Ⅳ層土をまだら状に少量含む
		埋土2	10YR7/8	黄橙色	シルト質粘土	有	中	Ⅳ層土をまだら状に極少量含む
1	421	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をブロック状に少量含む
1	423	埋土1	10YR4/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をブロック状に少量含む
1	454	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をφ2～4cmのブロック状に下部に多く含む　炭化物を少量含む
1	446	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土を少量含む
1	447	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土をφ1～3cmの粒状に多量含む
1	448	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅴ層土を少量含む
1	449	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	中	

1区全景（北から）

1区全景（西から）

1区北東部遺構検出状況（東から）

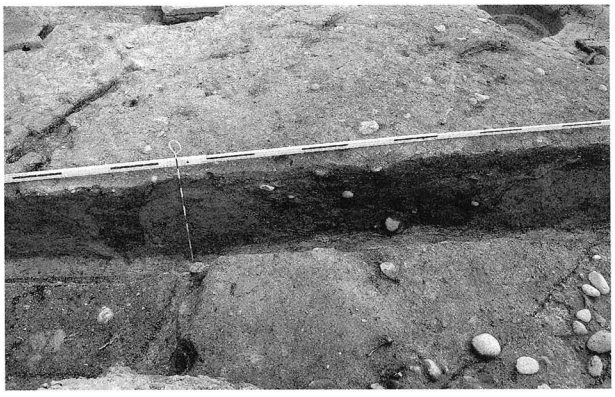


1区KS-405・406検出状況（東から）

1区KS-407検出状況（北から）

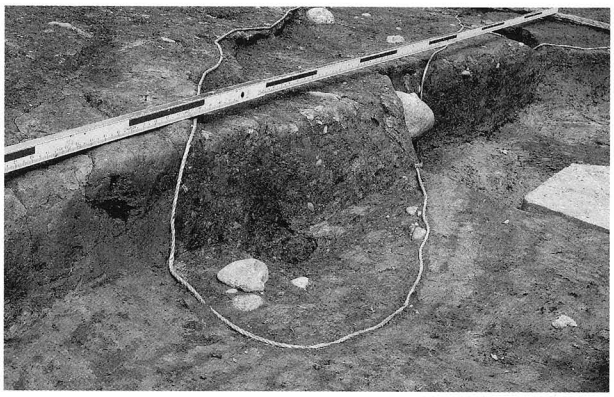
1区KS-405・406・407断面状況（西から）

1区KS-403・404・446・447・448断面状況（南から）

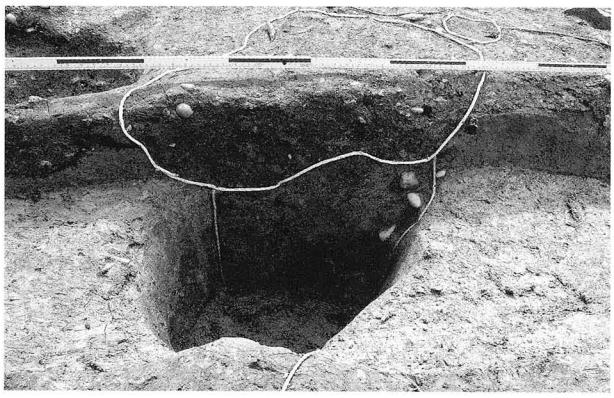


1区KS-445・407断面状況（北東から）

第22図



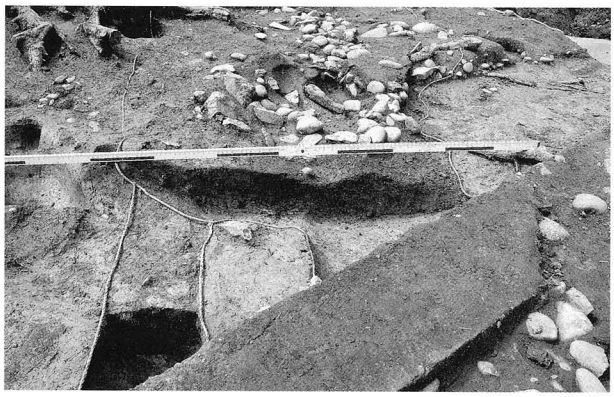
1 区KS-403断面状況（西から）



1 区KS-430・403断面状況（北東から）

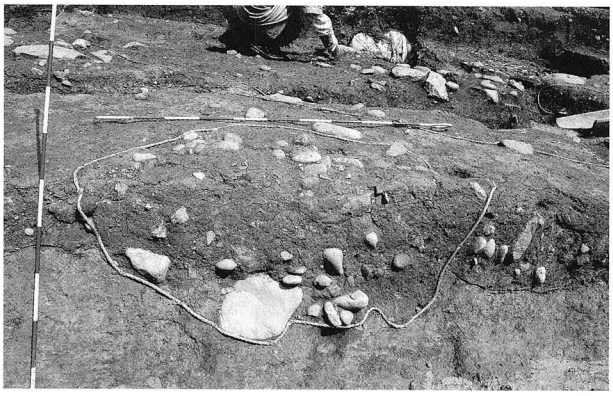
1 区KS-421・422・423断面検出状況（北東から）

1 区石敷き、KS-53・84断面状況（南から）



1 区KS-53・84断面状況（北から）

1 区KS-53・450・410断面状況（西から）



1 区KS-133礎石跡断面状況（南東から）

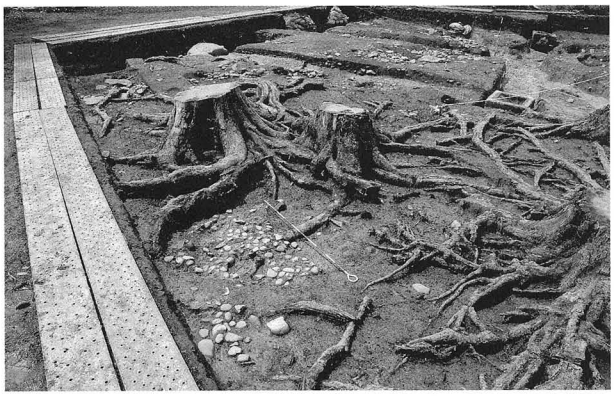
1 区KS-426・431断面状況（北西から）

第23図

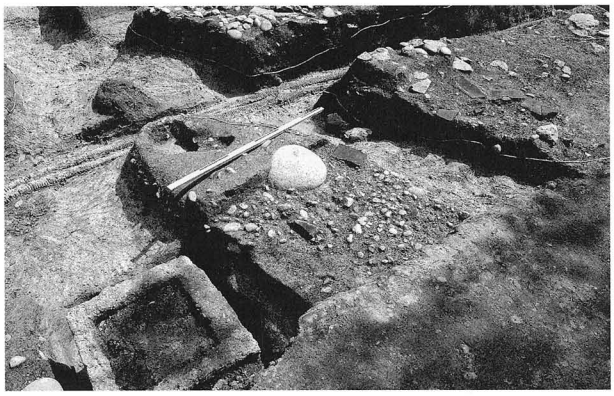
1区KS-132礎石跡検出状況（南西から）

1区Ⅲe層直下石敷き遺構断面状況（南西から）

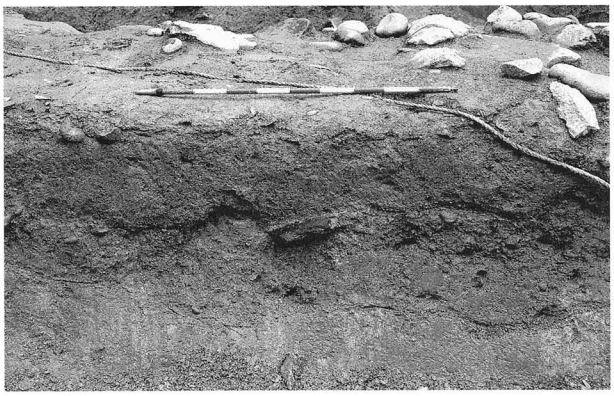
1区KS-425、石敷き検出状況（西から）



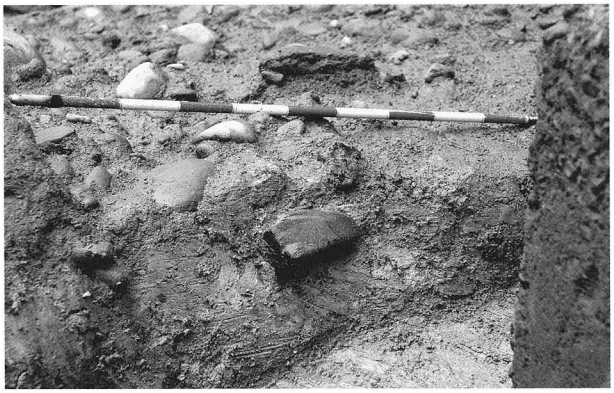
1区南部石敷き遺構検出状況（南東から）



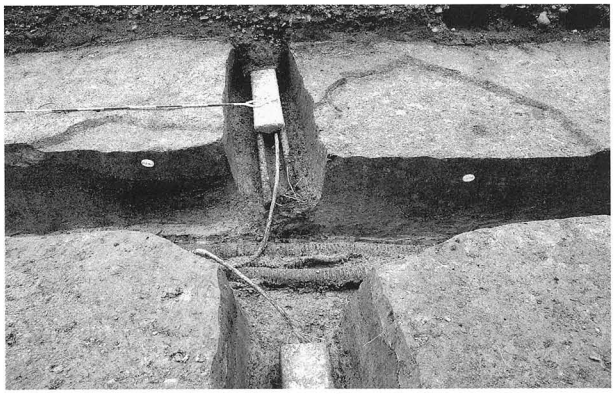
1区KS-432、石敷き遺構検出状況（北から）



1区Ⅲe層直下、Ⅲ-2層上面瓦検出状況（南から）



1区北部石敷き直下Ⅲ-2層瓦出土状況



1区KS-400・401検出状況（南西から）

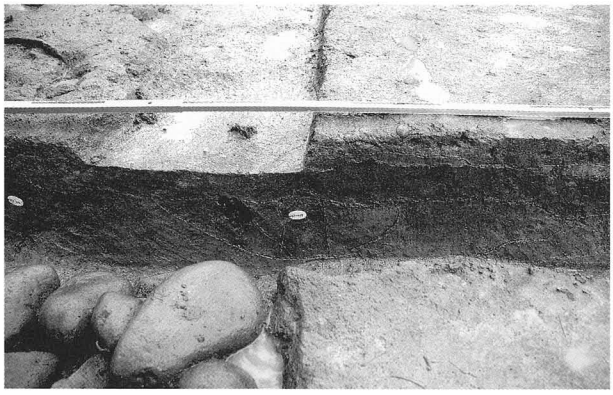
第24図

1区KS-402・449・453・417断面検出状況(北西から)

1区KS-408・429検出状況（南から）

1区KS-424検出状況（北東から）

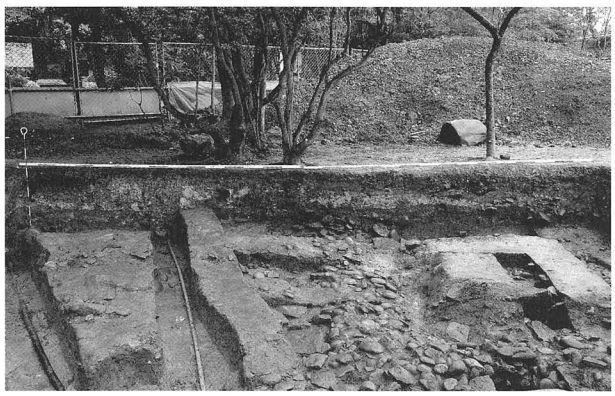
1区KS-411焼土遺構検出状況（南東から）



1区KS-419・454断面検出状況（南東から）

1区KS-433・434断面状況（北から）

2区全景（南から）



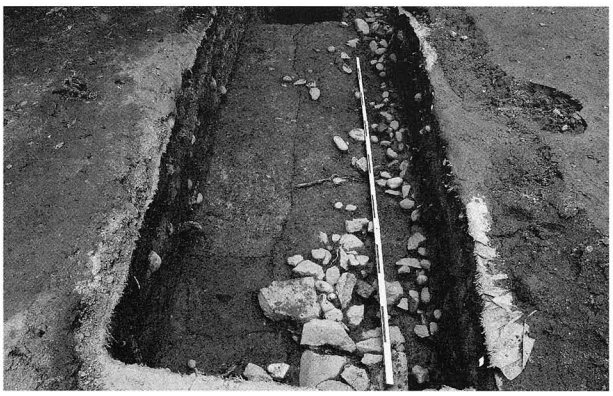
2区西壁全景（東から）

第25図

2区西壁大広間部分（東から）

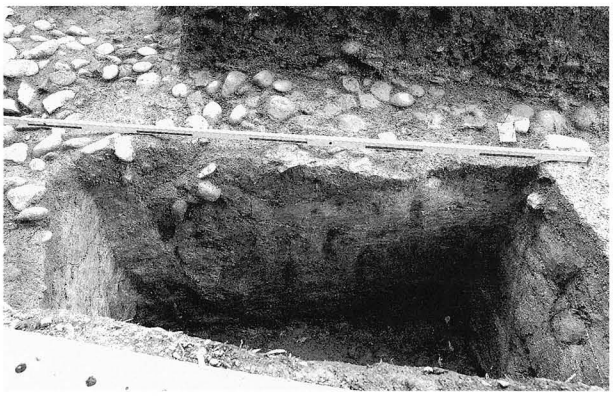
2区東壁全景（西から）

2区北部西壁全景（北東から）

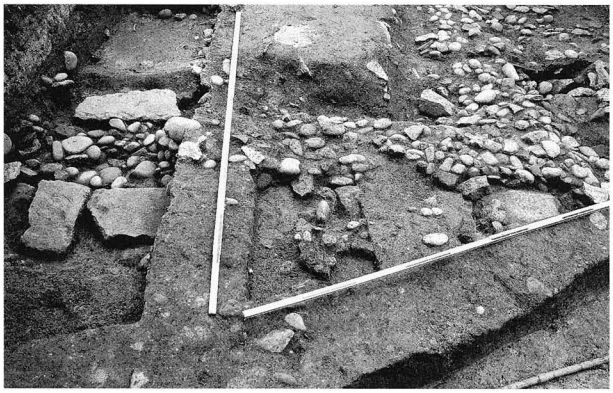


2区KS-53・458検出状況（北から）

2区遺構検出状況（北西から）



2区KS-53・442・455断面状況（東から）



2区KS-53雨落ち溝跡、縁石検出状況（南から）

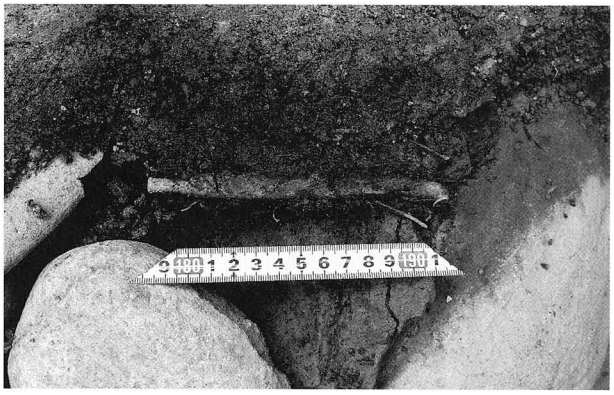
2区KS-166・242礎石跡検出状況（北から）

第26図

2区KS-439・440断面状況（北東から）

2区KS-452・439・440・456検出状況（東から）

2区土師器（No.189）出土状況



2区Ⅲa層煙管（No.78）出土状況

2区Ⅱc層上面銅釘（No.16）出土状況

1区作業風景（南から）

2区作業風景（南東から）

現地説明会風景（北西から）

第27図

4．出土遺物

（1）陶磁器他（第７表）

第７表　第15次調査出土陶磁器他数量表

区	遺構・層位	磁器	陶器	土師質土器	瓦質土器	計
1	表採	2	1			3
	撹乱	20	9	3	1	33
	Ⅰ		1	1		2
	Ⅱ	4	4			8
	Ⅲ			1		1
	Ⅲ-1			1		1
	KS-53・1	1	1	1	1	4
2	撹乱	1	1	12		14
	Ⅰ	2				2
	Ⅱ	5	4	28		37
	Ⅱc		1	24	1	26
	Ⅲa上面			13		13
	Ⅲa	1	1	20		22
	Ⅲb上面			2		2
	KS-53・1上面			1		1
	KS-53・1			1		1
	KS-418			2		2
	KS-440・1			1		1
	KS-452・1			3		3
	計	36	23	114	3	176

①磁器、陶器

それぞれ36点、23点出土した。ほとんどが表土、撹乱、近代以降の盛土層からの出土である。いずれも小片で器種、年代等詳細のわかるものは非常に少ない。２区Ⅱ層より出土した大堀相馬産の灰釉碗（18c後）１点を図示した（第28図１）。

②土師質・瓦質土器

それぞれ114点、３点出土した。土師質土器は、ほとんどが小片である。114点のうち107点が２区から出土しており、これまでの調査と同様、大広間南東角部周辺における分布の集中を確認した。

（2）金属製品（第８表）

金属製品は金銅金具、銅釘、煙管、古銭、鉄釘、鎹などが出土した。

①金銅金具

鍍金が比較的残る３点を図示した。第28図２は、唯一文様表現の見られるものである。厚さ0.5㎜の地金に、蹴彫り（先が直線状の鏨を打込み、その楔形の打痕の連続を線状に見せる彫金技法）によって花弁の輪郭と葉脈とみられる線彫りが施されている。花弁の輪郭がより太く、蹴彫りの間隔も葉脈部分に比べ密となっており、より滑らかな屈曲線が表現されている。第28図３、４は、いずれも一部に鍍金が残るが文様表現は見られない。ともに釘穴が見られる。

②銅釘

今回の調査では53点出土しており、本丸大広間跡関連調査での全出土点数は881点である。これまでと同様、頭部形状の違いに基づき分類した。Ⅰ類（角）10点、Ⅲ類（平丸）14点、Ⅳ類（不整形）20点、X類（形状不明）９点である。Ⅰ類とⅢ類を３点ずつ図した（第28図８～13）。Ⅱ類については今回出土していない。全長は、Ⅰ類が15～20㎜、Ⅲ類が26～30㎜に集中する。Ⅳ類は比較的ばらつきが大きいが、20㎜以下のものが多い。これは、かつて行った分析結果と同じ傾向を示している。詳しくは、16年度に刊行した「仙台城跡５」出土遺物銅釘の項および考察を参照されたい。銅釘の分類基準についても同報告書に準拠している。

③煙管

２区Ⅲa層より１点出土した（第28図７）。火皿、ラウ、吸口が一体となる延べ煙管である。

④鉄釘

94点出土した。いずれも破損した小片が多く全体の形状がわかるものは無いが、２点を図示した（第28図５、６）。75点が２区からの出土である。Ⅱc層、Ⅱc層上面からの出土が多く、近代のある段階に廃棄されたものと考えられる。銅釘がⅢa上面、Ⅲa層に出土のピークがあるのと対照的である。

第８表　第15次調査出土金属製品数量表

区	遺構・層位	金銅金具	銅釘				煙管	その他銅製品	古銭	鉄釘	鎹	その他鉄製品	計
			Ⅰ類	Ⅲ類	Ⅳ類	X類							
1	表採							1					1
	撹乱			2		1		2		9		2	16
	Ⅰ	1											1
	Ⅱ					1							1
	Ⅱc上面		5	2	1					3			11
	Ⅱc		2	4	3	1							10
	Ⅲa上面				1				1				2
	Ⅲ			1									1
	KS-53・1			3	1								4
	KS-132									3			3
	KS-251・1				1								1
	KS-409											2	2
	KS-412									4			4
2	Ⅰ			1									1
	Ⅱ				1			2		6	1		10
	Ⅱc上面				2			1		19			22
	Ⅱc		1	1	1	1		1		15		1	21
	Ⅲa上面	1			4					8			13
	Ⅲa		2		3	4	1			9			19
	KS-53・1上面				2	1				6			9
	KS-53									10			10
	KS-53・1	1								2		1	4
	計	3	10	14	20	9	1	7	1	94	1	6	166

（３）瓦（第９表）

瓦は総計1,854点出土し、このうち丸瓦が253点、平瓦が1,515点で併せて全体の95％を占める。また、出土層位別では１、２区ともに撹乱や近代以降の盛土層・遺構から出土したものが圧倒的に多い。

①軒丸瓦

12点出土した。瓦当文様の判別可能なものは９点あり、三巴文６点、珠文三巴文２点、無文１点である。

②軒平瓦

７点出土した。瓦当文様の判別可能なものは６点あり、菊花文１点、桔梗文１点である。他に、主文様は不明であるが唐草がみられるもの３点、同じく飛雲のみられるものが１点である。桔梗文１点を図示した（第28図14）。

③軒桟瓦

２点出土した。瓦当文様の判別可能なものは勾玉文１点のみである。

④棟瓦

37点出土した。冠伏間２点、伏間瓦４点、熨斗瓦７点、菊丸２点、輪違い21点、差込み１点である。菊丸１点（第28図15）、輪違い１点（第28図16）を図示した。

⑤飾り瓦

４点出土した。いずれも２区から出土しており、鬼瓦が３点、菊瓦が１点である。

⑥平板

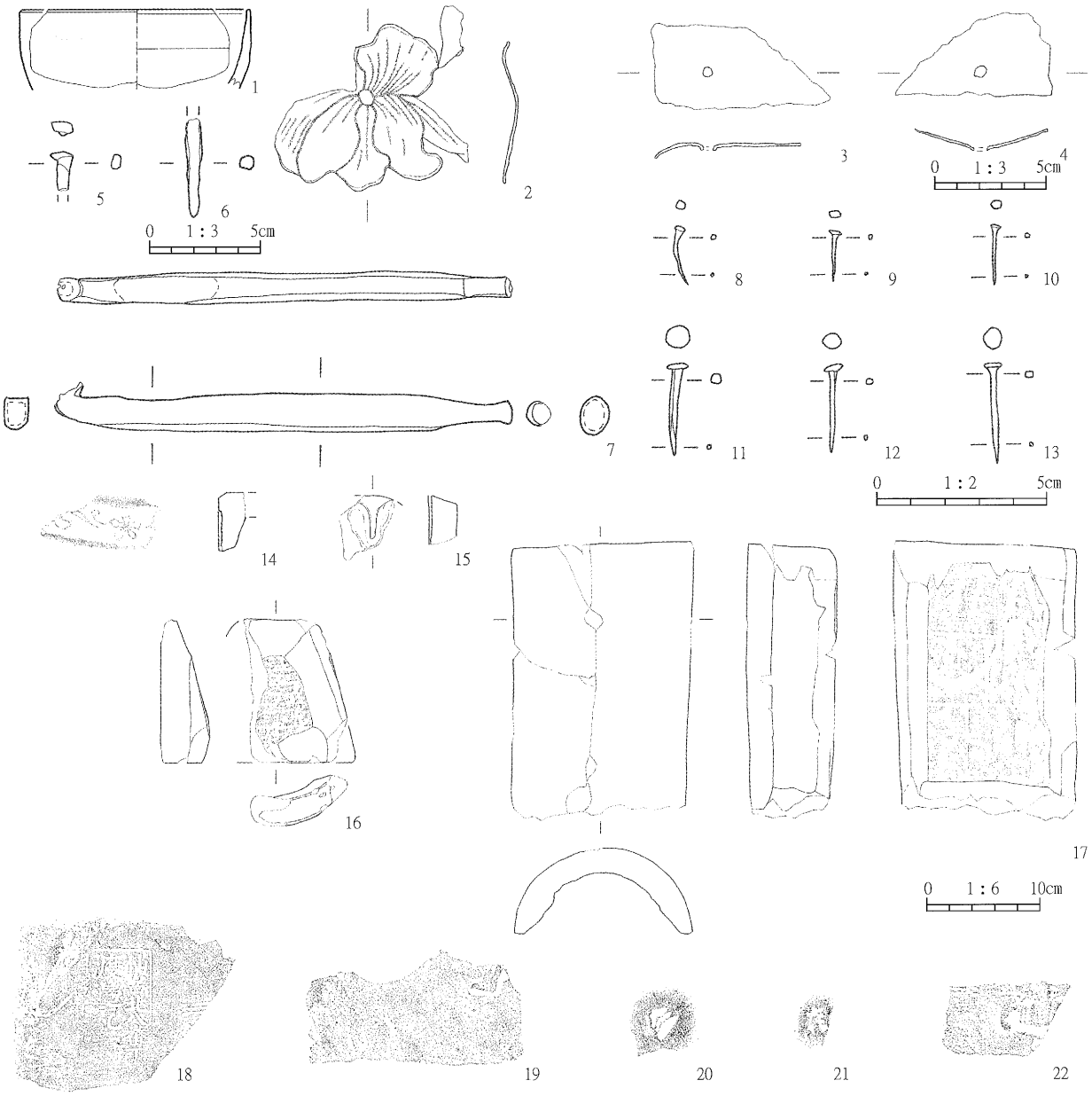
平板（厚）２点、桟付平板４点が出土した。

⑦刻印瓦

刻印のある瓦は14点出土した。すべて平瓦である。うち５点を図示した（第28図18～22）。18はこれまでも確認されている明治期の瓦で、「仙台北八番丁渡邉瓦工場明治卅六年」の刻印が見られる。同様の瓦は４点出土している。21は文字が刻印されたものと考えられる。

第９表　第15次調査出土瓦数量表

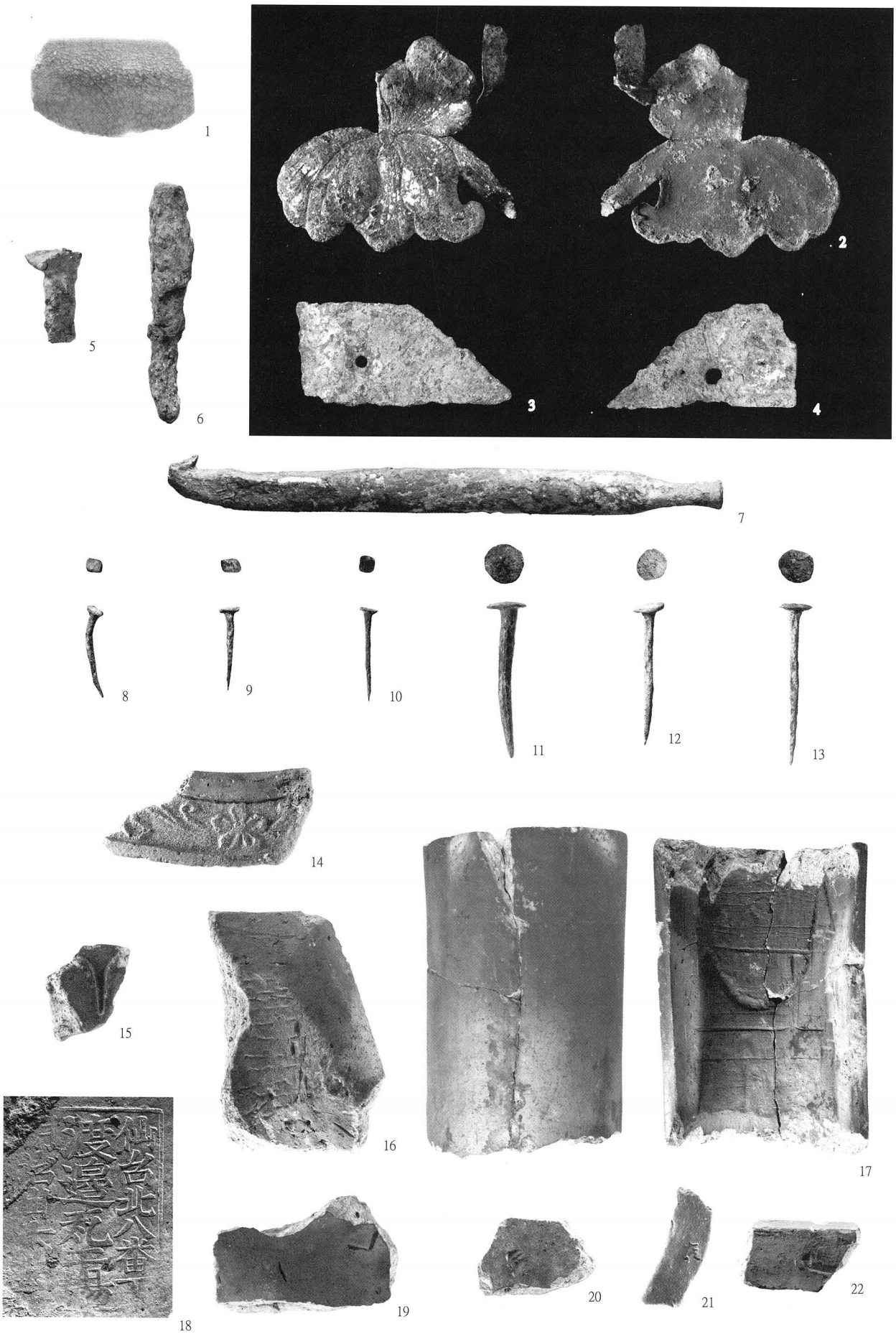
区	遺構・層位	丸瓦	平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒桟瓦	桟瓦	冠伏間	伏間瓦	熨斗瓦	菊丸	輪違い	差込み	飾り瓦	駒瓦	平板(厚)	桟付平板	不明	計
1	表採	1	7			1													9
	撹乱	79	340	3					2	3		5					3	5	440
	Ⅰ	21	56	1	1	1			1			1	1					2	85
	Ⅱ	13	49									3						1	66
	Ⅲ	12	20									3							35
	Ⅲ-1	1	75							1		2							79
	Ⅲ-2		4																4
	Ⅲa上面	1	10						1										12
	KS-53・1		1	1															2
	KS-132	1	20																21
	KS-251・1	5	34																39
	KS-406・1	2	12																14
	KS-408		2																2
	KS-412	14	40		1													3	58
	1区小計	150	670	5	2	2			4	4		14	1				3	11	866
2	表採	1	1											1					3
	撹乱	14	162	4	3									1		1	1		186
	Ⅰ	2	21		1					1		3						3	31
	Ⅱ	59	416	1			1	1		1		1				1		2	483
	Ⅱc上面	1	21																22
	Ⅱc	19	167				1				2	3		1	1				194
	Ⅲ													1					1
	Ⅲa上面			1															1
	Ⅲa	5	34	1			1			1									42
	Ⅲb		1																1
	Ⅲc		14																14
	KS-53・1	1	2		1														4
	KS-166		2																2
	KS-418	1	4					1											6
	2区小計	103	845	7	5		3	2		3	2	7		4	1	2	1	5	990
	総計	253	1515	12	7	2	3	2	4	7	2	21	1	4	1	2	4	16	1856



第28図　15次調査出土遺物（1・5・6・18～22：S＝1/3、2～4：S＝2/3、7～13：S＝1/2、14～17：S＝1/6）

第10表　15次調査出土遺物観察表

番号	種類	遺物番号	区	遺構・層位	法量（mm・g）	備考	写真
1	陶器	315	2	Ⅱ	口径（90）	灰釉碗（飴釉流し）　大堀相馬　18c後	1
2	金銅金具	146	1	Ⅰ	全長37.5　幅42.5　厚さ0.5　重量4.3	牡丹？	2
3	金銅金具	118	2	Ⅲa上面	全長38.8　幅19.0　厚さ0.7　重量2.3	釘穴径2.1	3
4	金銅金具	35	2	KS-53 埋土1	全長34.2　幅19.0　厚さ0.6　重量1.4	釘穴径2.8	4
5	鉄釘	77	1	Ⅱc上面	全長17.2　頭部幅10.0　胴部太さ5.7　重量1.2	胴部先端部欠損	5
6	鉄釘	152	1	Ⅱc上面	全長43.5　胴部太さ7.5　重量3.5	頭部欠損	6
7	煙管	78	2	Ⅲa	全長134.7　幅10.9　厚さ8.6　重量22.5	延べ煙管　火皿欠損	7
8	銅釘	147	1	Ⅱc上面	全長17.9　頭部幅3.4　胴部太さ1.3　重量0.2	頭部形状 角Ⅰb類	8
9	銅釘	17	1	Ⅱc上面	全長15.5　頭部幅3.6　胴部太さ1.2　重量0.2	頭部形状 角Ⅰb類	9
10	銅釘	156	1	Ⅱc	全長17.3　頭部幅3.3　胴部太さ1.3　重量0.2	頭部形状 角Ⅰa類	10
11	銅釘	181	1	KS-53 埋土1	全長28.5　頭部幅7.2　胴部太さ2.6　重量1.1	頭部形状 平丸 Ⅲ類	11
12	銅釘	148	1	Ⅱc上面	全長26.2　頭部幅5.9　胴部太さ1.7　重量0.6	頭部形状 平丸 Ⅲ類	12
13	銅釘	112	1	撹乱	全長30.0　頭部幅6.7　胴部太さ1.9　重量0.7	頭部形状 平丸 Ⅲ類	13
14	軒平（桔梗）	53	2	KS-53 埋土1	重量129.5		14
15	菊丸	84	2	Ⅱc	重量54.1		15
16	輪違い	370	2	Ⅰ	重量373.5		16
17	丸	"329,344"	1	Ⅰ	重量1750		17
18	平（刻印）	432	2	撹乱	重量259.1	「仙台北八番丁渡邉瓦工場明治廿六年」	18
19	平（刻印）	389	2	撹乱	重量145.9	線刻	19
20	平（刻印）	396	2	Ⅱ	重量49.7	圧痕	20
21	平（刻印）	434	2	Ⅱ	重量145.7	文字？	21
22	平（刻印）	390	2	撹乱	重量50.5	線刻	22



第29図　15次調査出土遺物（1：S＝1/2、2～13：S＝1/1、14～16、19～22：S＝1/3、17：S＝1/6）

5．まとめと考察

第15次調査では、以下①～⑧の成果が得られた。

① 大広間落縁の北東角（１区）および南東角（２区）にあたる礎石跡をそれぞれ２基検出した。北東角ではKS-133と東西に延びる撹乱を挟んで南側にKS-426が確認され、ともに撹乱壁面で根固め石が検出された。直接の切り合い関係は無いが、以下の点から両者間には時間差があると推測される。まず、KS-133では径５～10cmの根固め石が掘り方の底面近くに集中してみられ、かつ埋土が大広間内部の整地層（Ⅲe層）に酷似した褐色粘質土層であることから、藩政期に埋没した可能性が高い点が挙げられる。一方KS-426では、径５～25cmと比較的大型の根固め石がⅢe層上面に一部露出して検出されており、大広間廃絶時まで機能していた可能性が高い。また南東角においては、KS-242がKS-166に直接切られる形で検出され、同様の状況が見られる点も考慮すると、現段階ではKS-133がKS-242に先行するものと推定される。

ただし、今回北東角から南へ、KS-132,425と２基の落縁礎石根固め跡を検出したが、遺構が重複した状況はみられず、上記の推定が大広間の建替え等と関連するかは今後の更なる調査が必要である。

② 大広間雨落ち溝跡の北東角および南東角を検出した。縁石はほとんど抜き取られており、玉石を帯状に検出した。特に２区においては、雨落ち溝が先述のKS-242が埋められたⅢb層上面から再度掘り込まれ、改修されていることが明らかとなった。また、雨落ち溝跡南辺では一部縁石が残存した状態で検出されたが、縁石間に充填されていた玉石から約10cm低いレベルで検出されており、現時点では、これら古段階の縁石の上に雨落ち溝の改修に伴い新たな縁石が設置され、それが近代に入り抜き取られたものと解釈している。因みに昨年度調査した雨落ち溝跡北辺でも玉石よりも低いレベルから、古段階の縁石の可能性がある扁平な加工石材を検出している。

③ 1区中央で雨落ち溝跡の掘り方に切られる素掘り溝跡を検出した。これは、埋土や規模からこれまでの調査で雨落ち溝跡西辺および北辺で確認されているKS-84と一連のものと考えられる。

④ 大広間内部の整地層（Ⅲe層）直下から、石敷き遺構を検出した。石敷きは大広間内部から雨落ち溝の外側にも分布しており、断片的ではあるが南北約７m、東西約３mの拡がりが確認された。雨落ち溝跡北東角の北30cmでは、これらの石敷きを伴う礎石（KS-432）を１基検出した。礎石は径35cm程の扁平な安山岩質の石材である。掘り方内に設置後、粘質土（Ⅲ-２層）を貼り、礎石の周縁を一部覆うように玉砂利が敷かれており、昨年度大広間の北側で検出した礎石建物跡と同一時期のものと考えられる。この礎石は、昨年度検出の最も近い礎石から南東約12.5mの位置にあるが、同一建物に属するか否かは今後の課題である。

⑤ 大広間北東周辺において、古い順に南北溝跡２条（KS-407、404）、東西塀跡（KS-406）、東西方向から南へ折れる暗渠状遺構（KS-405）、東西塀跡（KS-403）という遺構の変遷が明らかになった。これら区画施設等の変遷が明らかになった事は、大広間と周辺建物または庭園等との位置関係や、御殿配置全体の時間的変遷ひいては本丸御殿における使われ方の変化を考古学的に検討していく上で重要な成果である。

⑥ 中世以前に遡るとみられる遺構を17基検出した。うちKS-410は1区北東部より西へ延びる上幅50～90cm、深さ20～40cmの溝跡を各断面で検出した。検出面はⅣ層上面である。同一層検出の焼土遺構（KS-411）を切っている。焼土遺構からは年代測定用の炭化物サンプルを３点採取した。また、Ⅴ層上面から掘り込まれた遺構も10基、断面で確認されており、少なくとも3時期の遺構の変遷が確認された。

⑦ 遺物は、陶器、磁器、土師質土器、金銅金具、銅釘、鉄釘、瓦などが出土したが、特に土師質土器が２区（大広間南東部周辺）に集中して分布している点が注目される。遺物の廃棄に関わる問題であり、今後その分布については、銅釘など他の遺物と同様に更なる検討が必要である。

⑧ 珪藻分析では、KS-405埋土１層からはほとんど検出されず、堆積速度が速かったか、珪藻が生育できない乾燥した環境であったと推測された。放射性炭素年代測定では、補正14C年代値で380±40年BP、440±40年BP、340±40年BPの結果を得た。また、これらの年代値を暦年較正し、概ね15世紀から16世紀に収まる結果が示された。

V　第16次調査

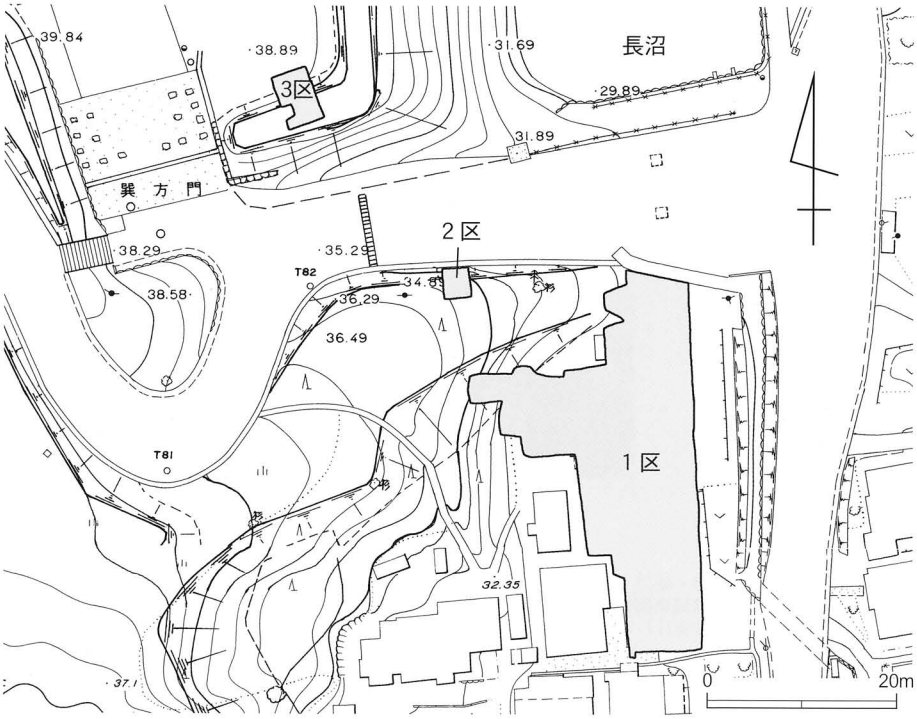
1．調査目的及び調査経過

第16次調査は、三の丸巽門跡の東側周辺を主な対象として、平成18[2006] 年９月１日から同年11月30日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。最終的な調査面積は472㎡である。

調査目的は、①長沼の南側に位置し、明治末年に埋没した堀跡（第34図）の位置・規模の確認（１区）、②巽門へ至る登城路南側における、石垣側溝等の遺構確認（２区）、巽門東脇土塁の構造解明および遺構確認（３区）の３点である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影、遺物の表面採集等の後、９月４日から安全フェンスを設置し、９月８日から重機による表土の除去作業を開始した。また、重機の入りにくい箇所を中心に、９月12日から人力による表土除去及び遺構面の検出作業を開始した。

堀跡の調査（１区）では、堀の北岸と西岸を確認し、北岸・西岸で土留めのため考えられる杭列をそれぞれ３列、２列検出した。また、西岸ではやはり土留めのためと考えられる集石を検出した。南岸について確認できなかった。堀の規模は、南北幅が35m以上、深さが現地表面より６m以上となる大規模なものであることが明らかとなった。登城路南側における遺構確認調査（２区）では、幕末～明治期の旧表土を確認したものの、昨年度北側で確認した石組側溝等の遺構は検出されなかった。土塁の調査（３区）では、土塁の積み土を検出し、異なる土を版築状に積んでいることを確



第30図　第16次調査区配置図（1/800）

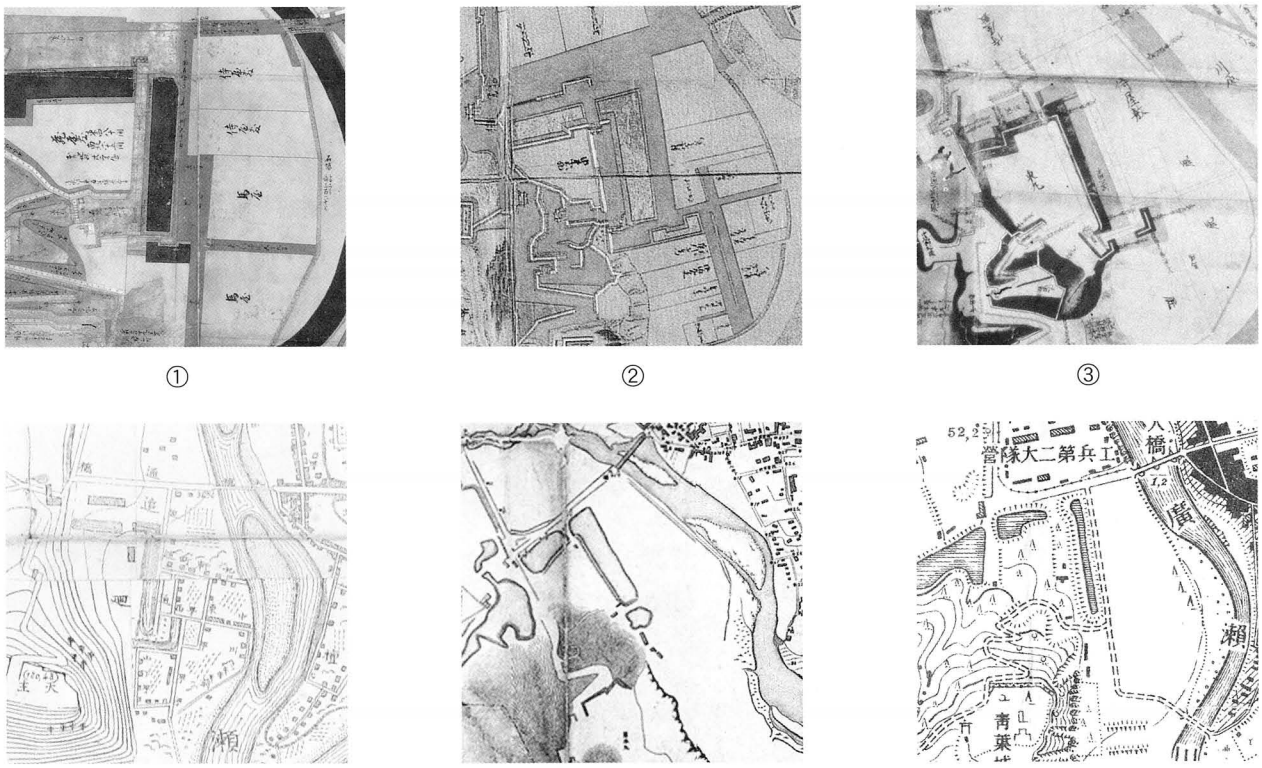
第31図　１区調査前現況（南から）

第32図　２区調査前現況（北から）

第33図　３区調査前現況（北から）

認した。また、土塁の頂部から塀跡等に関する遺構は検出されなかった。遺物は、土塁構築後の盛土層とみられるⅣ層から17世紀後半代を中心とする磁器、陶器、そしてⅢ層から18世紀後半から19世紀前半を中心とする磁器、陶器の他、土師質土器、瓦質土器、土製品、瓦、硯、碁石、簪、釣針、鉄釘など多様な遺物が出土した。

第16次調査は、平成18年３月23日の第12回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了解を得て、第15次調査終了後に実施した。調査の進展に伴い、10月12日、10月18日、10月20日に仙台城跡調査指導委員会委員、また10月30日に宮城県の現地指導をそれぞれ受けた上で、10月26日に記者発表（７社）、10月28日に現地説明会を実施した（181名参加）。11月10日に再び調査指導委員の現地指導を受け、同日開催した第15回仙台城跡調査指導委員会において調査成果の報告を行い、了承を得た。11月15日には調査区の埋め戻しやフェンス撤去等の作業を終え、調査箇所は現状に復した。平成19年３月23日に第16回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。



①奥州仙台城絵図（正保２・３ 年［1645・46］）（財）齋藤報恩会蔵
②仙台城下絵図（寛文４ 年［1664］）宮城県図書館蔵
③奥州仙台城并城下絵図（天和２ 年［1682］）宮城県図書館蔵
④僊臺区及近傍村落之図（明治 15 年［1882］）仙台市博物館蔵
⑤仙台市全図（明治 26 年［1893］）
⑥仙台市地形図（明治 38 年［1905］頃）

第34図　絵図・地図からみた堀の変遷

２．旧地形及び基本層序

現在、仙台市博物館のある三の丸跡は広瀬川右岸に形成された下町段丘面上に位置しており、その東側に残る全長約250mの堀跡（現長沼）との間には、比高約10mの段丘崖が形成されている。昨年度の調査では、長沼方向への岩盤の急激な落ち込みが確認されており、現存の堀跡（長沼）についても、旧河道のような元来の地形を利用したものと推定される。今回1区での調査対象とした埋没堀跡についても同様な旧地形を利用した可能性が高い。以下、各区毎に基本層の概要について述べる。

（1）１区

１区の基本層はＩ～ＸＸＩ層に大別した（第11、12表）。必ずしも全てに直接的な上下関係は無いが、概ね年代の新しい順に記述し、層の特徴、検出遺構との上下関係、特徴的な出土遺物について概要を述べる。

Ｉ層は現表土層である。Ⅱ層は、近代以降に堆積した砂礫層で多量の炭ガラを含んでおり、調査区全域に分布する。西側斜面からの流入土で、亜炭の採掘が行われる戦後の堆積物とみられる。５層に細分した。Ⅲ層は、ラミナ状の構造をもつ水性堆積層である。上面には葦など湿地性の植物遺存体が集積している。Ⅲ層の堆積により、堀はほぼ完全に埋没したものとみられる。Ⅳ層は、自然木や伐採痕のある木を多量に含む黒色の腐食土層である。1区中央を最深部として周囲より流れ込んでおり、明治26年の地図（第34図⑤）で現長沼の南に見られる沼（堀の残存）の底面に堆積したものと考えられる。Ⅳ層からは近代に属するレンガや堤焼の土管などが出土しており、この頃、周囲で大規模な伐採等が行われたものとみられる。また、下駄、桶等の木製品が出土している。Ⅴ層は、西部斜面のⅡ層直下にみられる旧表土層である。近現代の磁器が1点出土しており、Ⅳ層堆積時の表土であった可能性がある。Ⅵ層は、Ⅲ層に類似したラミナ状の構造をもつ粘質土層で、堀内の水性堆積物である。19世紀後半の瀬戸美濃の急須が１点出土している（第63図１）。このⅥ層直下のＸⅨ層は調査区最深部にあたり、近世の堆積層とみられることから、堀内の堆積物はⅢ層、Ⅳ層、Ⅵ層と約６ｍの厚さにわたり、全て近代以降のものである。また、Ⅲ・Ⅵ層は水性堆積層であり、堀は少なくともこの地点においては人為的に埋められたものではなく、明治初年より約70～80年の間に、ほぼ自然に埋没したものと考えられる。

Ⅶ層は、近代に調査区北部に構築された暗渠状遺構を直接覆う崩落土である。Ⅷ層は、この暗渠状遺構を構築する際の盛土層で３層に細分した。いずれも北部のみに分布する。Ⅸ層は、Ⅷ層直下の崩落土層である。上面の一部に植物遺体を含む腐食土層が見られ、一定期間、岸であった可能性が考えられる。Ⅸ層から遺物の出土は無い。

Ｘ層は、古段階の北岸盛土層（ＸＸ層）の平坦部分にのる旧表土層（細砂層）で、藩政期から近代暗渠状遺構が構築（Ⅷ層）されるまでの路面であったと考えられる。現地表面とのレベル差は1.1mで、調査区最深部とのレベル差は5.25mである。

ＸＩ層は、新段階の北岸盛土（ＸＶ層）直上にみられる砂礫を含む水性堆積層である。ＸＶ層上面に構築された杭列3（しがらみ状遺構）を直接覆っている。遺物は、19世紀代の瀬戸美濃の碗が1点出土している。

ＸⅡ層、ＸⅢ層は、西部のＶ層直下にみられる西側斜面からの崩落土である。それぞれ３層、９層に細分した。ＸⅢ層は砂層と粘質シルト層が交互に堆積しており、一定期間、連続的に小規模な崩落が起きたものと推測される。

ＸⅣ層は、堀跡西岸の新段階の盛土層である。直上にはⅣ層、ＸⅢ層が堆積する。杭列４構築後の盛土とみられ

第11表　第16次調査１区　基本層の概要

層名	土層の種類	備考
Ⅰ	現表土層	現表土層
Ⅱ	崩落土、盛土	炭ガラを含む崩落土層（戦後）　Ⅰ層直下の近代以降の盛土層　5層に細分
Ⅲ	水性堆積層	近代の堀内水性堆積層　上面に葦などの植物遺存体が集積
Ⅳ	人為堆積層	近代の堀内堆積層　自然木　伐採木を多量に含む腐植土層
Ⅴ	旧表土層	西部Ⅱ層直下の旧表土層　Ⅳ層に対応か
Ⅵ	水性堆積層	近代の堀内水性堆積層
Ⅶ	崩落土	近代暗渠状遺構構築後の北岸崩落土層
Ⅷ	近代盛土層	近代暗渠状遺構の構築に伴う盛土層　2区Ⅱc層に対応　3層に細分
Ⅸ	崩落土層	Ⅶ層直下の北岸崩落土層　北部西壁のみ確認
Ⅹ	旧表土層	Ⅷ層直下　ＸＸ層直上の旧表土層
ⅩⅠ	水性堆積層	北岸盛土（新：ＸＶ層）直上の水性堆積層　杭列3を覆う層
ⅩⅡ	崩落土層	西岸崩落土層　3層に細分
ⅩⅢ	崩落土層	西岸崩落土層　砂層と粘質シルト層が交互に崩落　9層に細分
ⅩⅣ	盛土層	西岸盛土（新）　杭列4を覆う　上面に杭列5、円礫の集中
ⅩⅤ	盛土層	北岸盛土（新）　杭列2を覆う　上面に杭列3　4層に細分
ⅩⅥ	崩落土層	北岸盛土（古）の崩落土層　一部ラミナ状　杭列1を覆う　4層に細分
ⅩⅦ	旧表土層	西岸集石上段を覆う旧表土層
ⅩⅧ	水性堆積層	西岸集石下段を覆う水性腐植土層　2層に細分
ⅩⅨ	水性堆積層	最下層の粗砂層
ⅩⅩ	盛土層	北岸盛土（古）　版築状の盛土　6層に細分
ⅩⅩⅠ	盛土層	西岸盛土（古）　版築状の盛土　上面に集石　8層に細分

る。上面は、杭列４の東側で一部平坦（東西幅約１m）となった後、堀底に向かって傾斜している。その上面には径５～15cmの円礫の集中がみられ、また層の落ち際から斜面に沿って杭列５が検出された。

ＸＶ層は、新段階の北岸盛土層である。杭列２を完全に覆い、上面に杭列３が構築される。４層に細分した。遺物は、16世紀末から17世紀初めの志野の鉢（？）が出土しており（第66図78）、堆積年代の上限を示している。

ＸⅥ層は、古段階の北岸盛土層（ＸＸ層）の斜面に堆積した崩落土で杭列1を覆っている。粘質土と細砂が一部ラミナ状に堆積しており、杭列1が露出していた段階の崩落土とみられる。４層に細分した。遺物の出土は無い。

ＸⅦ層は、古段階の西岸盛土層（ＸＸＩ層）上面の集石を覆う旧表土層である。本層は、階段状（４段）に検出された集石の最上段にのみ分布する。ＸⅧ層は、集石の２段目落ち際から４段目までを覆う水性の腐植土層である。２層に細分した。遺物は、ＸⅧ層から丸瓦、平瓦等の小片が６点出土している。

ＸⅨ層は、調査区最下層で確認した粗砂層で、レベルは24.65mである。現地表面とのレベル差は最大6.35m、Ｘ層（古段階北岸盛土上面の旧表土）とのレベル差は5.25mである。遺物は、常滑の中世陶器１点、17世紀代の美濃の香炉１点、17世紀中頃の唐津の鉢1点の他、三巴文の軒丸瓦１点が出土している（第53図30、31、32、第56図85）。今回の調査では確実な堀底は確認できなかったが、本層が粒度の粗い砂層であることから、比較的底に近い藩政期の堆積物であるとみられる。

ＸＸ層は、古段階の北岸盛土層である。砂質シルト、粘質シルトより成る。６層に細分した。版築状の堆積構造がみられる。杭列１はこの段階に伴うものとみられる。

ＸＸＩ層は、古段階の西岸盛土層である。粘質シルト、シルト質粘土より成る。８層に細分した。版築状の堆積構造がみられる。上面は、４つの傾斜面と３つの小段から成り、各面に円礫の集石がみられた。

（２）２区

２区の基本層は、５層に大別される。Ⅰ層は現表土層である。Ⅱ層は近代以降の盛土層で３層に細分した。Ⅱc層上面で、１区からも検出された暗渠状遺構が検出された。Ⅲ層は黒褐色の腐植土層で旧表土層とみられ、上面は北側へやや傾斜している。遺物は19世紀後半の瀬戸みのほかの白磁角皿１点（第51図３）の他、18～19世紀前半の肥前の染付碗等が出土している。幕末頃から近代暗渠状遺構構築までの旧表土であったとみられる。Ⅳ層は、Ⅲ層直下にみられる砂質シルト層で２層に細分した。崩落土層とみられるが、詳細は不明である。Ⅴ層は径５～40cmの円礫から成る礫層である。北壁寄りで、東西1.7m、南北１mの範囲で検出した。礫層中には木端石や瓦片が含まれており、暗渠等の人為的なものである可能性も考えられる。なお、今回の調査でⅣ層とⅤ層の前後関係について、確証を得ることはできなかった。

（３）３区

３区の基本層は、６層に大別される。Ⅰ層は表土層である。３層に細分した。Ⅰc層は融解した多量のガラス片等を含んでおり、昭和20年空襲時の表土とみられる。Ⅱ層は近代以降の盛土層で６層に細分した。Ⅱc～eの３層は南側の土塁部のみにみられる。土塁北側のⅢ層直上にのるⅡb層からは、レンガや腐植の著しい多量の不明鉄製品が出土している。Ⅲ層は黒褐色の砂質シルト層で、層厚は30～50cmである。18世紀後半から19世紀前半を主体とする陶磁器の他、瓦、簪（かんざし）、釣針、硯、碁石、水晶など多様な遺物が出土している。なお、Ⅲ層最下部の厚さ３～５cmのところからは遺物の出土がほとんど見られなかった。明確に分層は出来なかったが遺物が廃棄されるまでの表土であった可能性がある。Ⅳ層は、Ⅲ層直下の盛土層で褐色土と暗褐色土の互層である。４層に細分した。層厚は20～40cmである。遺物は17世紀代の陶磁器の他、寛永通宝（古寛永）が出土している。なお、Ⅳa層の分布範囲が部分的であるため、一部Ⅲ層と接するⅣb層上面からは18世紀前半の磁器皿（第52図26）が出土している。Ⅴ層は黒褐色の砂質シルト層で、層厚は約30cmである。上面が硬化している。遺物は出土していない。Ⅵ層は土塁積み土で、調査区の最下層である。４層に細分した。土塁全体としては特徴の異なる土層を交互に積んでいる。

３．検出遺構

（１）１区

【概要】

１区では堀跡の北岸と西岸を検出し、規模は、南北幅35m以上、深さは現地表面より6.35m以上である。また、北岸盛土層（ＸＸ層）直上で、藩政期～近代の旧表土層（Ｘ層）が確認されており、この面から最深部までの深さは5.25mである。堀内堆積物の大部分（少なくとも４m）は、近代以降の自然堆積層であり、少なくとも調査地点では、堀は自然に埋没したものとみられる。今回の調査区では、最下層の粗砂層（ＸⅨ層）のみが藩政期の堀内堆積物である。なお今回、確実な堀底についは未確認であるが、このＸⅨ層は、粒度の粗い砂層であることから、比較的底面に近い堆積物であると推測される。また、堀の水位について、北岸、西岸それぞれの盛土直上にのる水性堆積層のレベルをみると、北岸のＸⅠ層は28.520mで、新段階の北岸盛土形成後、杭列3機能時の水位を示す可能性がある。また、西岸のＸⅧ層は28.480mで、新段階の盛土（ＸⅣ層）が堆積するまでの水位を示す可能性がある。

北岸では、一部版築状の特徴をもつ盛土（古段階：ＸＸ層）によって岸が形成されていることを確認した。層厚は1.8m以上である。また、その後南側への盛土（新段階：ＸＶ層）によって、新段階の北岸を形成している。これらの変遷の中で、3つの杭列が北から南へ段階的に構築されている。

西岸でも北岸と同様、一部版築状の特徴をもつ盛土（古段階：ＸＸⅠ層）を確認した。藩政期の絵図では、この箇所は土塁となっており、その斜面が同時に堀の西岸となっていたと考えられる。また、この盛土に東西方向の断ち割りを行ったところ、層の堆積がほぼ水平であることが確認された。盛土以前の原地形は不明であるが、ほぼ水平に土を積み、西岸（土塁）の壁面を形成したものと考えられる。その上面は階段状となり、各段には円礫による集石が確認された。西岸でもその後、新たに盛土（新段階:ＸⅣ層）され、それと前後して杭列４、５が構築されている。以下、各検出遺構について個別に記述する。

【北岸検出遺構】

・杭列１　北岸（古段階）の落ち際ラインから南へ約10cmで、径約11cmの杭を東西に２本検出した。杭列の傾きはＥ－14°－Ｎである。いずれも北岸（古段階）の崩落土であるＸⅥ層に覆われていたが、杭の上部は腐植が著しく加工痕跡等は確認できなかった。東西2本の杭の間隔は4.2mであるが、中間の杭についてはコンクリート枡があるため確認できなかった。杭の設置面は不明であるが、その位置関係から古段階の北岸に伴う可能性が高い。

・杭列２　杭列１の南約３mで検出された。縦杭と横杭が組んだ状態で検出され、上述のコンクリート枡を挟んで東西で確認された。杭列の傾きはＥ－7°－Ｎである。まず東側では、上端を水平に切られた径12cmのたて杭が1本と、その上端から約60cm下で直交する径11cmの横杭1本を検出した。両者を固定した痕跡は特に確認されなかった。また、縦杭に見られる枝の切り残しが下向きであることから、現場で打たれたものではなく、盛土する前に設置されたものと考えられる。西側では、約20cmの間隔で直立する径10～12cmの縦杭2本とそれらに直交する径７～10cmの横杭２本を検出した。縦杭の上端は２本とも水平に切られた状態であった。上下２段の横杭には、幅１～２cmの竹材を少なくとも５本巻きつけ固定した痕跡が確認された。また、縦杭には、枝の切り残しが下向きに見られることから、東側と同様盛土する前に設置されたものと考えられる。さらに杭の北側では、ＸＶd層上面で南北方向に延びる径２cm程の竹を１本検出した。竹は約2.2mの長さで検出されたが、北端は腐食しており、杭列１の西杭から南へ約45cmの箇所で止まった状態であった。南端は、2段の横杭を留めた竹材に繋がるものとみられる。これらは新段階の北岸盛土に伴うものと考えられる。

・杭列３　大部分が調査区の東壁に貼り付いた状態で検出された南北方向の杭列である。平面的には、南北に約4.2m延び、南側でわずかに西へ湾曲した状態で確認された。打込み面はＸＶ層上面である。杭の周囲には打込みによる層の落ち込みが確認された。杭は径４～10cmで12本検出された。さらに杭列上部の幅20～35cm、長さ185cmの範囲には、幅２～３cmの竹材が少なくとも十数本、杭に編み込まれており、竹材の間隙には砂礫の堆積が見られた。

杭列３の年代について、上限については不明であるが、直接覆っているＸＩ層より19世紀代の磁器が出土していることから、この頃までは機能していたものと推定される。

【西岸検出遺構】

・集石遺構　集石は、階段状に盛土されたＸＸＩ層の上面で、一部見られない箇所もあるが、最大で東西7.5m、南北3.2mの範囲から検出された。円礫の大きさは、径10～20cmのものが主体を占める。西岸（土塁）の壁面は４つの傾斜面と３つの小段より構成される。傾斜面は、西側より１段目、２段目、３段目、４段目とする。まず各面の傾斜度をみると、1・2段目が29°、32°、3･4段目が7°、10°で、上下各２段の間には傾斜度に明確な違いがみられる。小段の高さは、下から20cm、20cm、30cmである。集石直上の水性堆積層であるＸⅧ層は、２段目と３段目の間の小段部分より堆積しており、これは丁度、西岸壁面の傾斜変換点にあたる。なお、調査期間中、１段目の中腹より常に一定量の湧水がみられ、特に集石の見られない部分では壁面の崩落が確認された。

・杭列４　西岸壁面の傾斜変換点より東へ約3.5mの箇所で検出された、南北方向の杭列である。杭列の傾きはＮ－22°－Ｗである。また、ＸⅣ層（新段階西岸盛土）上面から10～30cm上部が露出するものの、杭の周囲で打込み等による層の落ち込み等は確認されなかった。ＸⅣ層の盛土以前に構築された可能性も考えられる。杭列は、径10～18cmの縦杭を６本検出した。４本に上部の先細りが見られ、明瞭な加工痕が見られないことから、これらは腐植によるものと判断した。ただし南から４本目の杭のみ、上端部を水平に切られた状態であった。なお、杭列１、２で見られた枝の切り残しは見られなかった。また、杭列東側の平坦面とその落ち際では、東西1.2m、南北４mの範囲に径５～10cmの円礫を主体とする集石が確認された。盛土との関係については、古段階と新段階の両者に伴う可能性が考えられる。

・杭列５　杭列４の東約20～120cmで検出された南北方向の杭列である。杭列の傾きはＮ－36°－Ｗである。設置面はＸⅣ層上面である。杭列は、杭列4の東側にみられた平坦面の落ち際に上端部を揃え、傾斜面に沿った状態で検出された。杭は径10～15cmで、少なくとも4本は上端部が水平に切られた状態で計８本確認された。盛土との関係については、新段階に伴うものとみられる。

（２）２区

２区は、昨年度登城路北側で確認された石組側溝と対になる遺構の検出を目的として設定されたが、今回の調査では確認されなかった。遺構としては、Ⅱc層上面で検出された近代以降の暗渠状遺構が、地表面下約１mで検出されたに過ぎない。また、19世紀代の旧表土層（Ⅲ層）が地表面下約1.2mで確認された。さらにⅢ層直下からは、調査区北壁寄りで、東西1.7m、南北１mの範囲から径５～40cmの円礫が密集した状態で検出された。部分的な検出であり、性格が不明であるため、今回は基本層Ｖ層（礫層）として扱った。上面のレベルが昨年度の第４、６トレンチで検出した礫層（下町段丘基底礫層に比定）に近いことから、段丘礫層である可能性も考えられる。ただし、Ｖ層中には木端石や瓦片が含まれており、暗渠等の人為的な遺構である可能性も否定できない。

（３）３区

土塁頂部では、塀跡等の遺構確認を目的としたが、特に柱穴等の遺構は確認されなかった。土塁内側の平坦部では、地表面下80cmで18世紀後半から19世紀前半を主体とする遺物包含層（Ⅲ層）と、また、その直下より17世紀後半を主体とする遺物包含層（Ⅳ層）を検出した。さらに、Ⅳ層直下のＶ層（無遺物層）を挟み地表面下1.7mで土塁積み土を検出した。土塁は平面的には、３区南東部付近で東西方向より南北方向に向きを変える。３区東壁では、南北方向の土塁壁面が検出され、昨年度と同様、版築状の積み土を確認した。土塁壁面の傾斜度は約48°であるが、西側へ延びるに従いほぼ平坦となり、先述のＶ層直下に連続する。

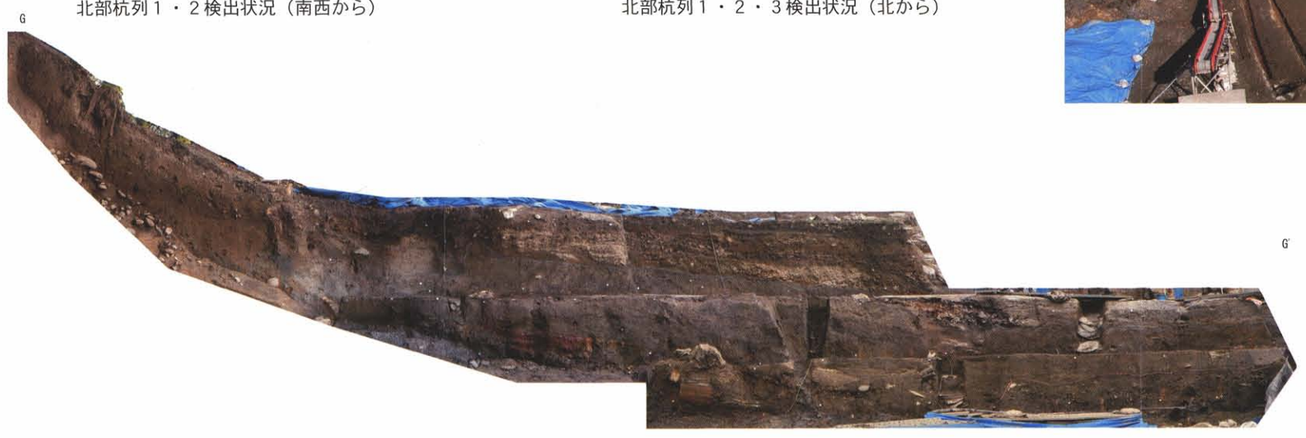
北部杭列２検出状況（南から）

北部杭列１・２検出状況（南西から）

北部杭列１・２・３検出状況（北から）

１区全景（南西から）

北部杭列３検出状況（西から）

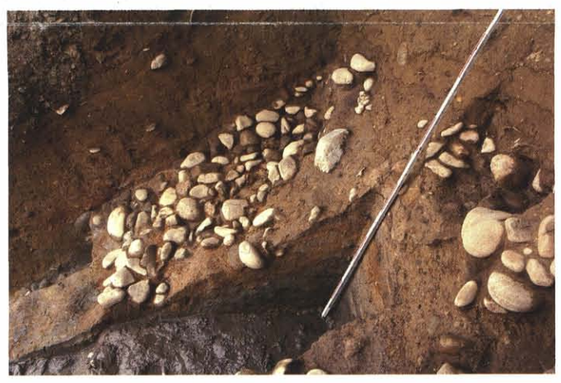


北壁断面合成写真（1/100）

北部杭列３拡大（南西から）

西部集石検出状況（東から）

西部集石検出状況（西から）

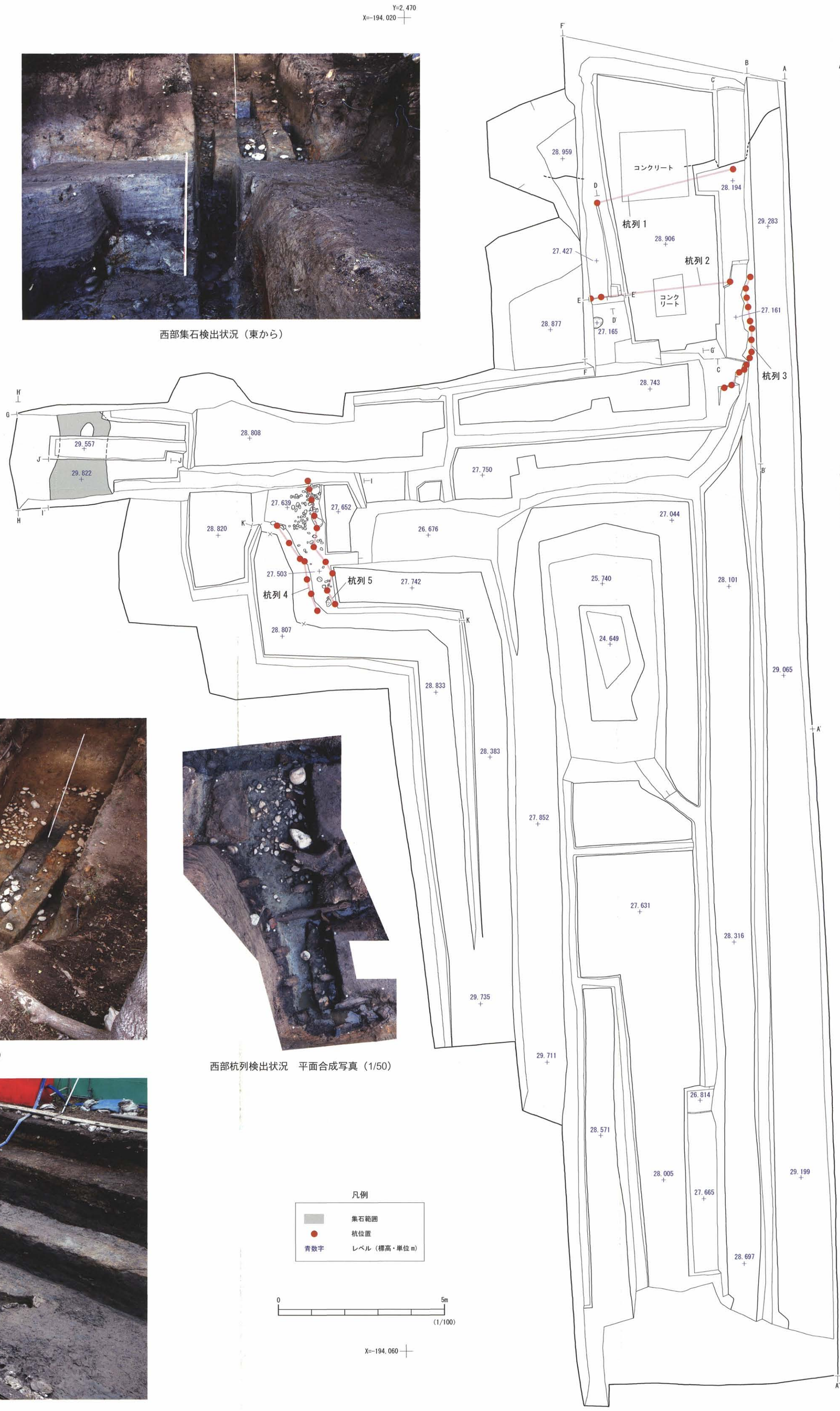


西部集石断ち割り断面（北東から）

西部集石・杭列４・５検出状況（北東から）

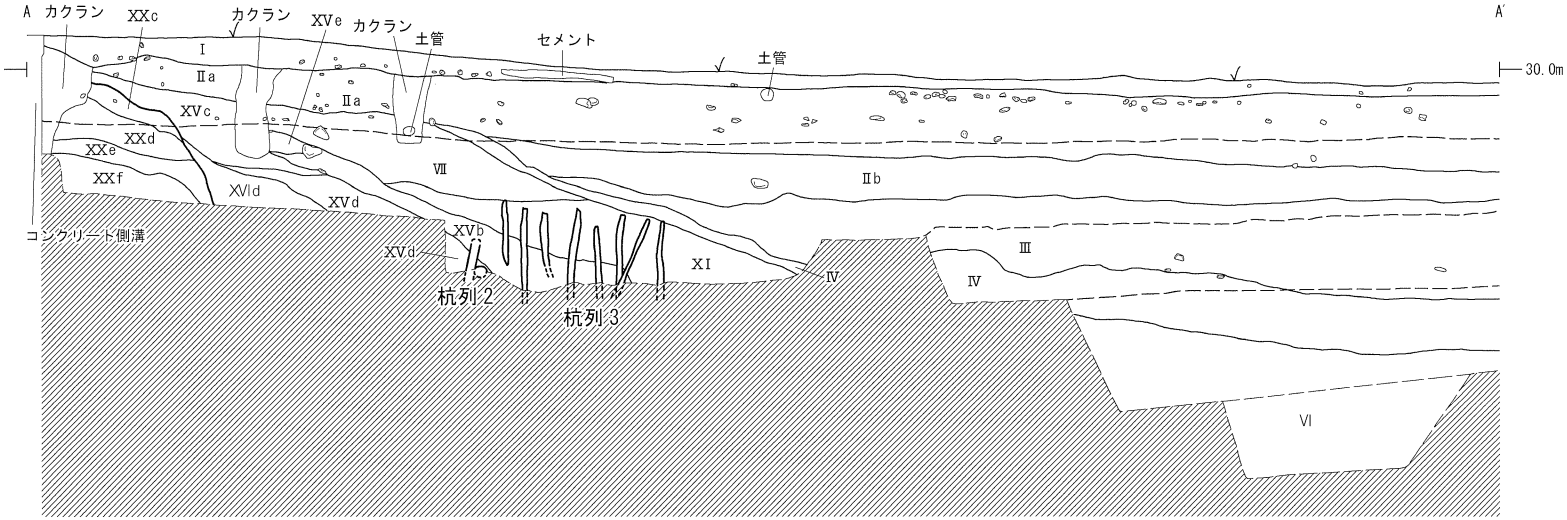
西部杭列検出状況　平面合成写真（1/50）

北・東壁断面状況（南西から）

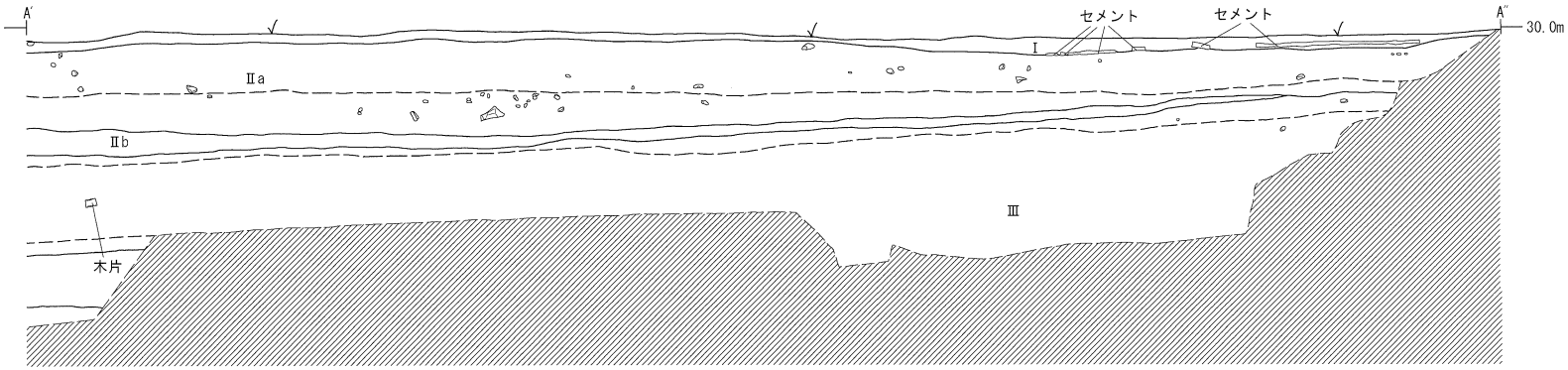


東壁断面合成写真（1/100）

第35図　第16次調査１区　全体遺構平面図（1/100）



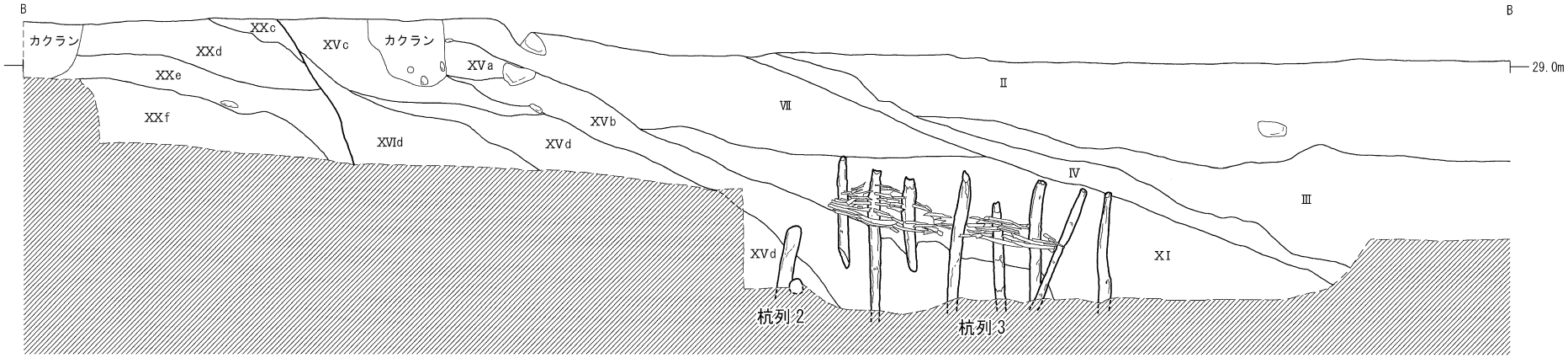
東壁断面図a



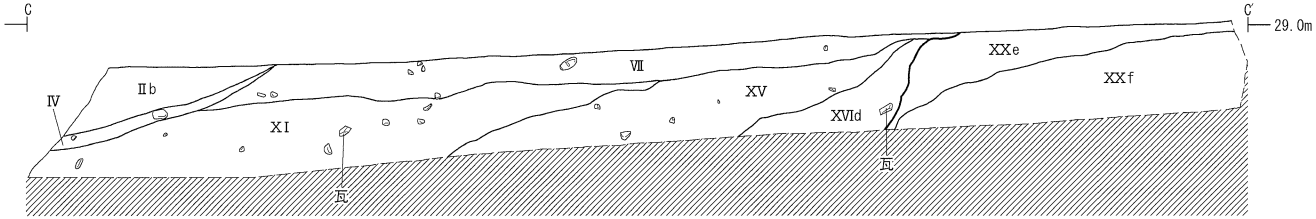
東壁断面図b

第36図　第16次調査　1区断面図1（1/100）

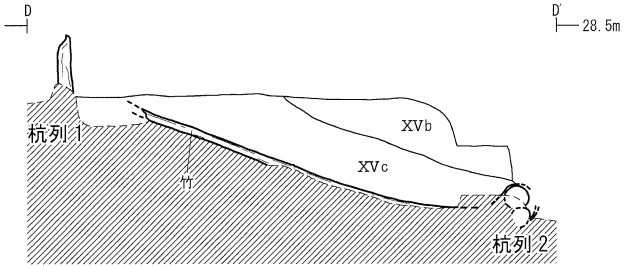
0　4m



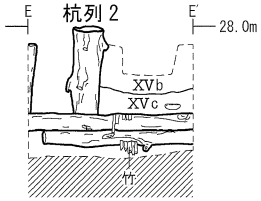
北部西側側溝西壁断面図



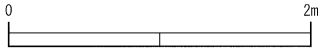
北部東側側溝西壁断面図



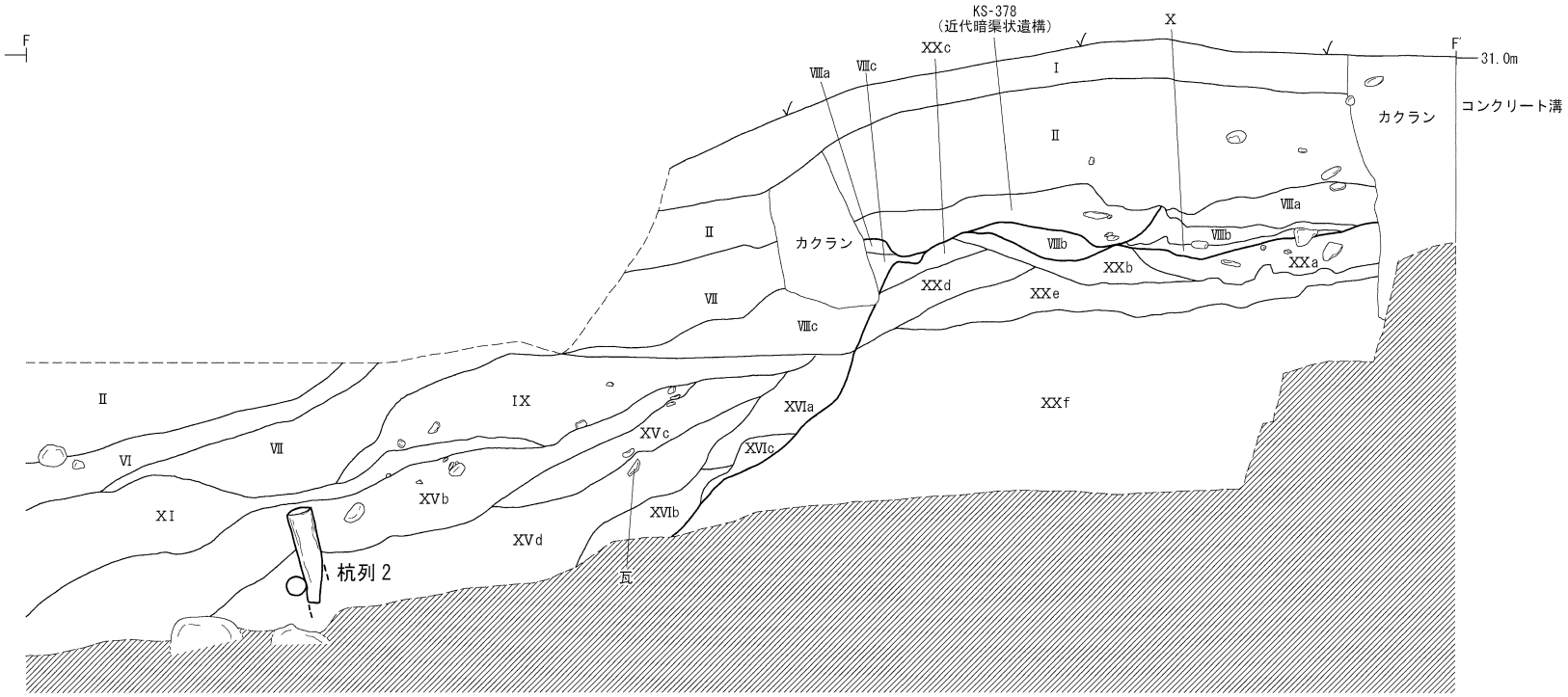
北部西側側溝東壁断面図



北部西側側溝東西断面図



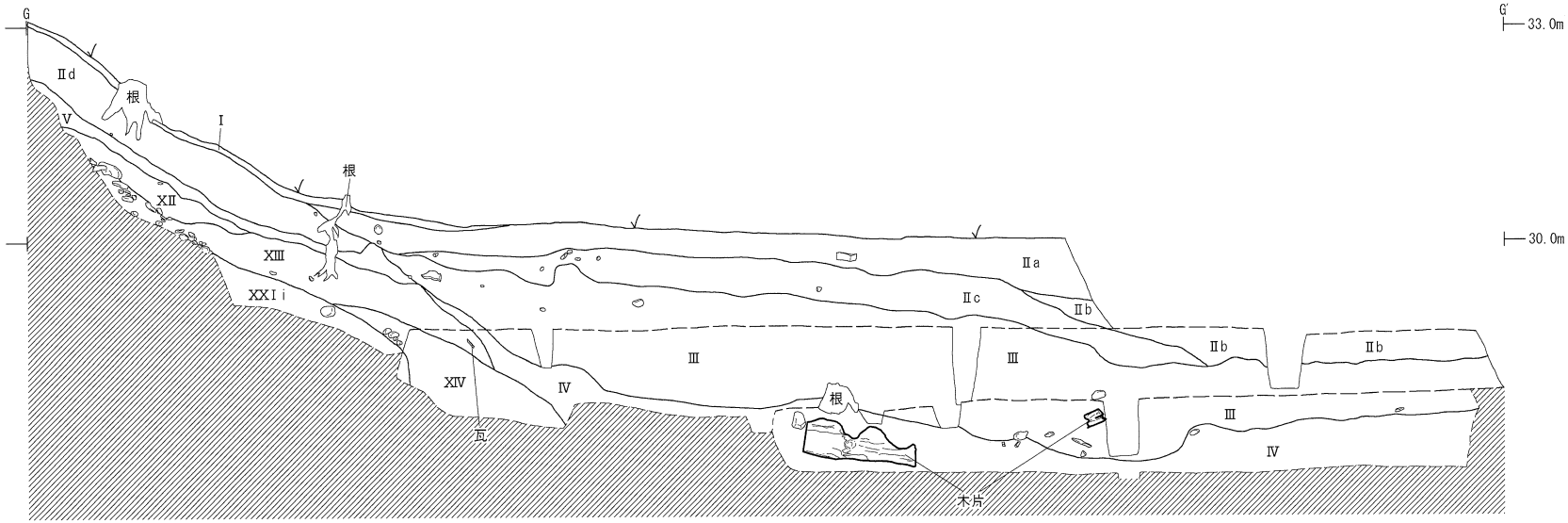
第37図　第16次調査　1区断面図2（1/50）



北部西側側溝西壁断面図

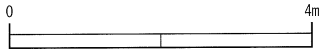
第38図　第16次調査　1区断面図3（1/50）

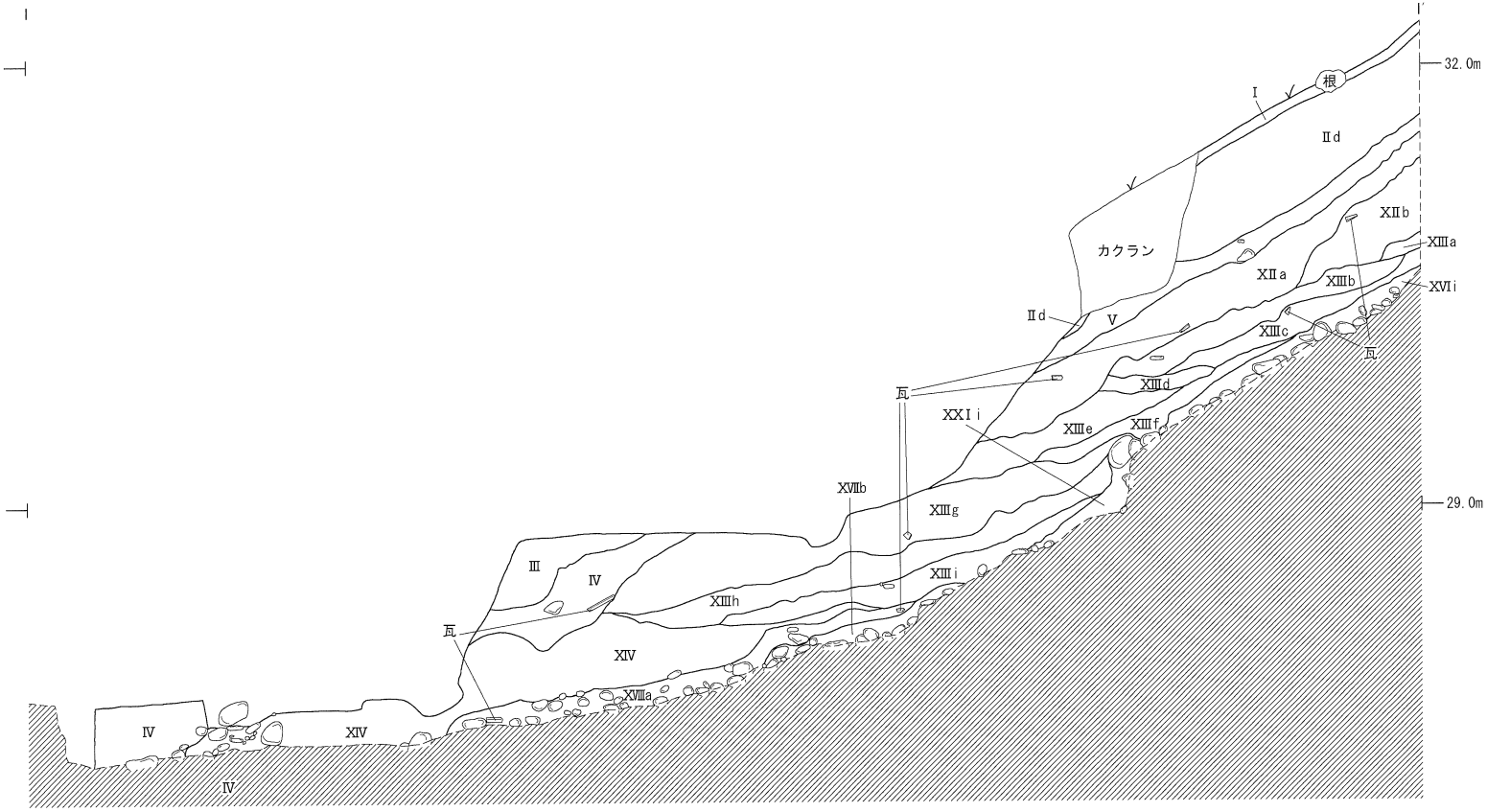
0　2m



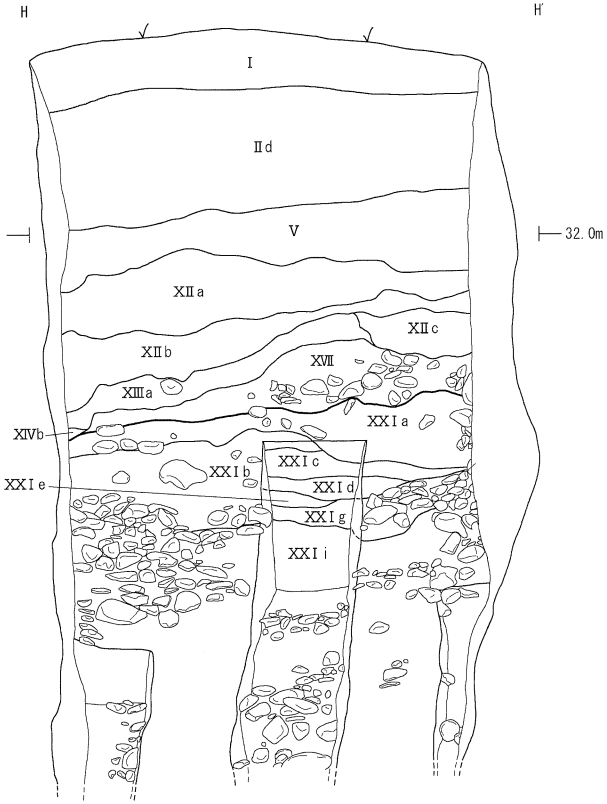
北壁断面図

第39図　第16次調査　１区断面図４（1/100）





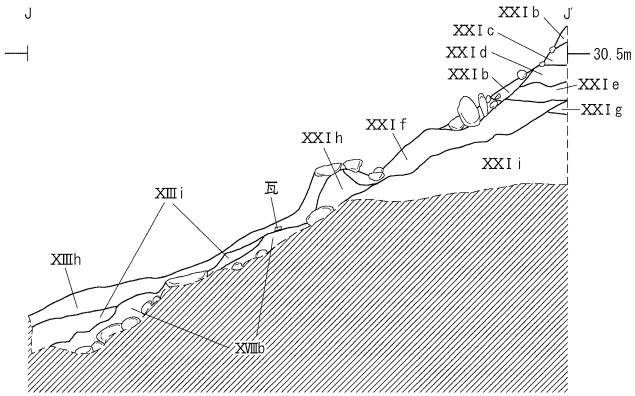
西部南壁断面図



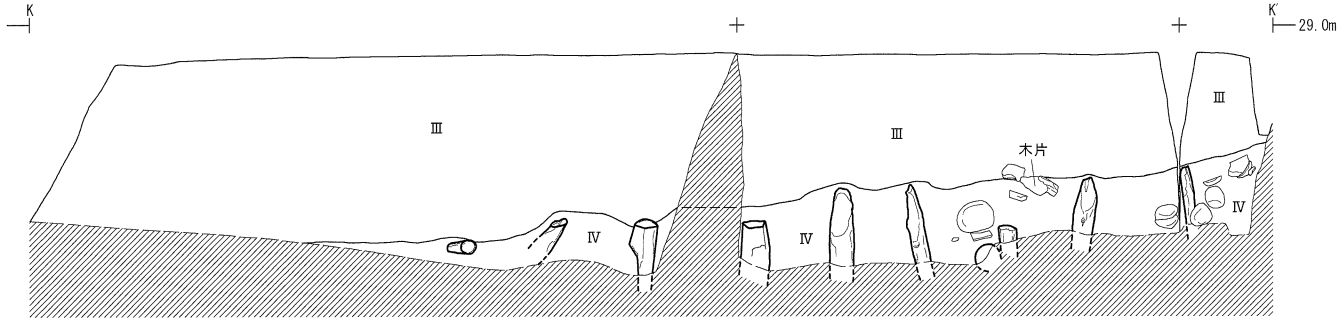
西壁断面断面図

0 2m

第40図　第16次調査　1区断面図5（1/50）

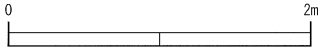


西部断ち割り南壁断面図



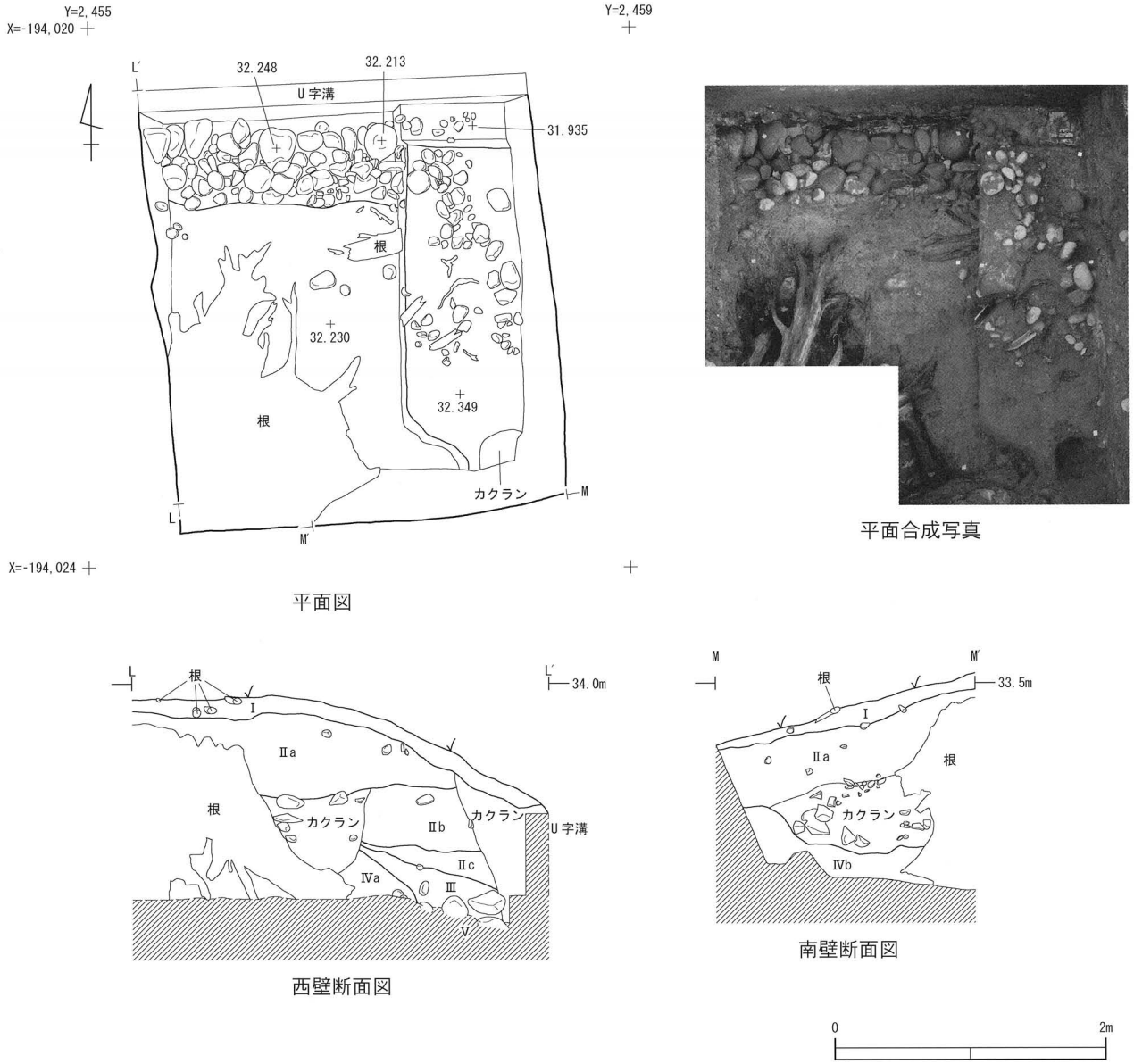
西部杭列４検出断面図

第41図　第16次調査　１区断面図６（1/50）



第12表　第16次調査１区土層注記表

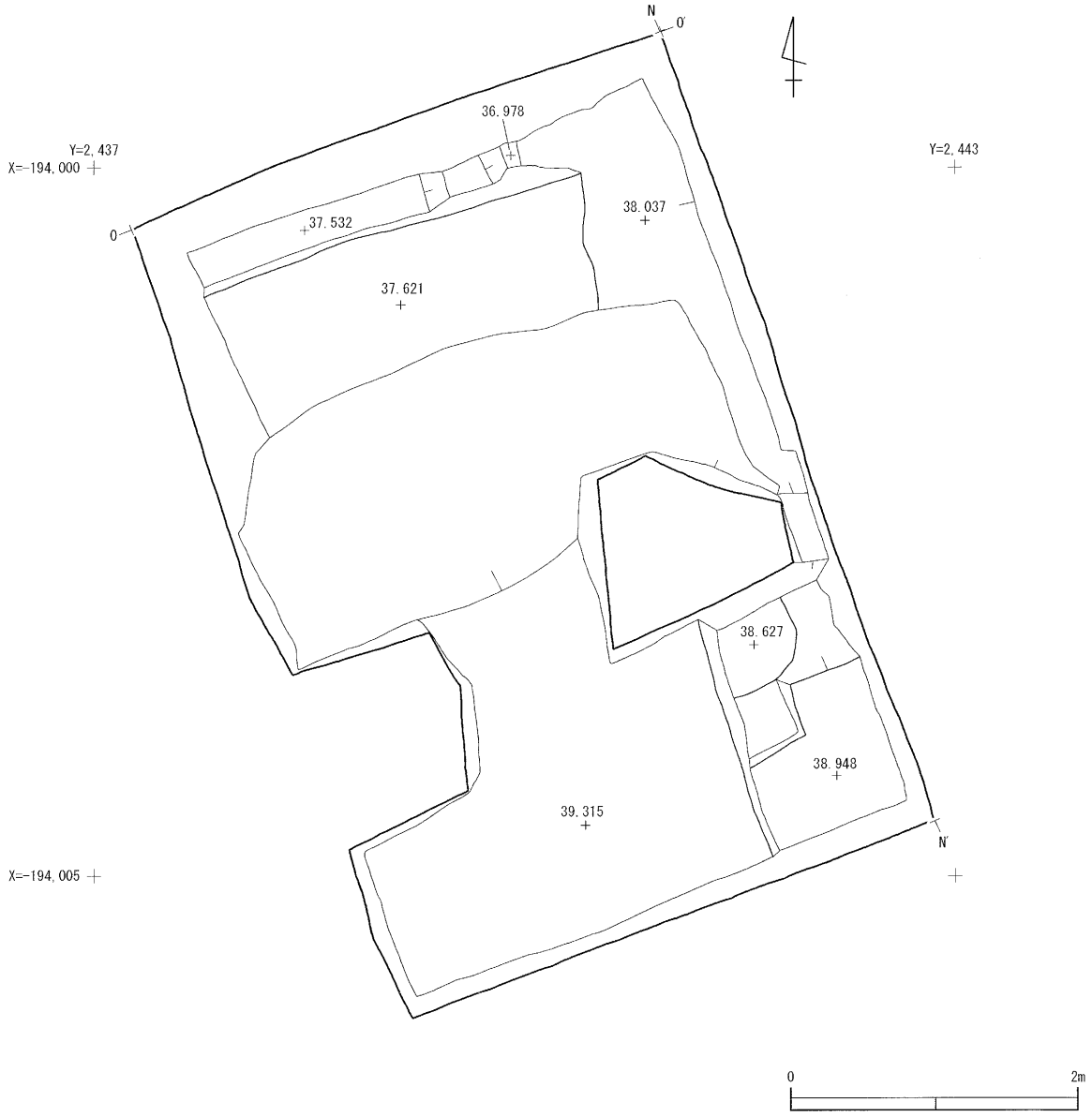
遺構番号	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
基本層序	Ⅰ	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	無	弱	現表土層
	Ⅱa	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	弱	炭ガラを非常に多量含む
	Ⅱb	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有	弱	細砂をラミナ状に多量含む　水性堆積層
	Ⅱc	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	弱	炭ガラを多量に含む
	Ⅱd	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	強	φ1～5mm の凝灰岩粒を多量含む　北・西部のみ
	Ⅱe	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有	中	φ1～10cm の円礫を多量含む　南部のみ
	Ⅲ	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有	弱	細砂をラミナ状に少量含む　水性堆積層
	Ⅳ	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有	弱	自然木、伐採木を多量に含む
	Ⅴ	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有	弱	旧表土層
	Ⅵ	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	有	弱	Ⅲ層土をラミナ状に含む　水性堆積層
	Ⅶ	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	中	崩落土層
	Ⅷa	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	中	10YR3/2黒褐色砂質シルトをφ2～10cm のブロック状にやや多く含む　近代暗渠構築時の盛土層
	Ⅷb	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	中	近代暗渠構築時の盛土層
	Ⅷc	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有	中	10YR4/6褐色細砂をまだら状に少量含む　近代暗渠構築時の盛土層
	Ⅸ	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	中	φ1～5mm の凝灰岩粒を少量含む　崩落土層
	Ⅹ	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質砂	無	中	北岸盛土（古）直上の旧表土層
	Ⅺ	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	中	細砂を互層に含む　杭列3機能時の水性堆積層
	Ⅻa	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	無	中	φ1～10mm の凝灰岩粒を多量含む　崩落土層
	Ⅻb	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	10YR5/2灰黄褐色粘質シルトをφ1～2cm のブロック状に多量含む　崩落土層
	Ⅻc	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	無	中	φ1～10mm の凝灰岩粒を極少量含む　崩落土層
	ⅩⅢa	10YR5/4	にぶい黄褐色	細砂	無	弱	山砂層
	ⅩⅢb	10YR5/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	中	Ⅻa層土をまだら状に少量含む　崩落土層
	ⅩⅢc	10YR4/4	褐色	細砂	無	中	Ⅻb層土をφ1～2cm の粒状に少量含む　部分的にラミナ状の堆積あり　自然堆積層
	ⅩⅢd	10YR5/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	弱	崩落土層
	ⅩⅢe	10YR5/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	弱	Ⅻa層土をまだら状にやや多く含む　崩落土層
	ⅩⅢf	10YR4/4	褐色	細砂	無	中	ラミナ状の堆積が顕著　自然堆積層
	ⅩⅢg	10YR5/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	中	10YR4/4褐色細砂を少量含む　崩落土層
	ⅩⅢh	10YR4/4	褐色	細砂	無	強	10YR5/2灰黄褐色粘土をφ5～10mm の粒状に少量含む　鉄分を多く含む　自然堆積層
	ⅩⅢi	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘質シルト	有	中	ⅩⅧb層土をφ1～3mm の粒状に少量含む　崩落土層
	ⅩⅣ	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	有	強	10YR6/3にぶい黄橙色シルト質粘土をφ1～5cm のブロック状に多量含む　西岸盛土（新）
	ⅩⅤa	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	強	10YR4/2灰黄褐色砂質シルトをφ10cm のブロック状に少量含む　北岸盛土（新）
	ⅩⅤb	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	φ3～10cm の円礫を多量含む　北岸盛土（新）
	ⅩⅤc	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	φ1～3cm の凝灰岩をやや多く含む　北岸盛土（新）
	ⅩⅤd	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	φ3～10cm の凝灰岩、円礫を多量含む　北岸盛土（新）
	ⅩⅥa	10YR5/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	中	10YR5/3にぶい黄褐色シルト質砂をまだら状に多量含む　北岸盛土（古）崩落土層
	ⅩⅥb	10YR5/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	中	10YR5/3にぶい黄褐色シルト質砂をまだら状に少量含む　北岸盛土（古）崩落土層
	ⅩⅥc	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	有	弱	10YR5/2灰黄褐色粘質シルトをまだら状にやや多く含む　北岸盛土（古）崩落土層
	ⅩⅥd	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質砂	無	弱	10YR5/2灰黄褐色粘質シルトと細砂をラミナ状に含む　北岸盛土（古）崩落土層
	ⅩⅦ	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	φ1～3mm の凝灰岩粒を少量、φ5～20cm の円礫（護岸石起源）を多量含む
	ⅩⅧa	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	有	弱	水性堆積腐植土層
	ⅩⅧb	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	有	中	西岸盛土（古）の二次堆積土
	ⅩⅨ	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂	無	中	1区最下層
	ⅩⅩa	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂質シルト	有	強	10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトをまだら状にやや多く含む　北岸盛土（古）
	ⅩⅩb	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂質シルト	有	強	10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトをφ1～3cm のブロック状に多量含む　鉄分を少量含む　北岸盛土（古）
	ⅩⅩc	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	強	10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトをφ5～10cm のブロック状にやや多く含む　鉄分を少量含む　北岸盛土（古）
	ⅩⅩd	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂質シルト	有	強	10YR2/3黒褐色砂質シルトをφ3～5cm のブロック状に少量含む　鉄分を多量含む　北岸盛土（古）
	ⅩⅩe	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	中	10YR2/3黒褐色砂質シルトと10YR4/6褐色細砂をφ3～10cm のブロック状にやや多く含む　北岸盛土（古）
	ⅩⅩf	10YR5/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	強	10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトと10YR2/3黒褐色粘質シルトと10YR4/6褐色細砂をまだら状（一部レンズ状）にやや多く含む　版築状の堆積構造がみられる　北岸盛土（古）
	ⅩⅩa	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	中	西岸盛土（古）
	ⅩⅩb	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘質シルト	有	強	円礫を置いた後積んだ土　西岸盛土（古）
	ⅩⅩc	10YR5/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	中	10YR3/3暗褐色粘質シルトをまだら状にやや多く含む　西岸盛土（古）
	ⅩⅩd	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	中	φ1～3mm の凝灰岩粒を多量含む　下部に鉄分の集積あり　西岸盛土（古）
	ⅩⅩe	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘質シルト	有	強	φ1～3mm の凝灰岩粒を少量含む　西岸盛土（古）
	ⅩⅩf	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘質シルト	有	強	10YR5/2灰黄褐色粘質シルトをまだら状にやや多く含む　西岸盛土（古）
	ⅩⅩg	10YR5/1	褐灰色	砂質シルト	有	強	西岸盛土（古）
	ⅩⅩh	10YR5/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	強	西岸盛土（古）
	ⅩⅩi	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	有	強	10YR3/2黒褐色粘土と10YR7/3にぶい黄橙色粘土とをレンズ状に多量含む　版築状の堆積構造がみられる　西岸盛土（古）



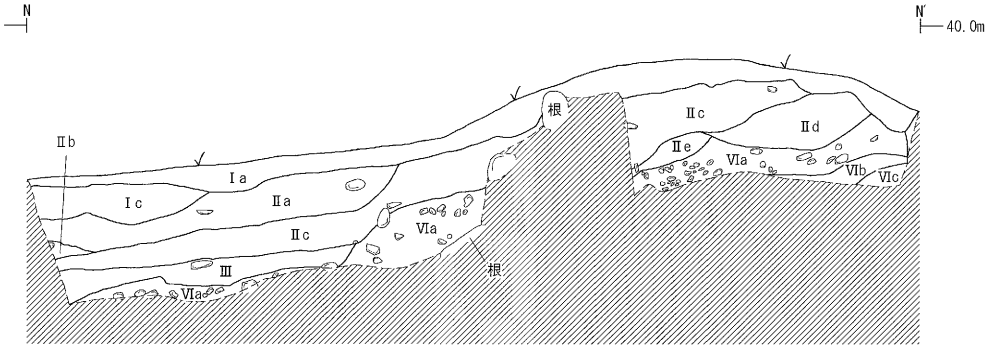
第42図　第16次調査　２区平・断面図（1/50）

第13表　第16次調査２区土層注記表

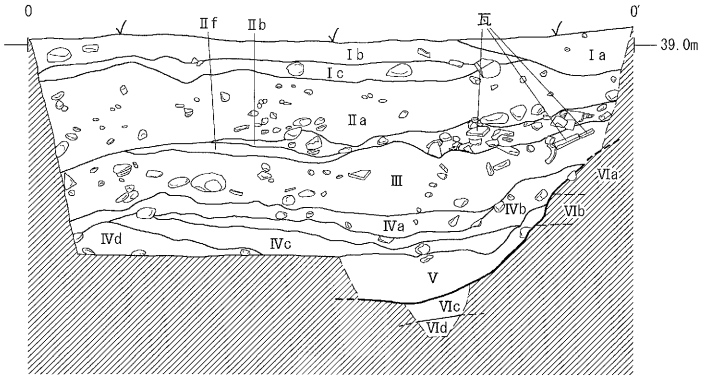
遺構番号	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
基本層序	I	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有	弱	
	IIa	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有	弱	φ3～10mm の凝灰岩粒を多量含む　円礫、炭ガラをやや多く含む
	IIb	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	中	φ1～5cm の凝灰岩ブロックを多量含む　円礫を少量含む
	IIc	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	中	φ1～5mm の凝灰岩粒をやや多く含む　鉄分を含む　上面に暗渠状遺構
	III	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	有	弱	旧表土層
	IVa	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	中	
	IVb	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	無	中	崩落土か
	V	－	－	玉石層	－	－	磁器、瓦片、木端石を含む



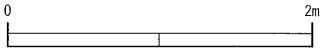
第43図　第16次調査　３区平面図



東壁断面図



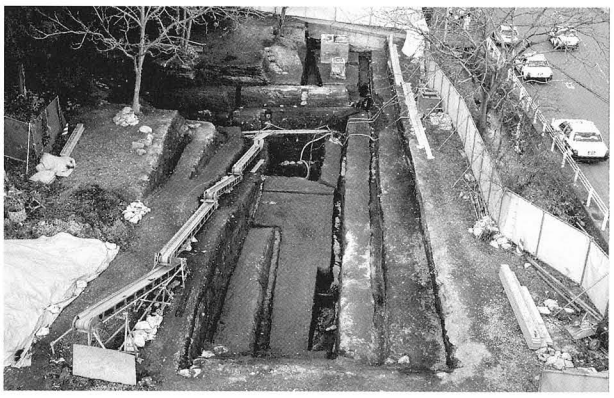
北壁断面図



第44図　第16次調査　3区断面図（1/50）

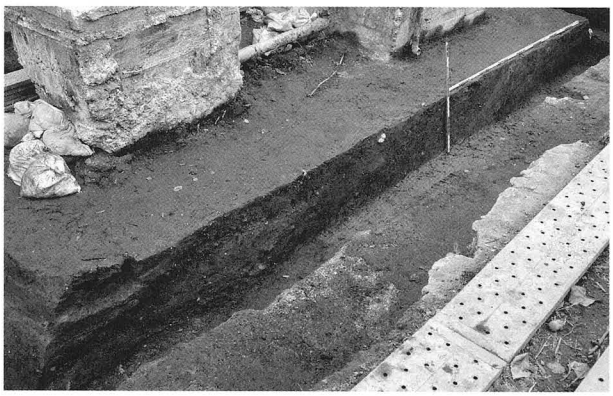
第14表　第16次調査3区土層注記表

遺構番号	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
基本層序	Ⅰa	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	無	弱	現表土層
	Ⅰb	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有	強	φ1～3mm の凝灰岩粒をやや多く含む　現代の盛土層
	Ⅰc	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	無	弱	φ1～3mm の凝灰岩粒を少量含む　融解したガラス片を多量含む　昭和20年空襲時の路面か
	Ⅱa	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	有	強	φ1～10cm の凝灰岩礫を多量含む
	Ⅱb	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	有	中	レンガ、腐食鉄片を多量含む
	Ⅱc	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有	強	φ1～10cm の凝灰岩礫を少量含む
	Ⅱd	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	無	弱	カクラン、植栽痕か
	Ⅱe	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	無	中	
	Ⅱf	10YR4/6	褐色	シルト質砂	無	中	
	Ⅲ	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	有	中	φ5～20cm の円礫をやや多く含む　近世遺物包含層
	Ⅳa	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有	強	φ3～5cm の円礫をやや多く含む　近世遺物包含層
	Ⅳb	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	無	中	近世遺物包含層
	Ⅳc	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有	強	近世遺物包含層
	Ⅳd	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	無	中	近世遺物包含層
	Ⅴ	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	有	強	φ2～4mm の凝灰岩粒を少量含む　一部上面が硬化
	Ⅵa	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	有	中	φ3～20cm の凝灰岩、その他円礫を多量含む　土墨積み土
	Ⅵb	2.5Y3/1	黒褐色	粘質シルト	有	強	10YR6/2灰黄褐色粘質シルトをφ3～5cm のブロック状に多量含む　土墨積み土
	Ⅵc	10YR6/2	灰黄褐色	粘質シルト	有	強	土墨積み土
	Ⅵd	10YR6/3	にぶい灰黄褐色	粘質シルト	有	強	10YR4/1褐灰色粘質シルトをφ1～3cm のブロック状にやや多く含む　土墨積み土



1区全景（南から）

1区全景（北東から）



1区北部東側側溝西壁断面（南東から）

1区北部東側側溝断面、杭列1検出状況（南西から）

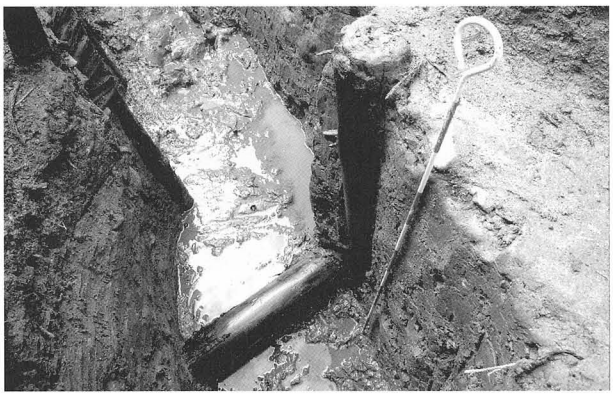
1区北部西側側溝杭列1・2検出状況（北から）

1区北部西側側溝杭列2を留める竹の検出状況（北西から）

1区北部西側側溝杭列2検出状況（南から）

1区北部西側側溝横杭を留める竹検出状況（南東から）

第45図



1区北部東側側溝杭列2検出状況（北東から）

1区北部東側側溝杭列2杭上端の切断面（西から）

1区北部東側側溝杭列2検出状況（北西から）

1区北部東側側溝杭列3アップ（南西から）

1区西部全景（東から）

1区西部集石検出状況（北東から）

1区西部土塁積み土東西断ち割り断面（北から）

1区西部杭列4・5、集石検出状況（北東から）

第46図

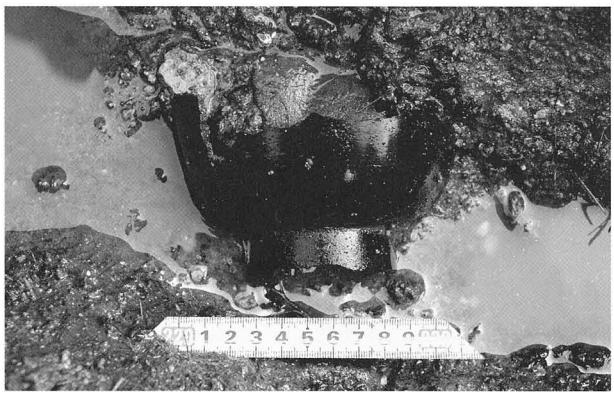
1区西部杭列４・５検出状況（南東から）

1区西部杭列４・５検出状況アップ（東から）

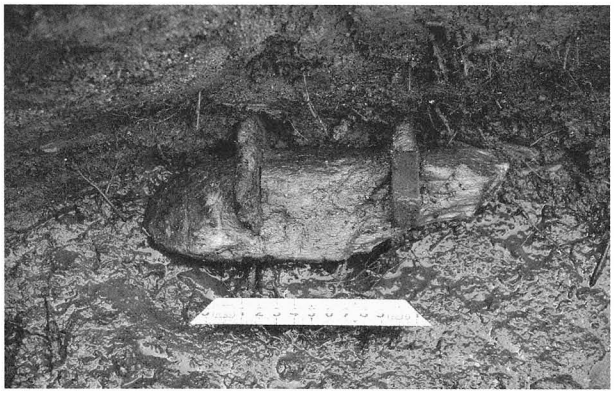
1区南部深堀断面状況（南から）

1区北部Ⅳ層磁器深皿（No.252）出土状況

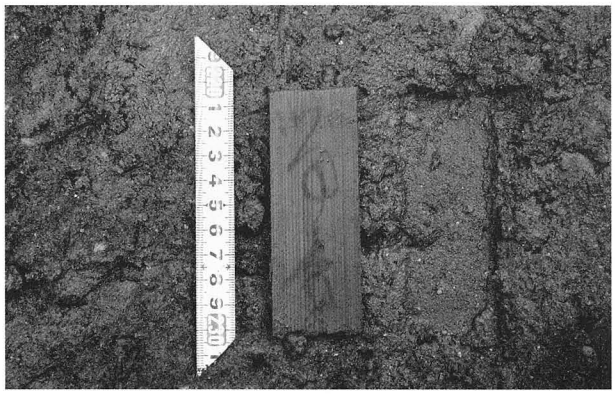
1区北部西側側溝杭列２直下鉄釘（No.71）出土状況



1区北部XI層漆器（No.66）出土状況

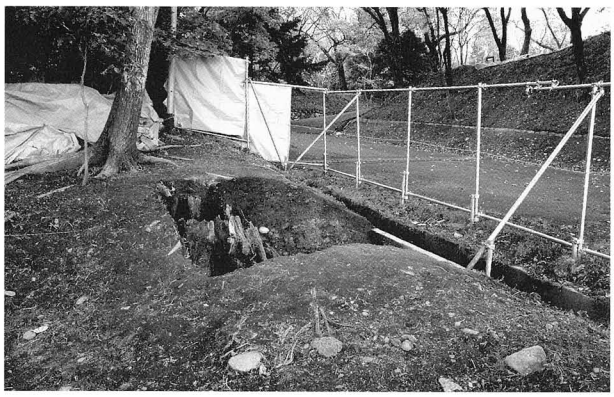


1区北部西側西側側溝Ⅵ層下駄（No.864）出土状況



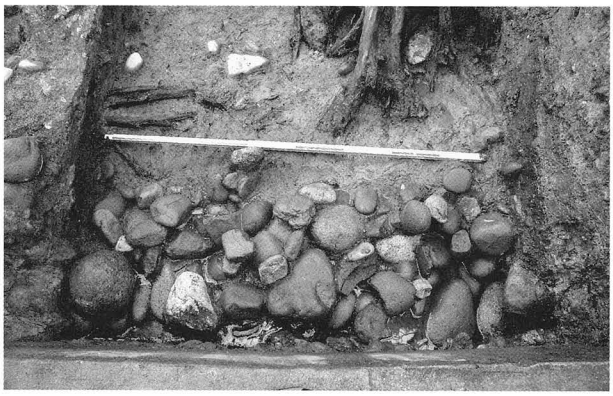
1区北部西側側溝Ⅳ層木簡（No.69）出土状況

第47図



2区全景、土塁、石組側溝（南東から）

2区全景（東から）



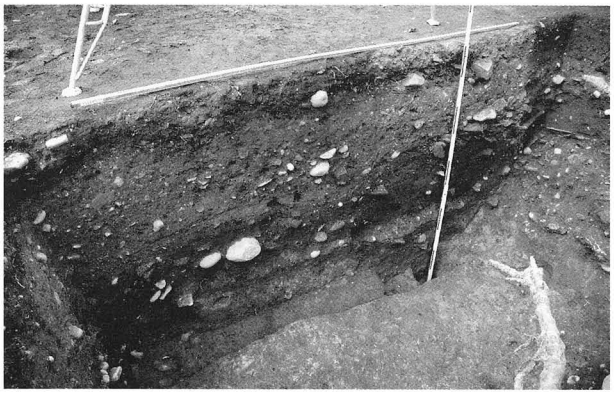
2区礫層（Ⅴ層）検出状況（北から）

2区Ⅳ層磁器角皿（No.57）出土状況

3区全景（北西から）

3区東壁断面（西から）

3区東壁土塁積み土検出状況（西から）

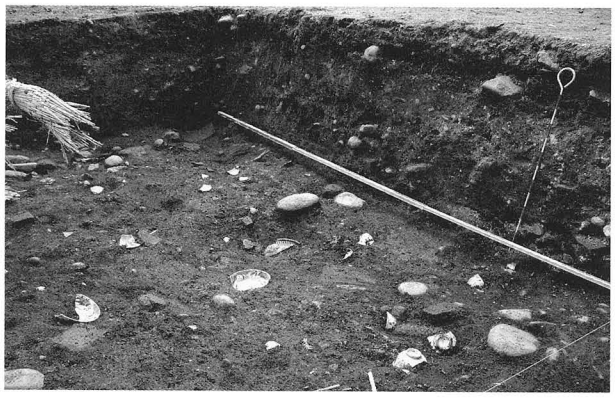


3区北壁断面（南西から）

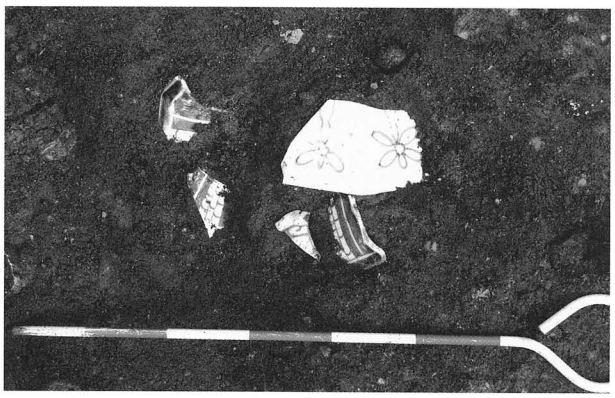
第48図

3区土塁積み土検出状況（南西から）

3区Ⅲ層上面遺物出土状況

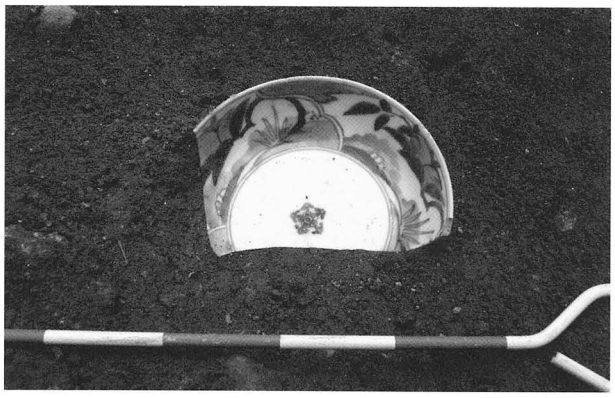


3区Ⅲ層遺物出土状況（南東から）

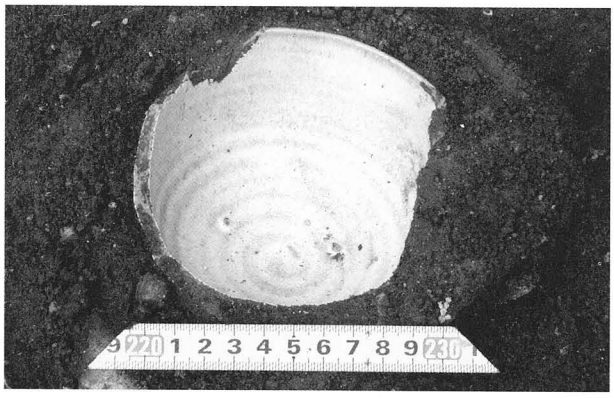


3区Ⅲ層上面染付鉢（No.2）出土状況

3区Ⅲ層染付碗（No.12）出土状況



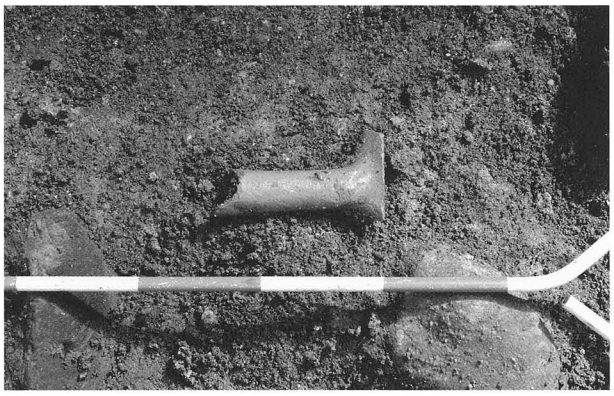
3区Ⅲ層染付深皿（No.14）出土状況



3区Ⅲ層陶器碗（No.101）出土状況

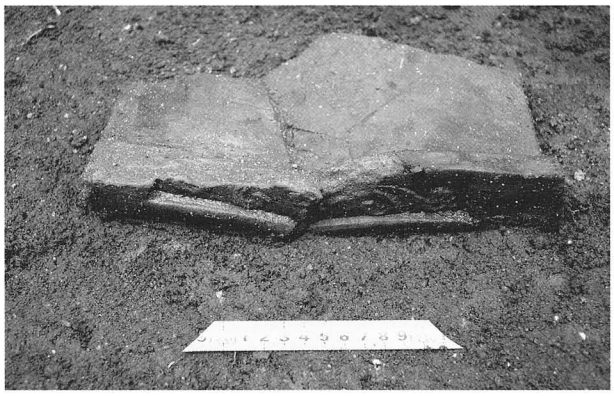
3区Ⅲ層陶器瓶掛（No.18）出土状況

第49図



3区Ⅲ層上面焙烙（No.5）出土状況

3区Ⅲ層土製品（猫No.48）出土状況

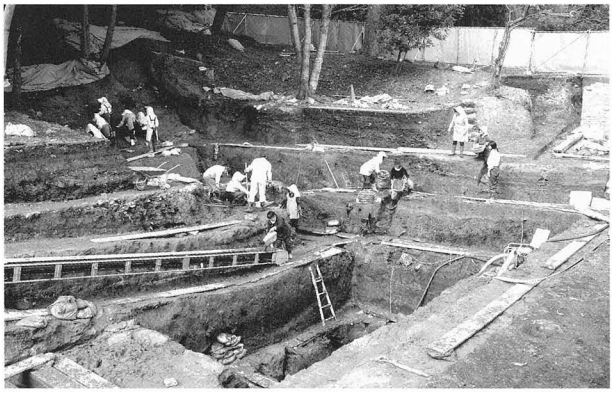


3区Ⅲ層軒平瓦（No.109）出土状況

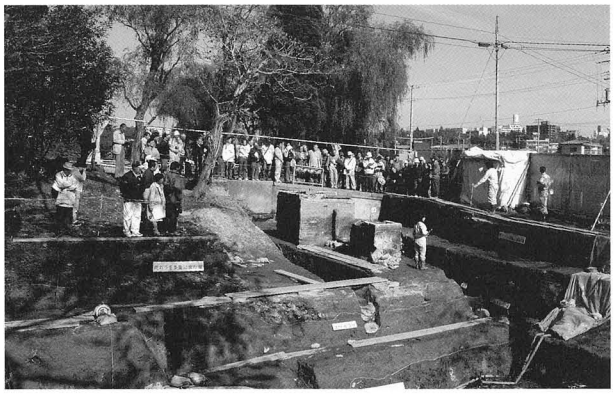
3区Ⅲ層釣針（No.50）出土状況

3区Ⅲ層硯（No.44）他出土状況

3区Ⅲ層特殊瓦（No.54）出土状況



1区作業風景（南東から）



現地説明会風景（南西から）

第50図

4．出土遺物

各遺物の出土点数については、区・遺構・層位別の数量表（第15～19表）を作成し、報告書掲載遺物については観察表（第20～27表）を付した。なお、陶磁器の点数は、接合・分類作業を行い同一個体と判断されるものを1点とし、それ以外は全て破片数として算出した。一括性の高い3区Ⅲ・Ⅳ層出土の近世陶磁器については５．考察で詳述するため、ここでは概要を述べるに留める。

（１）磁器（第15表、第51、52図）

近世磁器は191点出土した。１区では、比較的上層からの出土が多い。近現代の陶磁器はⅥ層より上層で出土している。また、撹乱から古染付の変形皿が１点出土している（第51図２）。２区では、旧表土層（Ⅲ層）から19世紀後半の白磁角皿（第51図３）が出土しており、層の年代を知る上で重要な資料である。３区では、Ⅲ層、Ⅳ層から層位的に近世磁器が出土した。それぞれ18世紀後半～19世紀前半、17世紀を主体とする一括資料である。産地は肥前が圧倒的に多く瀬戸美濃、中国（？）が僅かにみられる。器種は、Ⅲ層では碗が48％で最も多く、他に皿、鉢、段重、瓶、香炉、水滴などがみられる。Ⅳ層では、出土点数が10点と少ないものの皿が半数を占め、瓶、碗がこれに続く。

第15表　第16次調査出土陶磁器他数量表

区	遺構・層位	磁器	陶器	近・現代の陶磁器	土師質土器	瓦質土器	土製品	レンガ	その他	計
1	表採	3	2	23		13			1	42
	撹乱	3	2	24		3				32
	Ⅰ層	4	1	3	1	3				12
	Ⅰ・Ⅱ層	3		20						23
	Ⅱ層	9	9	72	6	8				104
	Ⅲ層	7	2	3	2	1				15
	Ⅳ層	2	4	6				1		13
	Ⅴ層			1						1
	Ⅵ層		2	1		1				4
	ⅩⅠ層	1	3							4
	ⅩⅡ層		1							1
	ⅩⅤb層		1			1				2
	ⅩⅨ層		3			1				4
2	表採			1						1
	Ⅰ層				1	3				4
	Ⅱ層		2	11	3					16
	Ⅲ層上面		2							2
	Ⅲ層		1	1						2
	Ⅳ層	1								1
	Ⅴ層	2								2
3	表採	1	2							3
	Ⅱ層	11	10	10	2	3				36
	Ⅲ層上面	3			1	1				5
	Ⅲ層	133	192		64	14	11		1	415
	Ⅳb層上面	3	1							4
	Ⅳb層	2	1		1					4
	Ⅳc層	5	2		1					8
	計	193	243	176	82	52	11	1	2	760

（２）陶器（第15表、第53、54図）

近世陶器は242点した。１区では、藩政期の堀底堆積物であるⅩⅨ層から出土した常滑の中世陶器、17世紀中頃の唐津の鉢、17世紀の美濃の香炉が注目される（第53図30～32）。３区では磁器と同様に一括資料がⅢ・Ⅳ層から層位的に出土した。産地は、Ⅲ層では大堀相馬が全体の71％を占め、他に小野相馬、肥前（唐津含む）、京・信楽系、瀬戸美濃、岸系、堤などがみられる。器種は、碗が47％で最も多く、他に皿、鉢、瓶類、土瓶・急須、仏飯器、香炉、水滴がみられる。Ⅳ層では、点数は少ないが肥前、丹波、岸系などの資料がみられる。器種は、碗、擂鉢、香炉がみられる。

（３）土師質土器（第15表、第55図）

土師質土器は82点出土した。３区Ⅲ層から64点とまとまった出土がみられる。皿が多い。ほとんどが法量復元のできない小片であるため、口径等に関して全体的な傾向を知ることは困難である。口径の計測または復元できた皿は、３区Ⅲ層出土の４点のみである（第55図70～73）。値の小さい順に50㎜、66㎜、80㎜、132㎜であり、一定のまとまりはみられない。より小さい３点には口縁部内外に炭化物、油煙の付着が見られ、灯明皿と考えられる。また、第55図75は擂鉢のミニチュア土器で、内面には筋目がみられる。なお、この資料は胎土がやや白味がかっており、皿が赤褐色であるのと特徴を異にする。

（４）瓦質土器（第15表、第55図）

瓦質土器は52点出土した。全体に破片資料が多い。１区では、ほとんどが近代以降の層から出土している。３区Ⅲ層からは14点と比較的まとまった出土がみられ、４点図示した（第55図76～79）。76は鉢の底部であるが、全体に被熱しており著しい焼けハジケがみられる。78は壺等の落とし蓋と考えられる。77、79は器種不明であるが、77については底が無く窓がつくことから、瓦灯等の可能性が考えられる。

（５）土製品（第15表、第55図）

11点あり、全て３区Ⅲ層からの出土である。破片資料が多く、種類のわかる４点を図示した（第55図80～84）。80は猫でほぼ完形である。81は猿の頭部で内部に孔がみられる。頭部の可動するタイプと考えられる。82は完形で、笠とみられる。83、84は犬で中空の左右合型作りである。内面には指圧痕が見られる。

（６）瓦（第16表、第56、57図）

瓦は総計2,919点出土し、このうち丸瓦が576点、平瓦が2,120点で併せて全体の92％を占める。区毎の出土傾向をみると、１区ではＸＶ層（新段階北岸盛土）など近世期の層からもまとまった出土はあるが、多くは近代以降の層から出土している。２区でも近代以降の層から多く出土しているが、19世紀代の旧表土と考えられるⅢ層からも82点と比較的多くの瓦が出土している。３区では、１，２区と異なり近世の遺物包含層であるⅢ層からの出土が最も多い。３区全体の約半数がⅢ層からの出土である。ほとんどが破片資料であるが、丸瓦、平瓦を中心に軒丸瓦、軒平瓦、伏間瓦、熨斗瓦、輪違い、平板類など多様な瓦が出土している。また、Ⅳ層からも丸・平瓦を中心にまとまった瓦の出土がみられた。なお、文中（　）内の数字は図示した遺物の番号である。

①軒丸瓦　42点出土した。瓦当文様の判別可能なものは25点である。文様構成は、１区が九曜文３点、三巴文６点、珠文三巴文２点である。特に最下層のＸⅨ層から出土した三巴文（85）は、17世紀代の陶器と共伴している。２区からの出土は無い。３区は九曜文９点、珠文三巴文４点である。それぞれ４点、２点がⅢ層からの出土である。九曜文１点を図示した（91）。Ⅳ層から文様のわかる資料は出土していない。

②軒平瓦　23点出土した。瓦当文様の判別可能なものは５点である。文様構成は、１区が花菱文１点（96）、２区が梅文１点である（99）。３区は桔梗文１点（97）、花菱文（四弁花）１点（98）、雪持笹文１点（101）である。全てⅢ層からの出土で、他に主文様は不明であるが、隅切の軒平瓦が１点出土している（95）。また、Ⅳc層から瓦当面に刻印（六つ星）のある資料が出土している（100）。同種の刻印は三の丸跡より出土した遺物に認められる。

③軒桟瓦　５点出土し、いずれも瓦当文様の判別可能な資料である。文様構成は、１区が勾玉文１点（94）、三巴文1点である。２区は勾玉文１点である（93）。３区は、三巴文２点である（92）。

④棟瓦　主に棟に使用される瓦を棟瓦と総称する。32点出土した。内訳は、１区が伏間瓦６点、熨斗瓦３点、輪違い３点、面戸瓦６点（103）である。多くが近代以降の層から出土している。２区は面戸瓦１点である。３区は、伏間瓦３点（105、106）、熨斗瓦２点（111）、輪違い５点（102）、面戸瓦３点（104）である。

⑤飾り瓦　詳細不明の２点を含む５点が出土した。内訳は、１区が鬼瓦１点、鯱瓦１点（108）である。2区は菊瓦１点である。３区からは詳細不明の資料２点である。

⑥駒瓦　12点出土した。１区４点、２区３点、３区５点である。

⑦塀瓦　44点出土した。これは、平板、桟付平板、駒付平板、T字瓦の総数である。１区では平板６点（115）、桟付平板１点、駒付平板２点が出土した。２区では平板２点が出土した。３区では平板16点（113、116）、桟付平板16点（112、114）、T字瓦１点（107）が出土した。

⑧その他　この他、種別不明の瓦が23点出土した。内1区出土の１点を図示した（109）。

第16表　第16次調査出土瓦数量表

区	遺構・層位	丸	平	軒丸	軒平	軒桟	桟瓦	冠伏間	伏間	亀伏間	熨斗	輪違	面戸	飾り	駒	平板(厚)	水切	桟付平板	駒付平板	T字	不明	計
1区	表採	27	82	1	1		1						2			3	1		2		2	122
	撹乱	6	56	1	1	2	13		2		1										1	83
	Ⅰ	5	33	1	1		1														1	42
	Ⅰ・Ⅱ	2	28	1										1								32
	Ⅱ	33	166	4	1		3	1	3		2	1	1			1	1	1			2	220
	Ⅱd	1	20				1															22
	Ⅲ	37	158	2			2					1			1						2	203
	Ⅳ上面	1	2																			3
	Ⅳ	29	166	3	1		2						3	1	3							208
	Ⅴ		1																			1
	Ⅵ	1	1																			2
	Ⅶ	1	11																			12
	Ⅹ	63	20																			83
	ⅩⅠ	6	41																			47
	ⅩⅡ	2	21																			23
	ⅩⅢ	8	51									1										60
	ⅩⅢi		1																			1
	ⅩⅣ	4	23	2																		29
	ⅩⅤ	7	35	1																		43
	ⅩⅤb	15	88																			103
	ⅩⅧa	3	2																			5
	ⅩⅧb				1																	1
	ⅩⅨ			1																		1
	不明		2																			2
2区	表採		15	1																		16
	撹乱		3																			3
	Ⅰ	8	20			1							1									30
	Ⅱ	24	99		1		1							1	2	2						130
	Ⅲ	16	66																			82
	Ⅳ上面	1	5																			6
	Ⅳ	1	24	2																		27
	Ⅴ	14	32												1							47
3区	表採	9	14	3			1					1										28
	撹乱	10	21	1			1						1									34
	Ⅰ	9	37				1														2	49
	Ⅱ	68	266	5	7	1	4				1	2		2	2	6	5	7			4	380
	Ⅲ上面	17	35	1			1									1	1	1				57
	Ⅲ	128	421	10	7	1	4	2		1	1	2	2		3	1	2	7		1	7	600
	Ⅳ				1											1		1				3
	Ⅳa	2	8																		1	11
	Ⅳb	6	8	2																		16
	Ⅳc	12	36		1																1	50
	Ⅴ		2																			2
	計	576	2120	42	23	5	36	3	5	1	5	8	10	5	12	15	10	17	2	1	23	2919

（７）金属製品（第17表、第58、59図）

246点出土した。内96％の235点が３区からの出土である。残りは１区からの出土で、２区からの出土は無い。１区では、１点を除き全て近代以降の層から出土している。Ⅲ層より出土した蹄鉄（第58図117）はいわゆる有溝式の蹄鉄で、軍隊により使用されたものと考えられる。ⅩⅤb層より出土した鉄釘（第58図121）は、杭列２西側の横杭直下から出土した。上半部が欠損しており、頭部形状は不明である。また、表面に赤錆とは異なる赤色顔料の付着が見られる。

第17表　第16次調査出土金属製品数量表

区	遺構・層位	煙管	かんざし	釣針	刀剣の縁	古銭	銅線	その他銅製品	灯明皿	鉄釘	鎹	蹄鉄	その他鉄製品	計
1	Ⅱ										1			1
	Ⅲ											1	6	7
	Ⅳ												2	2
	ⅩⅤd									1				1
3	Ⅱ									4				4
	Ⅱd							1						1
	Ⅱ下面												97	97
	Ⅲ上面					1								1
	Ⅲ	5	2	2	1	14	3	2	1	54			46	130
	Ⅳb					1								1
	Ⅳc					1								1
	計	5	2	2	1	17	3	3	1	59	1	1	151	246

３区では、Ⅲ層直上のⅡc層最下部から97点の鉄製品が出土した以外は、全てがⅢ・Ⅳ層からの出土である。鉄製品については、腐植が著しく種別不明であるが、レンガが共伴することから近代以降の遺物と考えられる。

Ⅲ層出土の金属製品は全130点で、内訳は煙管５点、簪２点、釣針２点、刀剣の縁１点、古銭15点、銅線３点、鉄製灯明皿１点、鉄釘54点、その他銅・鉄製品48点である。煙管はいずれも吸口のみである。２点図示した。第59図129にはラウの残存がみられた。簪は２点とも図示した。第59図127は端部に耳かきが付くタイプで、文様表現もみられる。釣針も２点とも図示した。第58図123は、全長６㎝近い比較的大形のものである。第58図122は刀剣の縁である。その大きさから、刀剣は比較的小型のものと思われる。古銭は３区出土の17点全てを掲載した（第59図130～146）。Ⅲ層からは古寛永３点、新寛永（文銭）２点、新寛永９点、不明１点が出土した。鉄製の皿は灯明皿と考えられる（第58図118）。口径は110㎝で口縁部には長さ２㎝程の突起が付く。

Ⅳ層出土の金属製品は古銭２点のみで、古寛永と永楽通宝がみられる。特に古寛永の存在は、その初鋳が寛永13（1636）年であることから、Ⅳ層の堆積年代がこれを遡らないことを示している。

（８）ガラス・石製品（第18表、第60図）

第18表　第16次調査出土木製品数量表

区	遺構・層位	漆器	木簡	下駄	桶側板	箱型木製品	その他	計
1	表採			3				3
	Ⅱ			2				2
	Ⅲ			1			5	6
	Ⅳ				5	1	11	17
	Ⅳ下部			1	1		9	11
	Ⅴ						3	3
	Ⅹ	1	1	1				3
	Ⅺ	1					4	5
	計	2	1	8	6	1	32	50

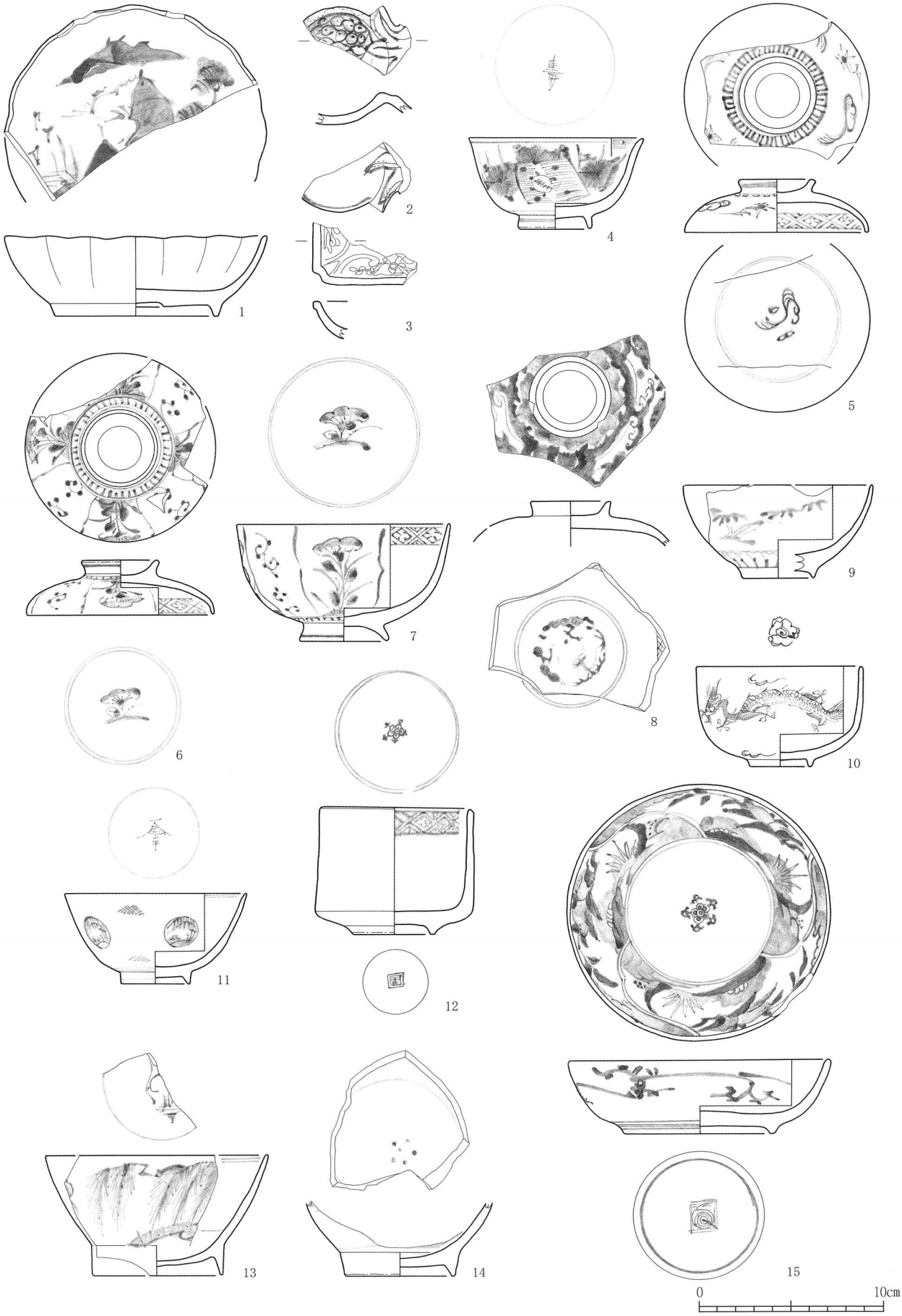
14点出土した。2点を除き全て３区からの出土である。Ⅲ層からまとまった出土があり、ガラス玉１点、硯３点、碁石１点、火打石１点、水晶１点、不明石製品１点である。ガラス玉（第60図147）は径14.4㎜で中心に孔が見られる。表面は白色であるが一部剥落し、内部から淡青色のガラスが確認される。硯は２点図示した（第60図151、152）。151は赤褐色の粘板岩製で、長さ89㎜、幅35.7㎜のやや小型の硯である。表裏両面が硯として利用されたものと考えられる。ただし裏面（図右側）については、加工痕とみられる幅１～２㎜の線刻が縦横に残っており、加工途中で破損した可能性も考えられる。152は黒色の粘板岩製で、上部1/3で折れている。長さ146.2㎜、幅58.9㎜である。裏面に深さ３～４㎜の肉抜きがみられる。150は碁石である。長径18㎜、短径16.3㎜で乳白色の白石である。149は水晶で全長32.8㎜である。148は玉髄製の火打石である。図正面と両側面が面的に加工されており、面の境界部分には著しい潰れが観察される。153は泥岩質の石材を加工した不明石製品である。周囲が破損しており、全体の形状は不明である。厚さは18㎜で、残存最大長は110.2㎜である。図の上部と左下に７㎜程の段差がみられる。また、左側には幅７㎜以上、深さ８㎜、断面U字形の溝が彫られている。表面には、やや上部に深さ約７㎜のハート形の窪みがみられ、その左下には植物文様が線刻されている。その周囲は方形の二重線で区画され、二重線の間には約５㎜間隔で短い斜線が見られる。さらに斜線の間には、１つ置きに、それと直交する方向で、幅0.5㎜以下の線刻がなされている。硯等の可能性もあるが用途は不明である。

（９）木製品（第19表、第61、62図）

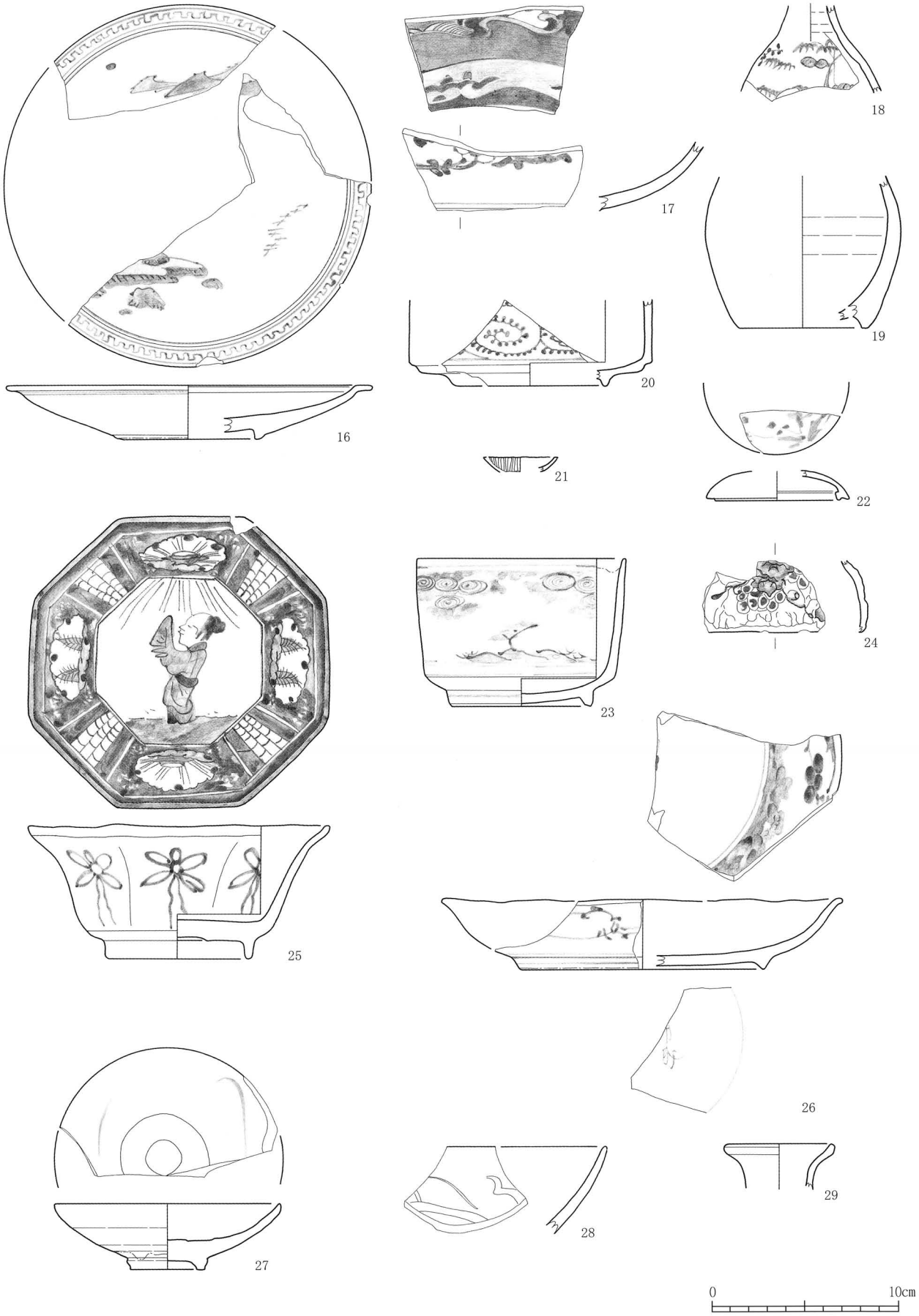
第19表　第16次出土ガラス・石製品数量表

区	遺構・層位	ガラス（玉）	硯	碁石	火打ち石	水晶	その他	計
1	表採		1					1
	Ⅳ						1	1
3	Ⅱd		1					1
	Ⅲ	1	3	1	4	1	1	11
	計	1	5	1	4	1	2	14

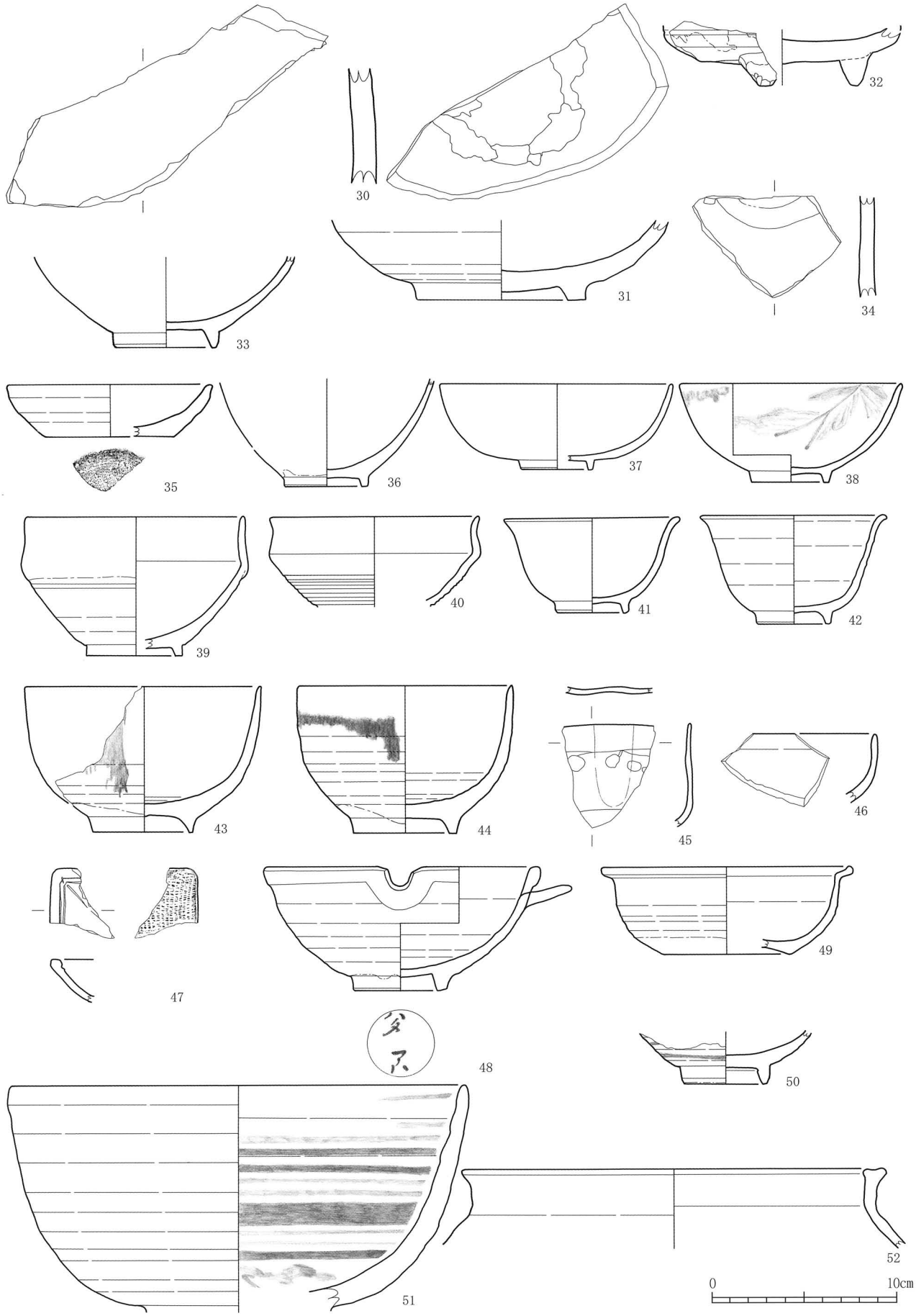
50点全て１区からの出土である。木簡、漆器椀、下駄、桶等がみられる。第61図154は木簡である。下半部が欠損している。「御用之□（鶴カ）」の墨書がみられる。155は漆器の椀である。内面朱漆、外面黒漆で文様等は見られない。156は用途不明の箱型木製品である。底面に少なくとも4つの孔が見られる。157は黒漆の上に朱漆で文様（？）を表現したものである。158、159は下駄である。160～162は桶・樽の一部である。162はいわゆる提桶である。



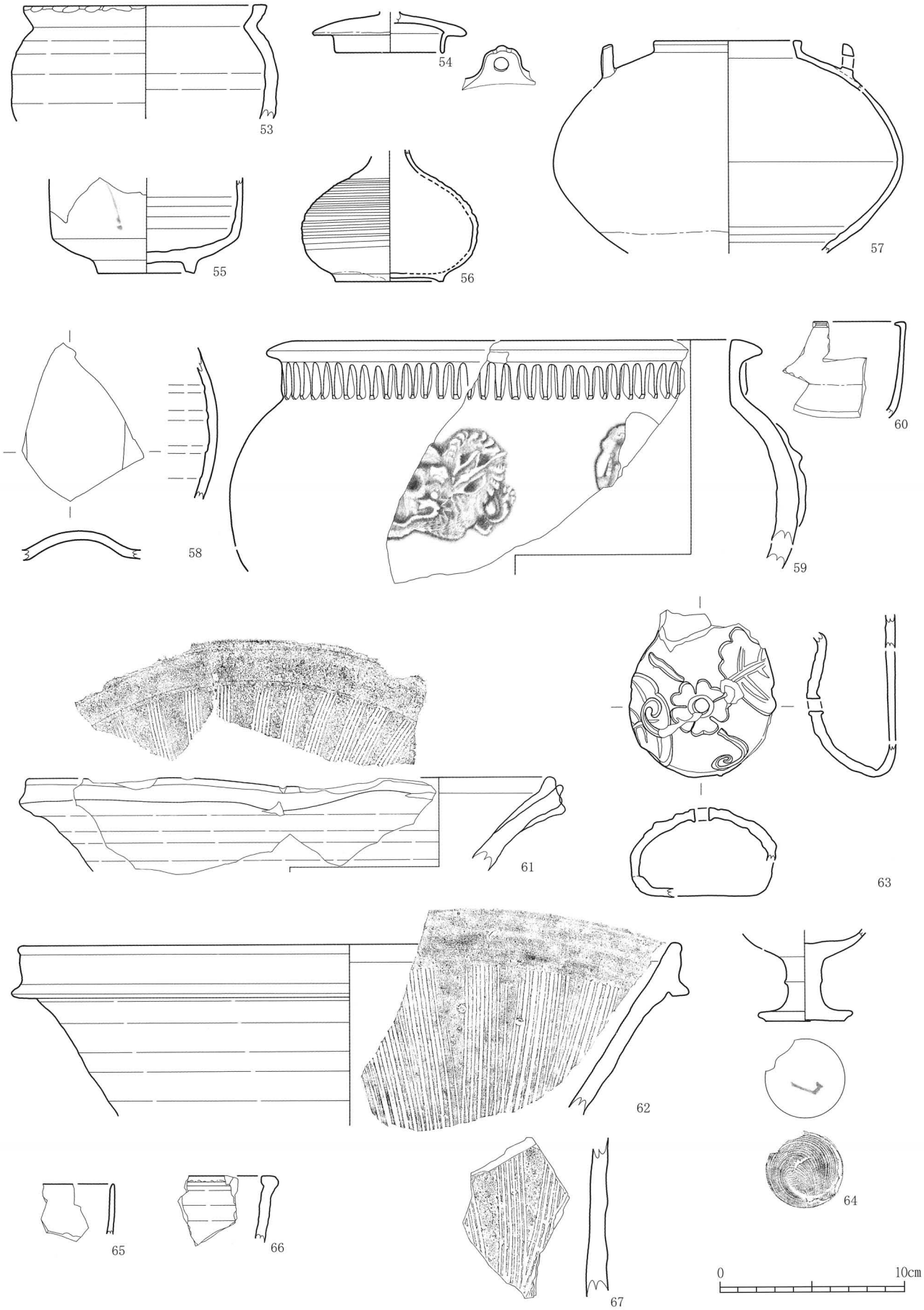
第51図　第16次調査出土磁器１（S＝1/3）



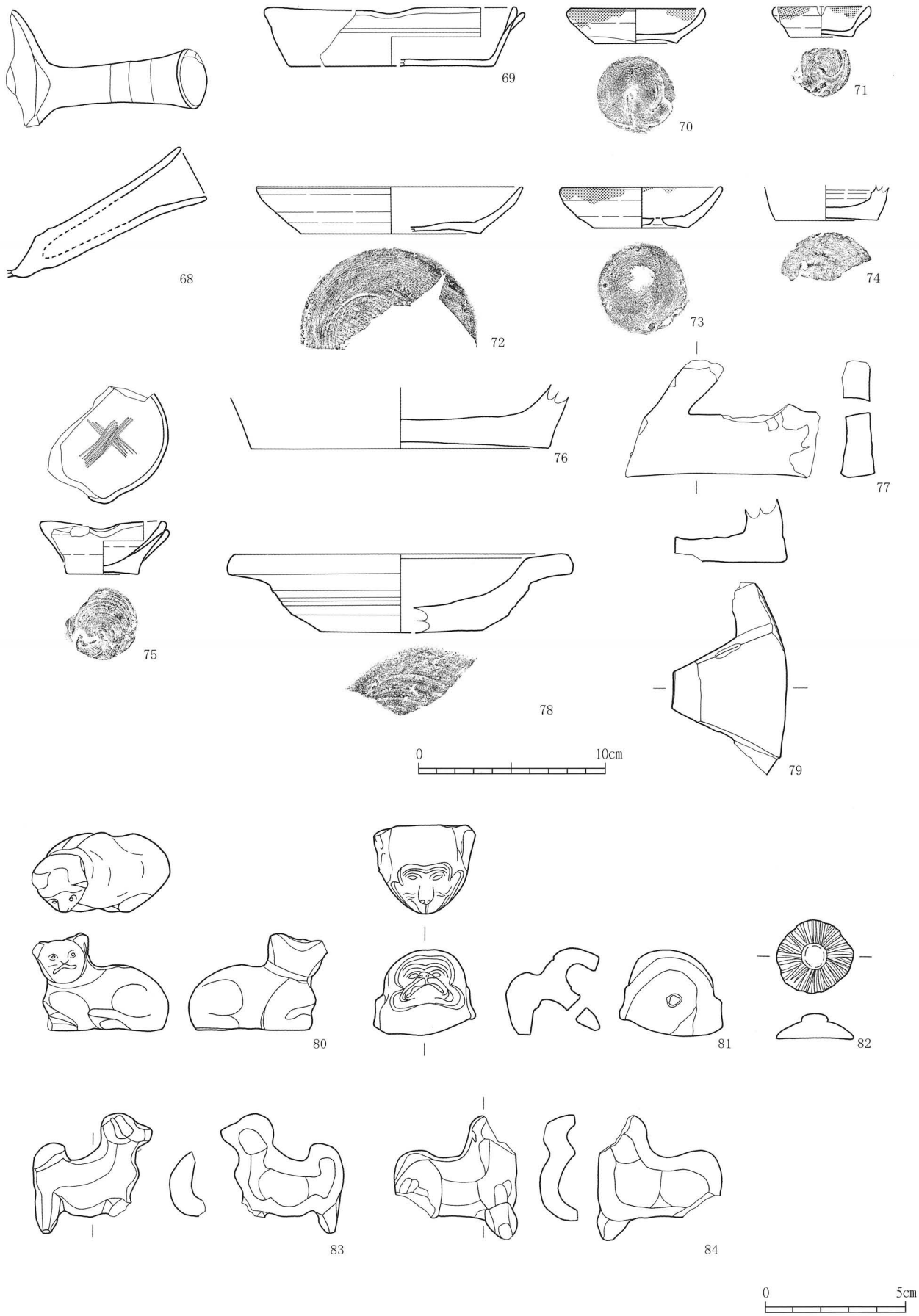
第52図　第16次調査出土磁器２（S＝1/3、21のみ1/2）



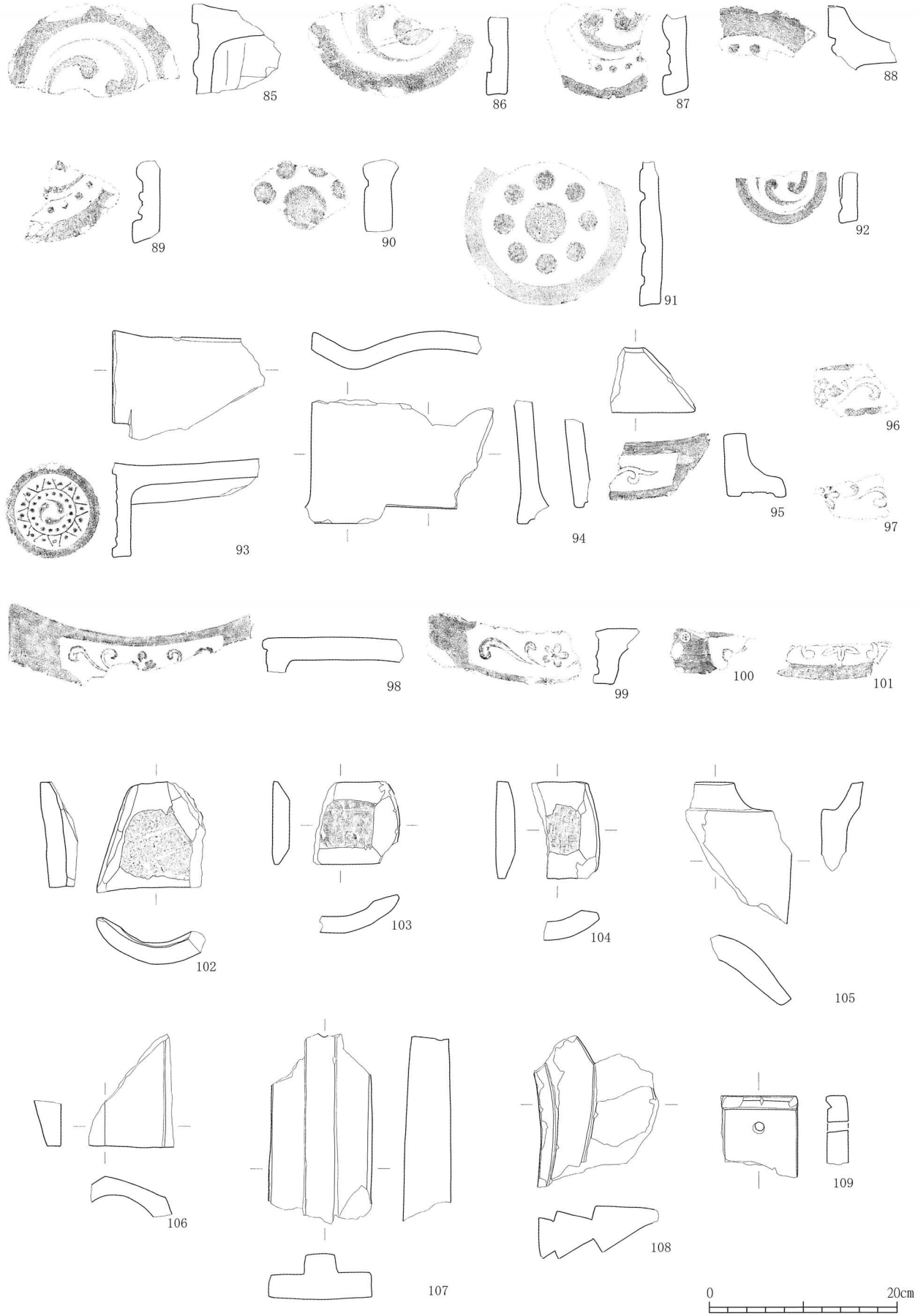
第53図　第16次調査出土陶器１（S＝1/3）



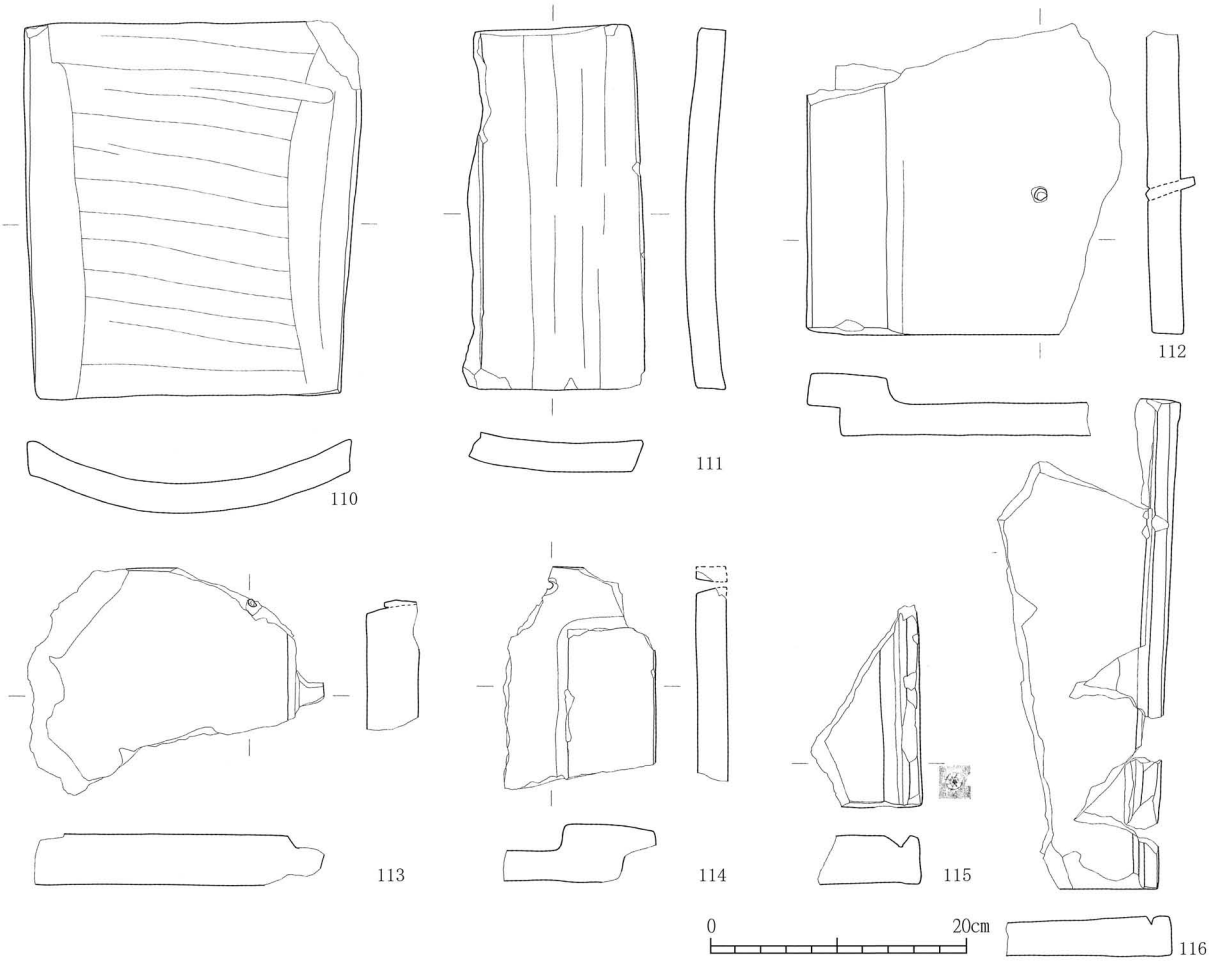
第54図　第16次調査出土陶器２（S＝1/3）



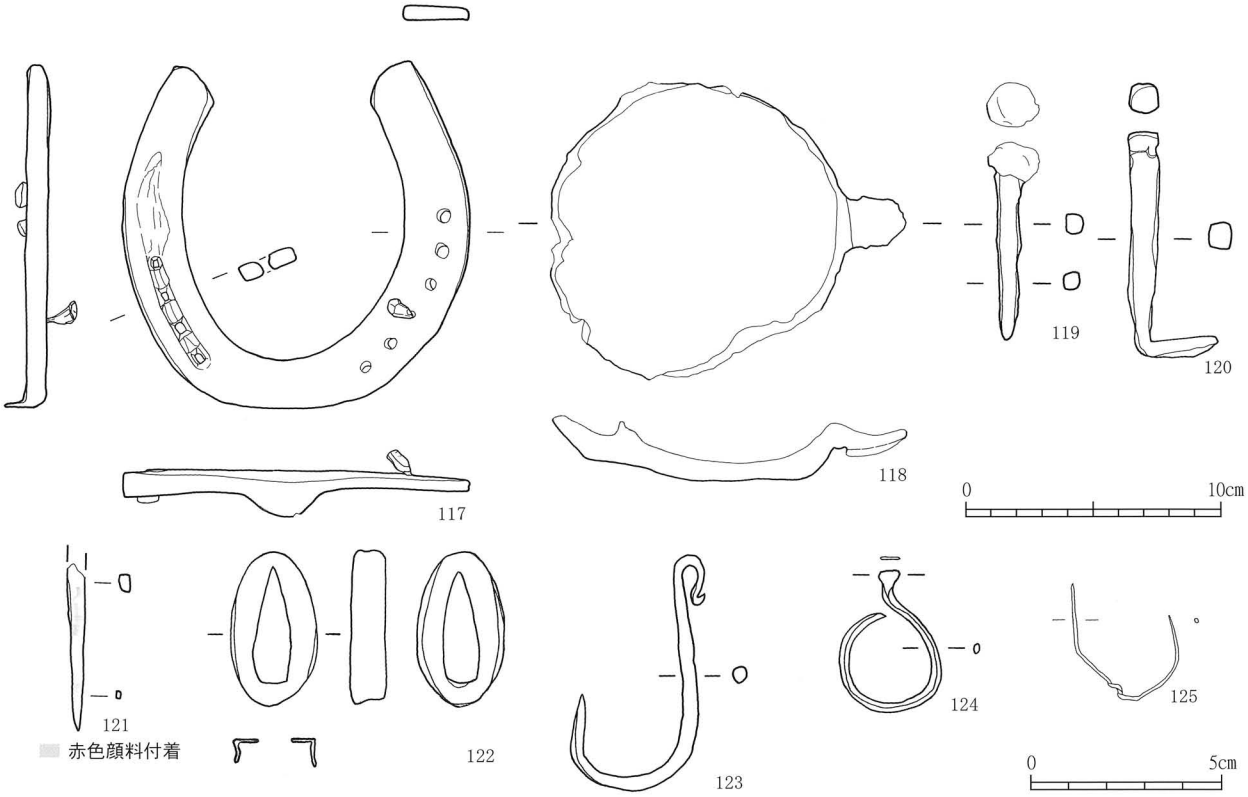
第55図　第16次調査出土焙烙、土師質・瓦質土器、土製品（68～79：S＝1/3、80～84：S＝1/2）



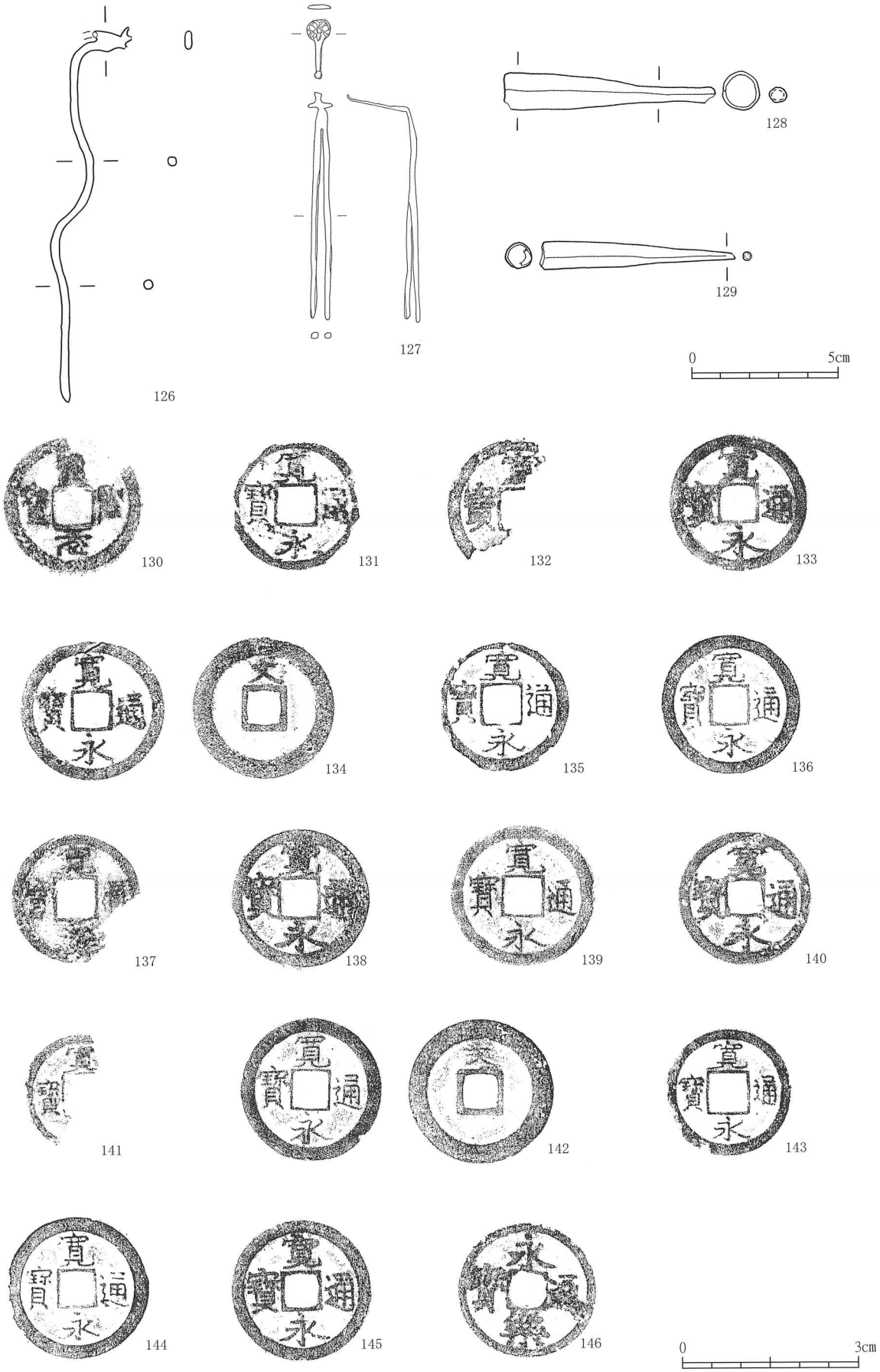
第56図　第16次調査出土瓦１（S＝1/6）



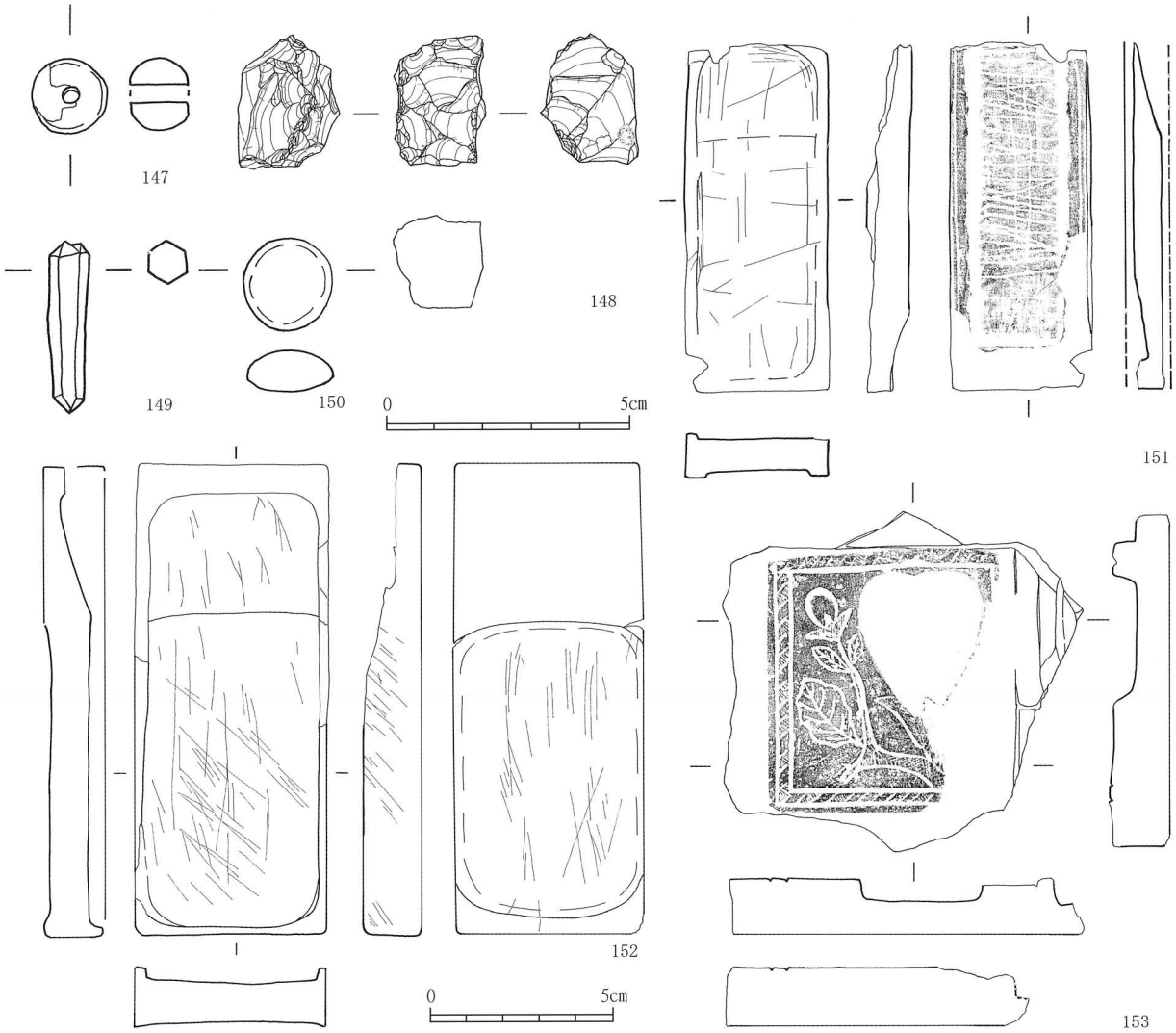
第57図　第16次調査出土瓦２（S＝1/6）



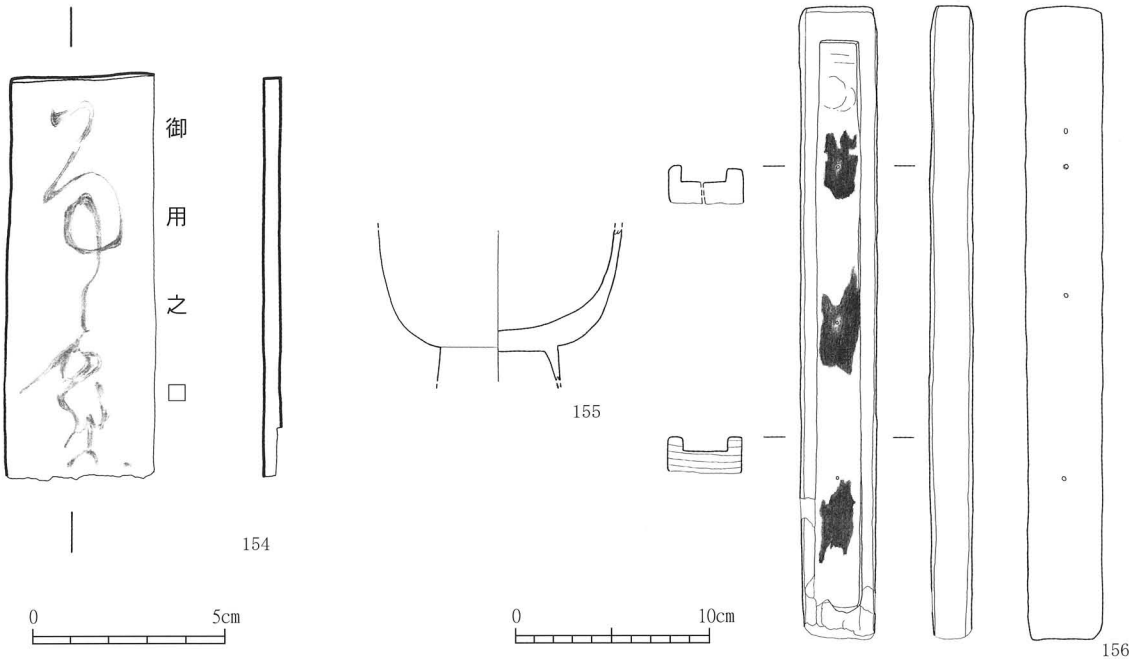
第58図　第16次調査出土金属製品１（117～120S＝1/3、121～125：S＝1/2）



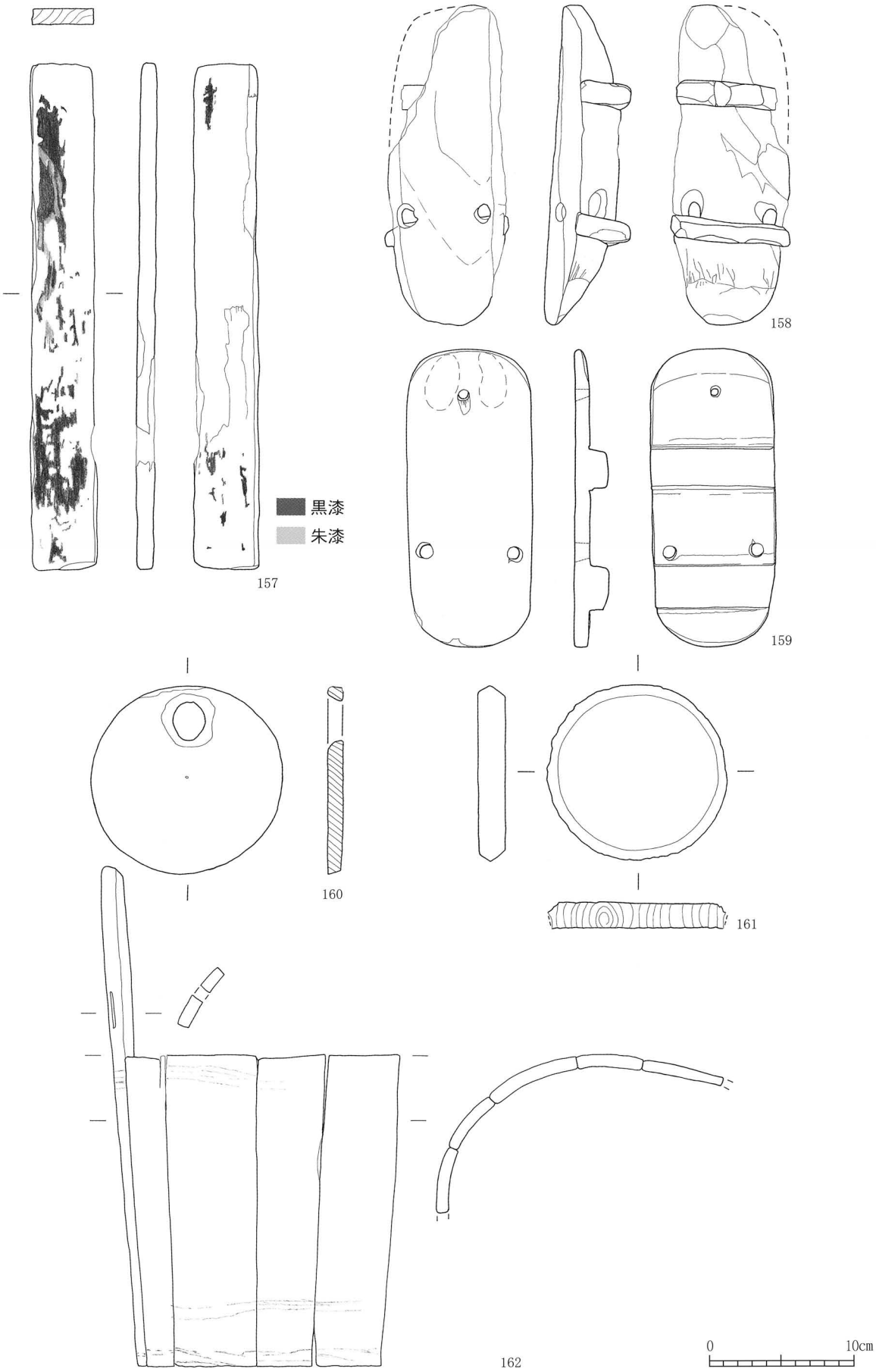
第59図　第16次調査出土金属製品２（126～129：S＝1/2、130～146：S＝1/1）



第60図　第16次調査出土ガラス・石製品（147～150：S＝2/3、151～153：S＝1/2）



第61図　第16次調査出土木製品１（154：S＝1/2、155・156：S＝1/4）



第62図　第16次調査出土木製品２（S＝1/4）

第20表　第16次調査出土磁器観察表

遺物番号	区	遺構・層位	種類	生産地	器種	製作年代	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	文様等	備考	図	写真
252	1	Ⅳ	染付	肥前	輪花皿	18c後～19c	(148)	(132)	39	山水文 蛇ノ目凹高台 口錆		1	4
253	1	Ⅵ	染付	瀬戸美濃	急須	19c後	—	—	—	風景文	銅版転写	—	1
254	1	攪乱	青花	中国	変形皿	16c末～17c前	—	—	—	植物文（石榴？） 虫食い	古染付	2	2
57	2	Ⅲ	白磁	瀬戸美濃	皿	19c後	—	—	—	陽刻文様	角形小皿	3	3
12	3	Ⅲ	染付	瀬戸美濃？	端反碗	19c前	94	39	45	植物文 蝶文 見込寿字文？	20,22,25と揃物	4	7
20	3	Ⅲ	染付	瀬戸美濃？	端反碗	19c前	94	39	45	植物文 蝶文 見込寿字文？	12,22,25と揃物	—	8
22	3	Ⅲ	染付	瀬戸美濃？	端反碗	19c前	95	41	45	植物文 蝶文 見込寿字文？	12,20,25と揃物	—	5
25	3	Ⅲ	染付	瀬戸美濃？	端反碗	19c前	94	39	46	草花文、蝶文 見込寿字文？	12,20,22と揃物	—	6
13	3	Ⅲ	染付	肥前	蓋（碗）	18c後～末	(103)	41	29	四方襷文 火炎宝珠文？ 見込文様有り不明		5	16
60－2	3	Ⅲ	染付	肥前	蓋（碗）	18c後	103	42	30	芙蓉手 草花文 霊芝文？ 見込植物文	漆継痕	6	13
60－1	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c後	115	47	64	芙蓉手 草花文 霊芝文？ 見込植物文		7	14
17	3	Ⅲ	染付	肥前	蓋（碗）	18c後	—	44	—	四方襷文 植物文？ 見込環状松竹梅文		8	21
73	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c後～19c初	(106)	(40)	46	笹文		9	15
29	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	19c前	92	35	51	龍文、火炎宝珠文、雲文	焼継痕	10	25
74	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c末～19c初	100	38	49	丸文 斜格子文 見込昆虫文？		11	26
16	3	Ⅲ	青磁染付	肥前	筒形碗	18c後	80	45	70	四方襷文 見込手描五弁花 高台内銘有り不明		12	32
31	3	Ⅲ	染付	肥前	広東碗	18c末～19c前	(116)	—	62	柳文 牡丹文？ 見込文様有り不明	焼継痕	13	35
30	3	Ⅲ	陶胎染付	瀬戸美濃	広東碗	19c初	—	61	—	文様有り不明 見込列点文		14	37
76	3	Ⅲ	染付	肥前	深皿	17c末～18c前	141	83	36	果樹文？ 唐草文 見込手描・コンニャク印判五弁花 高台内二重渦福	14と揃物	15	38
14	3	Ⅲ	染付	肥前	深皿	17c末～18c前	141	83	36	果樹文？ 唐草文 見込手描・コンニャク印判五弁花 高台内二重渦福	76と揃物	—	39
32	3	Ⅲ	染付	肥前	折縁皿	17c中	(198)	(82)	23	山水文	初期伊万里	16	47
7	3	Ⅲ上面	染付	肥前	皿	17c後	—	—	—	花唐草文 墨弾き	中～大皿	17	49
564	3	Ⅲ	染付	肥前	瓶	18c	—	—	—	笹文 梅文？		18	56
98	3	Ⅲ	不明	肥前	瓶	17c ？	—	—	—			19	57
562	3	Ⅲ	染付	肥前	段重	18c	—	—	—	蛸唐草文	中段以上	20	63
563	3	Ⅲ	白磁	肥前	紅皿	18c後～19c前	(41)	—	—			21	59
386	3	Ⅲ	染付	肥前	蓋（蓋物）	18c	(76)	—	—	草花文		22	58
61	3	Ⅲ	染付	肥前	蓋付鉢	18c後	110	74	76	樹木文 雲文？	内面口縁部露胎	23	64
271	3	Ⅲ	色絵	肥前	水滴	17～18c	—	—	—	葡萄文？		24	62
33	3	Ⅲ	染付	肥前	角鉢	19c前	170	77	67	芙蓉手 雪輪文 釜 筍 花文 見込人物文 蛇ノ目凹高台		25	53
227	3	Ⅳb上面	染付	肥前	輪花皿	18c前	—	(142)	34	植物文 唐草文 見込五弁花 高台内銘「大明成化年製」		26	73
121	3	Ⅳb上面	染付	肥前	皿	17c後～18c前	(122)	41	32	草文 見込蛇ノ目釉剥ぎ	波佐見	27	70
123	3	Ⅳb上面	不明	肥前	瓶	17c	(62)	—	—			29	71
124	3	Ⅳb	青磁	肥前	皿	17c	—	—	—	文様有り不明	波佐見	28	69
608	3	Ⅲ	染付	瀬戸美濃	端反碗	19c前	—	—	—	文様有り不明 見込文様有り不明	焼継痕	—	9
607	3	Ⅲ	染付	瀬戸美濃	端反碗	19c前	—	—	—	植物文	焼継痕	—	10
592	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c	—	—	—	鳥文？		—	11
669	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18～19c	(110)	—	—	蝶文	焼継痕	—	12
388	3	Ⅲ	染付	肥前	—	18c	—	—	—	雨降り文	仏飯器？	—	17
387	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	17c末～18c前	(110)	—	—	雨降り文（一部型紙摺り）	型紙摺り	—	18
390	3	Ⅲ	染付	肥前	蓋（碗）	18c後	—	—	—	四方襷文	貫入顕著	—	19
567	3	Ⅲ	染付	肥前	蓋（碗）	18c後	—	—	—	山水文 見込文様有り不明		—	20
573	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c後?	—	—	—	文様有り不明	17と同一文様？	—	22
636	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c	(102)	—	—	草文	くらわんか手 波佐見?	—	23
601	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c	—	—	—	植物文		—	24
650	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	17c後	—	—	—	一重網手文		—	27
591	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c	—	—	—	文様有り不明	貫入顕著	—	28
595	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c ？	—	—	—	植物文		—	29
576	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	19c前	—	—	—	文様有り不明		—	30
597	3	Ⅲ	染付	肥前	丸碗	18c末～19c前	—	—	—	笹文？	細筆描き、貫入顕著	—	31
568	3	Ⅲ	染付	肥前	筒形碗	18c後～19c初	—	—	—	斜格子地文に菊花文	全体に白濁	—	33
75	3	Ⅲ	染付	肥前	広東碗	18c末～19c前	114	—	—	二重圏線	焼継痕	—	34
23	3	Ⅲ	染付	肥前	広東碗	18c末～19c前	(112)	(66)	60	植物文？ 見込文様有り不明	焼継痕	—	36
660	3	Ⅱ	染付	肥前	皿	18c後～19c前	—	—	—	氷裂文 口錆	口錆	—	40
600	3	Ⅲ	染付	肥前	皿	近世	—	—	—	植物文？	中～大皿	—	41
571	3	Ⅲ	染付	肥前	皿	17c後	—	—	—	文様有り不明	漆継痕 外面貫入顕著	—	42
648	3	Ⅲ	染付	肥前	皿	18c	—	—	—	植物文 唐草文		—	43
575	3	Ⅲ	染付	肥前	皿	18c	—	—	—	山水文？	畳付に砂付着	—	44
570	3	Ⅲ	染付	肥前	変形鉢	19c前	—	—	—	唐草文		—	45
569	3	Ⅲ	染付	肥前	輪花皿	17c末～18c前	—	—	—	唐草文 蔓草文		—	46
631	3	Ⅲ	染付	肥前	皿	17c後～18c前	—	—	—	草文？ 見込蛇ノ目釉剥ぎ	見込砂付着	—	48
616	3	Ⅲ	不明	肥前	折縁皿	近世	—	—	—			—	50
590	3	Ⅲ	染付	中国？	折縁鉢	17c ？	—	—	—	文様有り不明	口縁部外湾	—	51
572	3	Ⅲ	青磁染付	肥前	鉢皿不明	18c	—	—	—			—	52
589	3	Ⅲ	染付	肥前	瓶	近世	—	—	—	植物文？		—	54
612	3	Ⅲ	不明	肥前	瓶	18c ？	(52)	—	—			—	55
574	3	Ⅲ	染付	肥前	猪口	18c後～19c前	—	—	—	四方襷文		—	60
617	3	Ⅲ	青磁	肥前	香炉	17c後～18c前	—	—	—		角形香炉 口唇部に敲打痕	—	61
228	3	Ⅳc	染付	肥前	丸碗	17c後	—	—	—	一重網手文		—	65
662	3	Ⅳc	染付	肥前	皿	17～18c	—	—	—	文様有り不明		—	66
245	3	Ⅳb	青磁	肥前	皿	17c	—	—	—	牡丹文	波佐見	—	67
274	3	Ⅳc	染付	肥前	瓶	近世	—	—	—	文様有り不明	内面露胎	—	68
661	3	Ⅳc	染付	肥前	瓶	近世	—	—	—	文様有り不明	内面露胎	—	72

第21表　第16次調査出土陶器観察表

遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	釉薬・文様等	備考	図	写真
255	1	XIX	常滑	甕	中世	－	－	－	ナデ		30	74
257	1	XIX	唐津	鉢	17c中	－	(86)	－	透明釉	見込砂目	31	75
256	1	XIX	美濃	香炉	17c	－	(84)	－	鉄釉	脚付香炉	32	77
260	1	II	大堀相馬	掛け分け碗	18c	－	(52)	－	灰釉　鉄釉	掛け分け碗　高台内鉄釉	33	76
128	1	XVb	志野	鉢？	16c末～17c初	－	－	－	長石釉	底面に窯道具痕	34	78
741	1	VI	堤？	灯明皿？	19c前	(106)	(66)	28	鉄釉	底部回転糸切	35	79
89	3	III	大堀相馬	丸碗	18c	－	43	－	灰釉	貫入顕著	36	80
110	3	III	大堀相馬	皿	18～19c	124	42	40	灰釉	貫入顕著	37	81
90	3	III	大堀相馬	丸碗	19c前	114	40	49	白濁釉　青釉流し　鉄絵		38	82
119	3	III	大堀相馬	腰折碗	18c	108	48	67	灰釉　鉄釉	掛け分け碗、貫入顕著	39	83
1114	3	III	大堀相馬	腰折碗	18c	(108)	－	－	白濁釉　鉄釉　糸目		40	84
88	3	III	大堀相馬	端反碗	19c前	90	38	43	白濁釉	貫入顕著	41	85
211	3	III	大堀相馬	端反碗	19c前	98	38	50	白濁釉		42	86
112	3	III	小野相馬	丸碗	18c	(114)	50	69	淡青色釉　飴釉流し	見込みに目跡3つ	43	87
101	3	III	小野相馬	丸碗	18c	(120)	52	72	淡青色釉　飴釉流し	見込みに目跡3つ	44	88
1025	3	III	瀬戸美濃	腰錆碗	18c前～中	－	－	－	灰釉　鉄釉	変形の碗	45	89
682	3	III	大堀相馬	皿	18c	－	－	－	灰釉	貫入顕著	46	90
1147	3	III	大堀相馬	角皿	19c前	－	－	－	青釉	外面に布目	47	91
38	3	III	大堀相馬	片口	18c後～19c前	140	48	60	白濁釉	高台内墨書「ハタ　アハ」か	48	92
37	3	III	大堀相馬	鉢	19c前	(138)	－	46	鉄釉	腰部・底部露胎	49	94
82	3	III	唐津	碗	17c後	－	40	－	刷毛目		50	93
43	3	III	肥前	鉢	17c後	232	－	－	刷毛目文		51	97
1163	3	III	大堀相馬	甕	19c前	(218)	－	－	鉄釉　黒釉流し		52	96
40	3	III	堤	甕	19c前	(122)	－	－	鉄釉	口唇部に叩き痕顕著、内面全体に鉄分付着、お歯黒壺か	53	98
87	3	III	大堀相馬	蓋（上瓶）	19c前	76	－	－	白濁釉	つまみ部欠損、貫入顕著	54	105
267	3	III	大堀相馬	徳利	19c前	－	48	－	白濁釉　鉄絵		55	101
77	3	III	大堀相馬	瓶	18c?	－	55	－	飴釉　糸目		56	102
41	3	III	大堀相馬	土瓶	19c前	72	－	－	青釉		57	107
1116	3	III	備前？	瓶	17c後？	－	－	－	鉄釉	縦方向に凹み有り、変形の瓶	58	103
18	3	III	美濃	瓶掛	19c初	(230)	－	－	緑釉　龍文	口唇部に摩滅痕	59	108
1022	3	III	大堀相馬	香炉	18c	－	－	－	灰釉	内面体部下半露胎、貫入顕著	60	104
905	3	III	不明	擂鉢	18～19c	(322)	－	－	鉄釉		61	112
923	3	III	不明	擂鉢	18～19c	(336)	－	－	鉄釉	内面やや摩滅有り　在地？	62	113
1112	3	III	堤	水滴	19c前	幅			鉄釉、植物文	外形ひょうたん形か	63	109
734	1	III	大堀相馬	仏飯器	18c	－	40	－	灰釉	底面に墨書　底部回転糸切	64	110
125	3	IVc	肥前	丸碗	17c後	－	－	－	青緑釉		65	116
127	3	IVc	岸系	香炉	17c中	－	－	－	鉄釉		66	115
122	3	IVb上面	丹波	擂鉢	17c	－	－	－	無釉		67	114
1093	3	II	不明	片口？	18c後～19c前	(134)	－	－	白濁釉に飴釉流し	口縁部肥厚	－	95
36	3	III	不明	皿	19c前	－	－	－	黒釉　白化粧土	黒灰色の胎土	－	99
1106	3	III	大堀相馬	皿	18c後～19c前	－	40	－	白濁釉		－	100
232	3	III	大堀相馬	土瓶	19c前	(68)	－	－	色絵山水文		－	106
932	3	III	丹波	擂鉢	17c	－	－	－	無釉		－	111

第22表　第16次調査出土焙烙、土師質・瓦質土器観察表

遺物番号	種別	器種	区	遺構・層位	口径（mm）	底径（mm）	器高（mm）	備考	図	図版
80	陶器	焙烙	3	III	－	－	－	鉛釉　把手部のみ	68	117
81	陶器	焙烙	3	III	(126)	(104)	30	鉛釉　底面回転ヘラケズリ	69	118
85	土師質土器	灯明皿	3	III	66	40	18	完形　口縁部炭化物付着　底面回転糸切無調整	70	120
219	土師質土器	灯明皿	3	III	(50)	32	16	口縁部炭化物付着　底面回転糸切無調整	71	119
86	土師質土器	皿	3	III	(132)	(90)	24	底面回転糸切後ナデ	72	121
114	土師質土器	灯明皿	3	III	80	46	21	口縁部炭化物付着　底部に孔有り　底面回転糸切後ナデ	73	122
829	土師質土器	鉢or壺	3	III	－	52	－	底面回転糸切後ナデ	74	124
84	土師質土器	ミニチュア	3	III	(64)	36	27	底面回転糸切無調整　胎土やや白っぽい	75	123
4	瓦質土器	鉢	3	III上面	－	(148)	－	外面焼けはじけ顕著	76	125
913	瓦質土器	不明	3	III上面	－	－	－	瓦灯？	77	127
239	瓦質土器	蓋	3	II	(172)	(84)	40	壺等の落とし蓋	78	128
915	瓦質土器	不明	3	III	－	－	－		79	126

第23表　第16次調査出土土製品観察表

遺物番号	種類	区	遺構・層位	法量（mm）	備考	図	写真
48	猫	3	III	全長46　高さ33　幅26	ごく一部欠損	80	129
220	猿	3	III	高さ29　幅34	頭部完形　頚部に孔有り	81	132
104	笠？	3	III	最大径25　厚さ9	完形　人形の一部か	82	131
105	犬	3	III	全長35　高さ36	左右合型作り　中空　1/2欠損　内部に指紋	83	130
49	犬	3	III	全長（35）　高さ（41）	左右合型作り　中空　1/2欠損　内部に指紋	84	133

第24表　第16次調査出土瓦観察表

遺物番号	種　類	区	遺構・層位	文　様	計測値（mm）	重量(g)	備　考	図	写真
478	軒丸	1	XIX	三巴	瓦当径（168）　文様区径124　周縁幅10	905		85	134
488	軒丸	1	I	三巴	瓦当径167　文様区径（127）　周縁幅17	362		86	135
513	軒丸	1	XIV	珠文三巴	周縁幅10	254		87	136
477	鳥伏間	1	II	珠文三巴文	周縁幅32	303		88	137
316	軒丸	3	II	珠文三巴	周縁幅22	192		89	138
473	軒丸	1	IV	九曜		210		90	139
108	軒丸	3	III	九曜	瓦当径167　文様区径124　周縁幅23	615		91	140
52	軒桟	3	III	三巴	瓦当径88	118.7		92	141
311	軒桟	1	II	勾玉	瓦当径93	577.9		93	142
328	軒桟	1	撹乱	勾玉？	—	536.9		94	143
332	軒平	3	III	飛雲		212.9	隅切	95	144
494	軒平	1	II	花菱　唐草		74.6		96	146
83	軒平	3	III	桔梗　唐草		92		97	147
109	軒平	3	III	花菱　唐草	文様区幅83	1361.5	四弁花	98	145
317	軒平	2	II	梅　唐草		358		99	148
326	軒平	3	IVc	不明		141.0	瓦当面に刻印	100	149
156	軒平	3	III	雪持笹　唐草		98.8		101	150
306	輪違い	3	表採	—	全長111　厚さ19	272.5		102	152
448	面戸	1	IV	—	全長（85）　厚さ17	164.6		103	151
330	面戸	3	III	—	全長100　厚さ19	135.6		104	153
334	亀伏間	3	III	—	厚さ25	339.2		105	155
329	冠伏間	3	III	—	厚さ20	194.2		106	154
307	T字	3	III	—	幅103　厚さ38	799.4		107	157
479	鯱	1	IV	—	厚さ49	684.2		108	156
502	不明	1	撹乱	—	幅75　厚さ20　釘穴径10	191.2	水切	109	161
21	平	3	III	—	全長278　幅233　厚さ23　高さ55	2200.0		110	158
520	熨斗	3	II	—	全長270　幅119　厚さ20	1200.0	焼成後に分割	111	159
544	桟付平板	3	III	—	厚さ24　桟下厚22　釘穴径10	1860.0	釘残存	112	160
442	平板	3	III上面	—	厚さ37　釘穴径9	1350	釘残存	113	162
56	桟付平板	3	III	—	厚さ23　桟下厚10　釘穴径9	673.4		114	163
435	平板	1	表採	—	厚さ36	387.1	水切	115	164
440	平板	3	III	—	全長364　厚さ30	1202.2	水切	116	165

第25表　第16次調査出土金属製品観察表

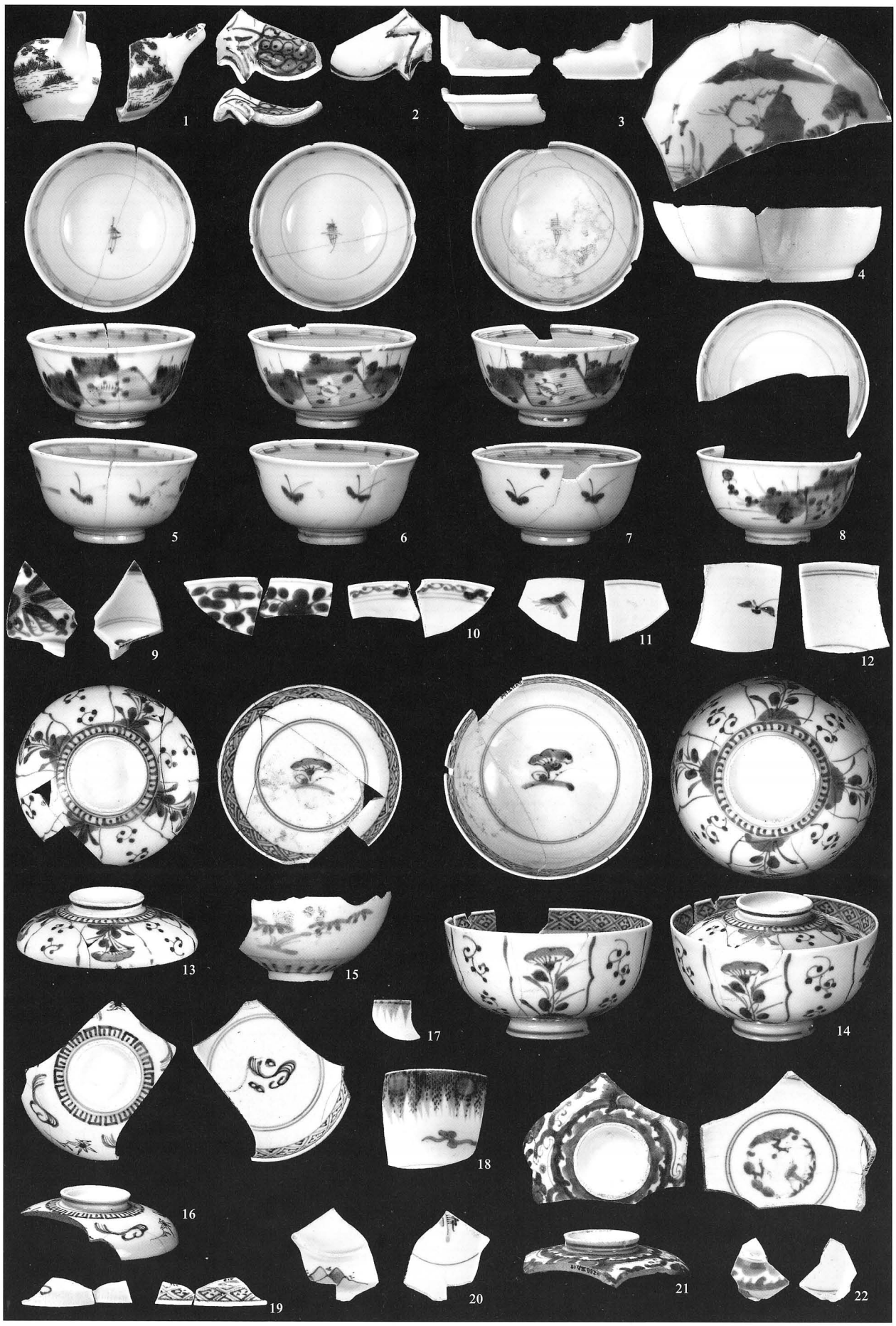
遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量（g）	備考	図	写真
802	蹄鉄	1	III	全長129.5　全幅126.2　厚さ8.6	284.6	鉄製　有溝式	117	166
107	灯明皿	3	III	口径110.4　底径81.3　器高18.8	261.4	鉄製	118	167
215	鉄釘	3	III	全長73.2　胴部幅9.2	14.8		119	168
221	鉄釘	3	III	全長111.1　胴部幅10.5	28.7		120	169
71	鉄釘	1	XVd	全長39.4　胴部幅3.7	0.5	赤色顔料付着	121	170
93	縁（刀剣）	3	III	全長38.1　幅19.8　厚さ7.2	5.6	銅製	122	171
50	釣針	3	III	全長58.8　全幅33.0　厚さ3.8	6.1	銅製	123	173
91	釣針	3	III	全長35.2　全幅24.3　厚さ2.6	1.8	銅製	124	172
103	銅線	3	III	全長65.7　径1.2	0.3	銅製	125	176
51	簪	3	III	全長134.3　全幅6.3　厚さ2.9	7.0	銅製　一部破損	126	175
92	簪	3	III	全長88.4　全幅4.5　厚さ2.2	3.5	銅製	127	174
116	煙管（吸口）	3	III	全長67.7　ラウ口直径11.6	5.4	吸口部破損	128	177
111	煙管（吸口）	3	III	全長62.0　ラウ口直径8.8　吸口直径3.4	5.0	内部にラウ遺存	129	178
247	古銭	3	III	外径23.7　穿径6.7	2.2	□□元寶　一部欠損	130	179
58	古銭	3	III	外径22.5　穿径6.5	2.3	寛永通寶（新寛永）　ごく一部欠損	131	180
59	古銭	3	III	外径　—　穿径　—	1.2	寛永通寶（古寛永）　3/4欠損	132	181
64	古銭	3	III	外径24.2　穿径5.8	2.8	寛永通寶（古寛永）　完形	133	182
95	古銭	3	III	外径24.8　穿径5.7	3.4	寛永通寶（文銭）　完形	134	183
96	古銭	3	III	外径22.6　穿径6.2	1.5	寛永通寶（新寛永）　ごく一部欠損　「ハネ永」	135	184
205	古銭	3	III	外径24.4　穿径6.0	3.5	寛永通寶（新寛永）　完形	136	185
246	古銭	3	III	外径　—　穿径　—	1.0	寛永通寶（新寛永）　1/4欠損	137	186
1	古銭	3	III上面	外径24.4　穿径6.2	2.2	寛永通寶（古寛永）　ごく一部欠損	138	187
248	古銭	3	III	外径24.6　穿径6.5	2.3	寛永通寶（新寛永）　ごく一部欠損	139	188
258	古銭	3	III	外径23.4　穿径5.3	1.4	寛永通寶（新寛永）　完形	140	189
263	古銭	3	III	外径　—　穿径　—	0.6	寛永通寶（新寛永）　3/4欠損	141	190
264	古銭	3	III	外径25.1　穿径6.7	3.0	寛永通寶（文銭）　完形	142	191
265	古銭	3	III	外径22.0　穿径6.5	1.6	寛永通寶（新寛永）　完形	143	192
266	古銭	3	III	外径24.6　穿径6.1	2.2	寛永通寶（新寛永）　完形	144	193
223	古銭	3	IVb	外径24.5　穿径5.4	3.1	寛永通寶（古寛永）　完形	145	194
259	古銭	3	IVc	外径23.4　穿径5.5	1.8	永楽通寶　完形	146	195

第26表　第16次調査出土ガラス・石製品観察表

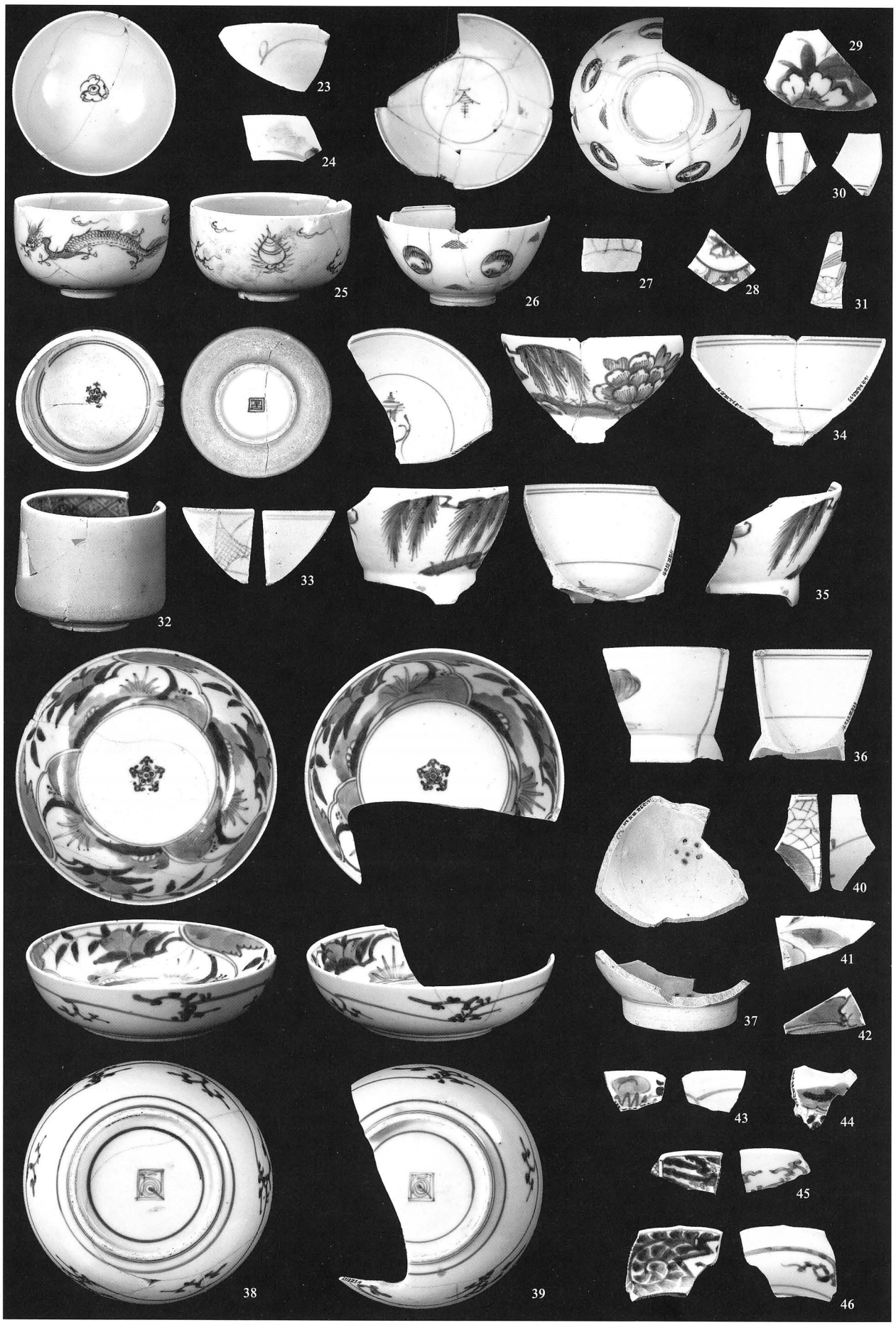
遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量（g）	備考	図	写真
249	ガラス玉	3	III	径14.4　厚さ10.7　孔径3.7	4.3	淡青色　白色	147	196
241	火打石	3	III	最大長25.6　最大幅17.4　厚さ16.5	11.1	玉髄	148	197
113	水晶	3	III	長さ32.8　幅7.6　厚さ6.5	2.3		149	198
47	碁石	3	III	長径18.0　短径16.3　厚さ7.8	3.5	玉髄?	150	199
44	硯	3	III	長さ89.0　幅35.7　厚さ11.1	52.9	粘板岩　裏面に彫り直し痕有り　端部欠損	151	200
45	硯	3	III	長さ146.2　幅58.9　厚さ18.8	255.3	粘板岩　裏面に浅い抉り　一部欠損	152	201
54	不明石製品	3	III	長さ105.5　幅110.2　厚さ18.0	231.7	泥岩質　植物文様を線刻　硯？	153	202

第27表　第16次調査出土木製品観察表

遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量（g）	備考	図	写真
69	木櫛	1	IV	残存長99.5　幅36.5　厚さ4.3	16.0	「御用之□（鶴）力」　下部破損	154	203
66	漆器（碗）	1	XI	残存口径118　残存底径60　残存器高75	162.5	内面朱漆　外面黒漆	155	204
858	漆器（箱形）	1	IV	全長313　幅38.5　高さ21	149.8	内面黒漆　4箇所に釘穴	156	205
859	漆器（板）	1	IV	全長330　幅40　厚さ11	144.8	黒漆に朱漆の文様？	157	206
864	下駄	1	VI	全長208　幅75　高さ52	314.9	丸型陰卯差歯	158	207
863	下駄	1	IV	全長313　幅38.5　高さ22	208.2	丸型連歯　台表先端に指跡あり	159	208
860	桶（天板）	1	IV	径122　厚さ10　栓孔径24	109.0	表に黒漆	160	209
862	底板	1	V	径115　厚さ17	166.7		161	210
861	桶（側板）	1	IV	器高326　厚さ8　孔24.1×7.6	348.0	提桶側板　外面にタガ痕	162	211

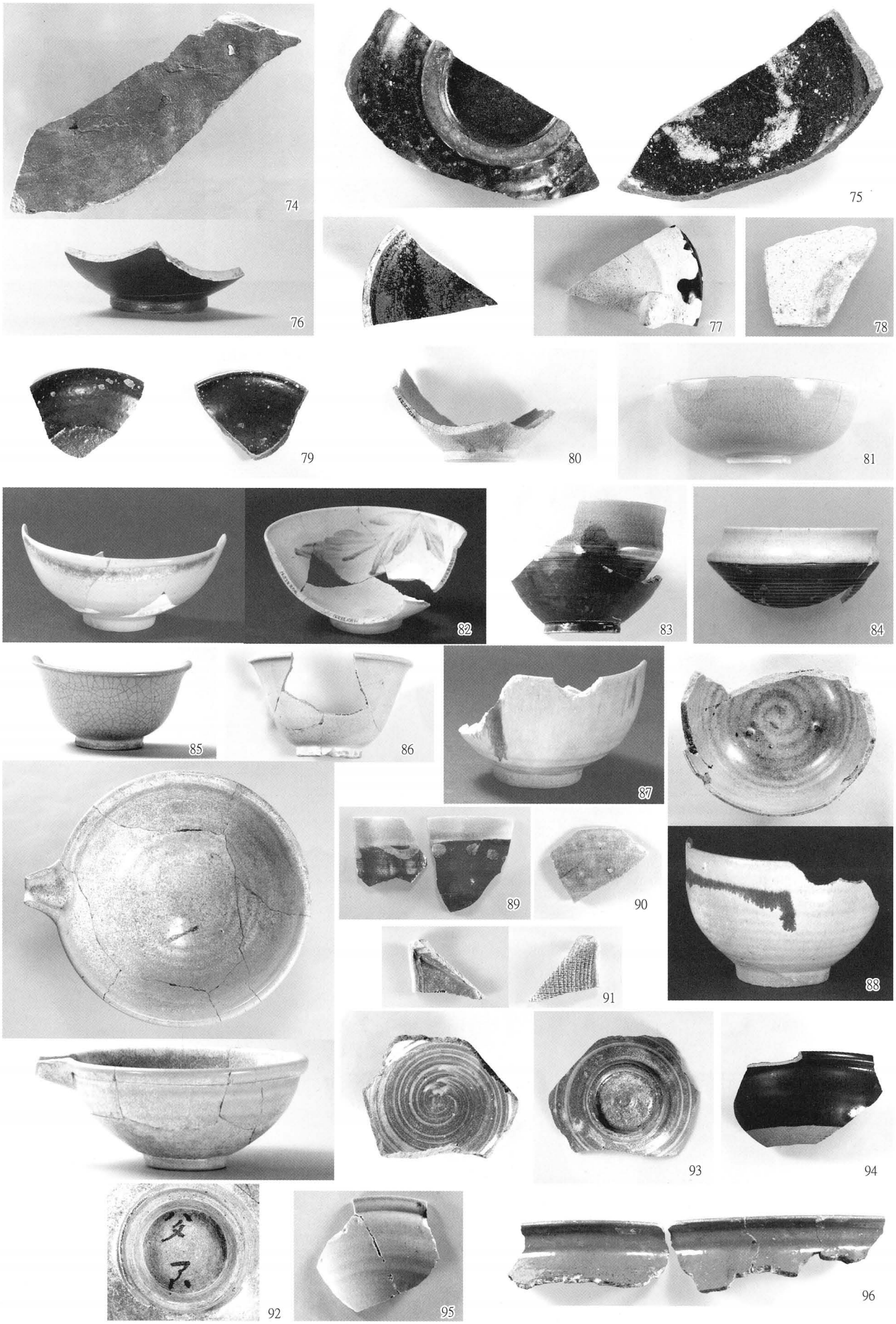


第63図　第16次調査出土磁器（１）（S＝1/3）



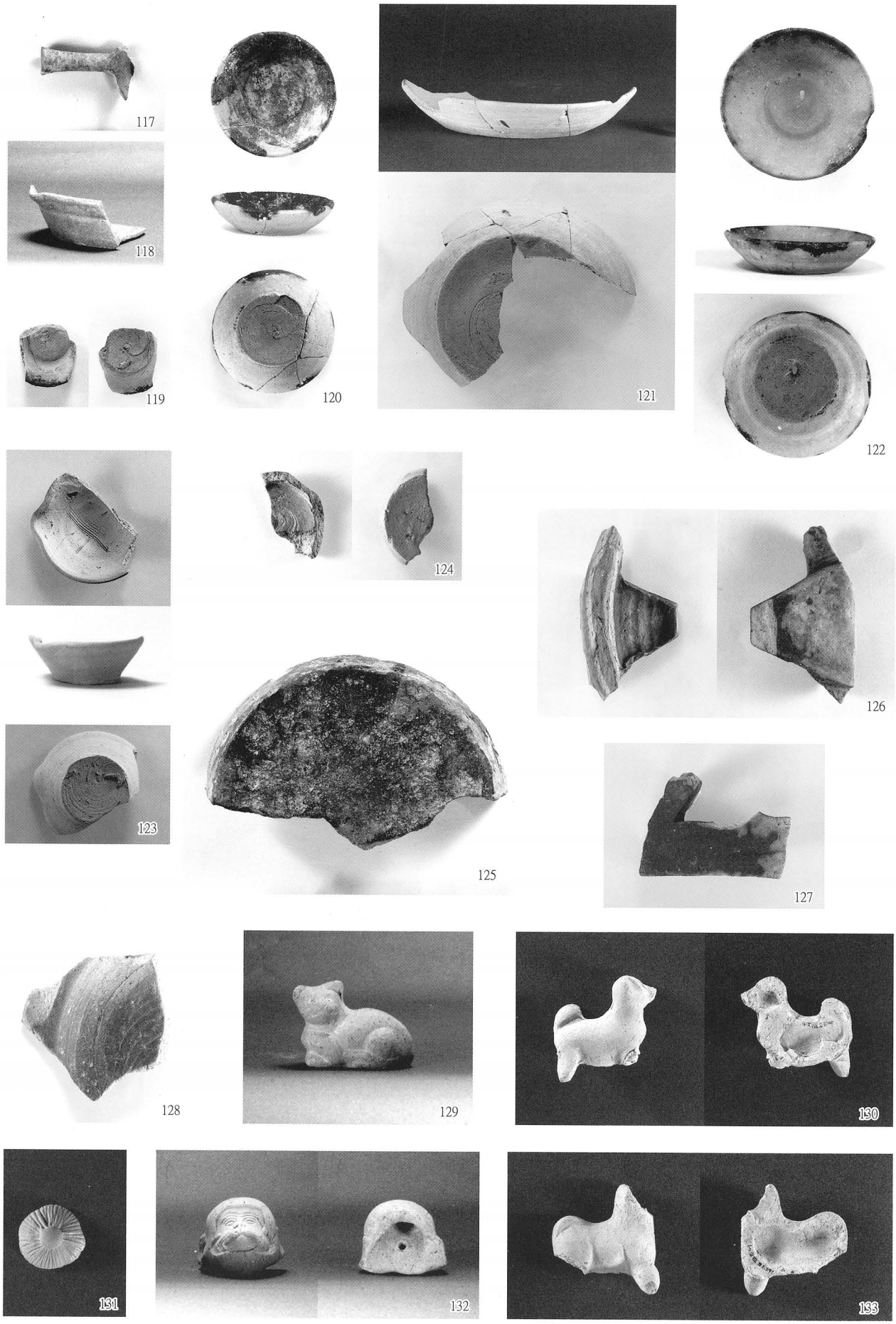
第64図　第16次調査出土磁器（２）（S＝1/3）

第65図　第16次調査出土磁器（３）（S＝1/3、59のみ1/2）

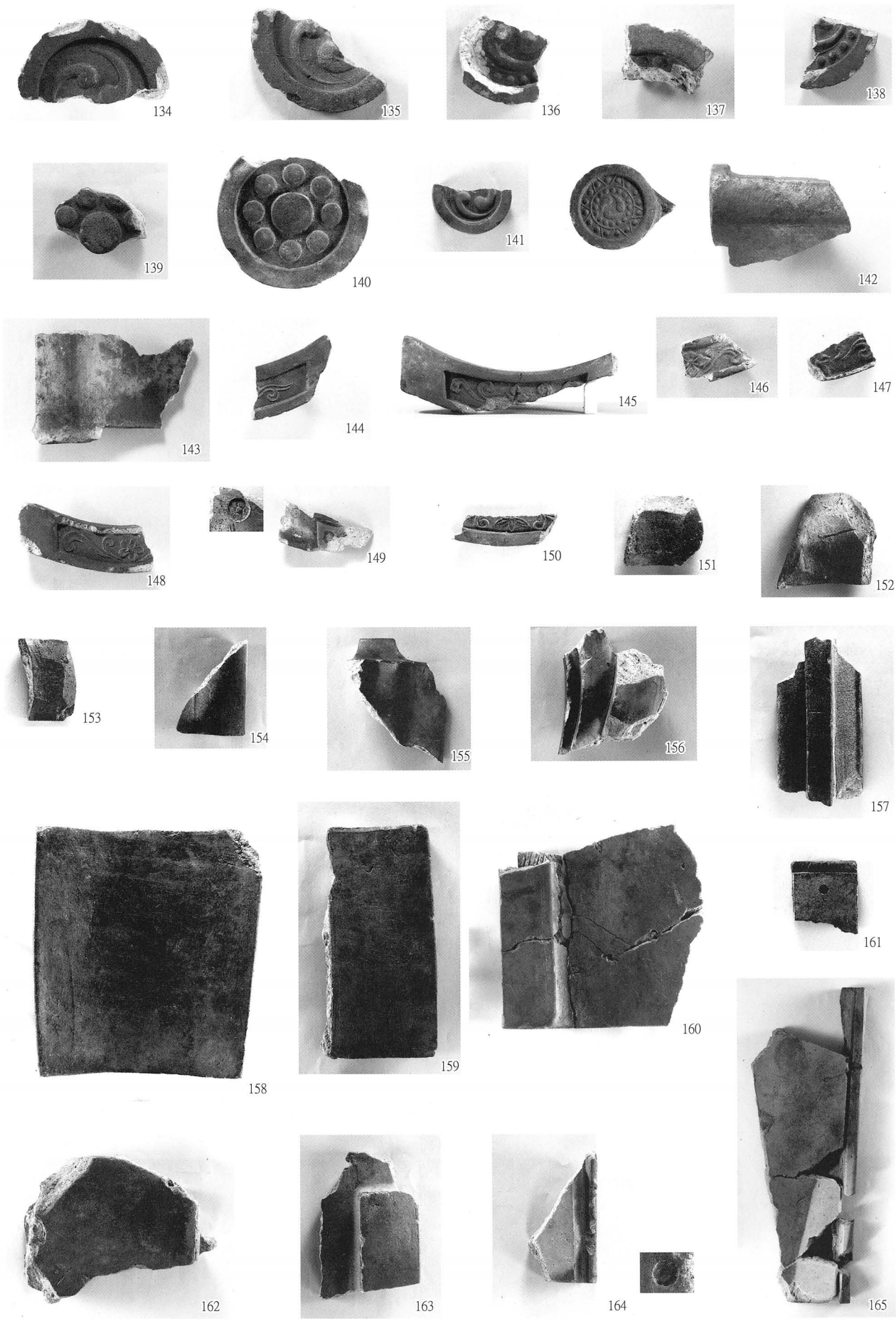


第66図　第16次調査出土陶器（１）（S＝1/3）

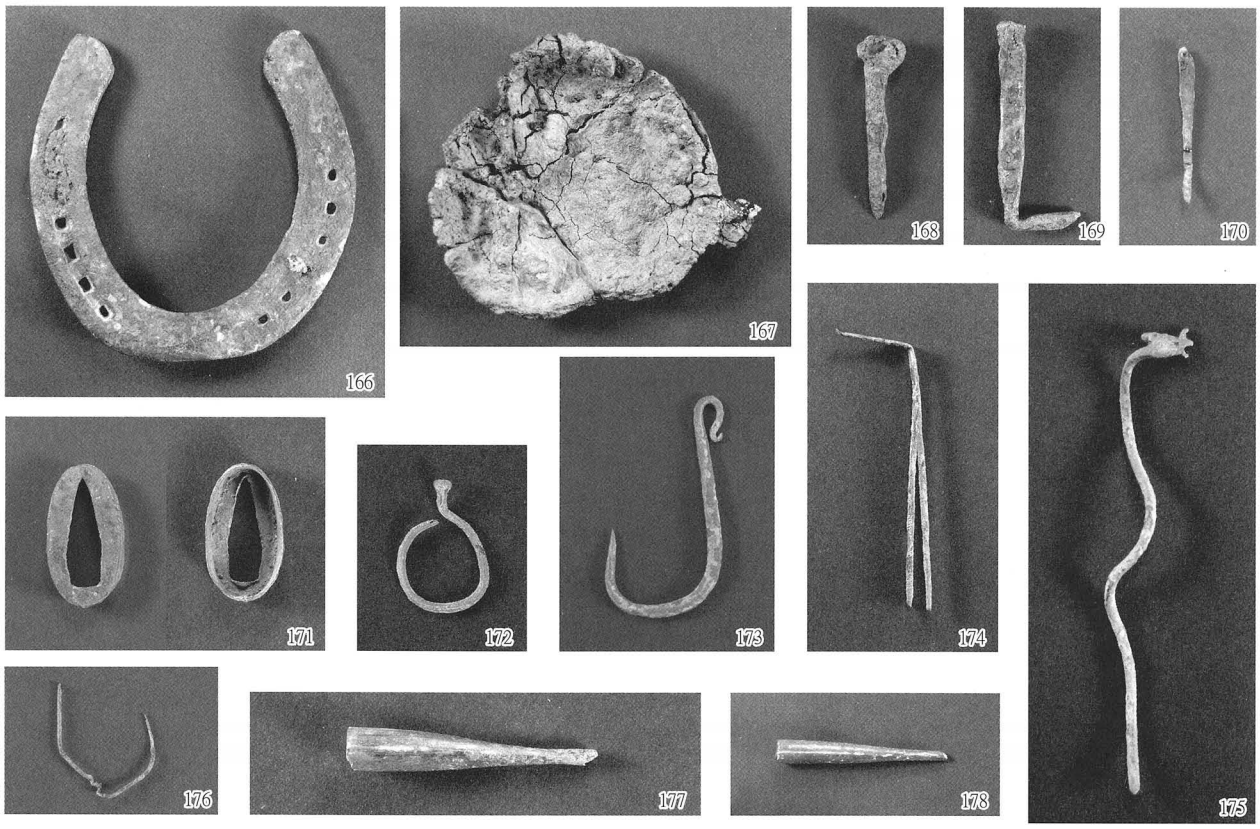
第67図　第16次調査出土陶器（２）（S＝1/3）

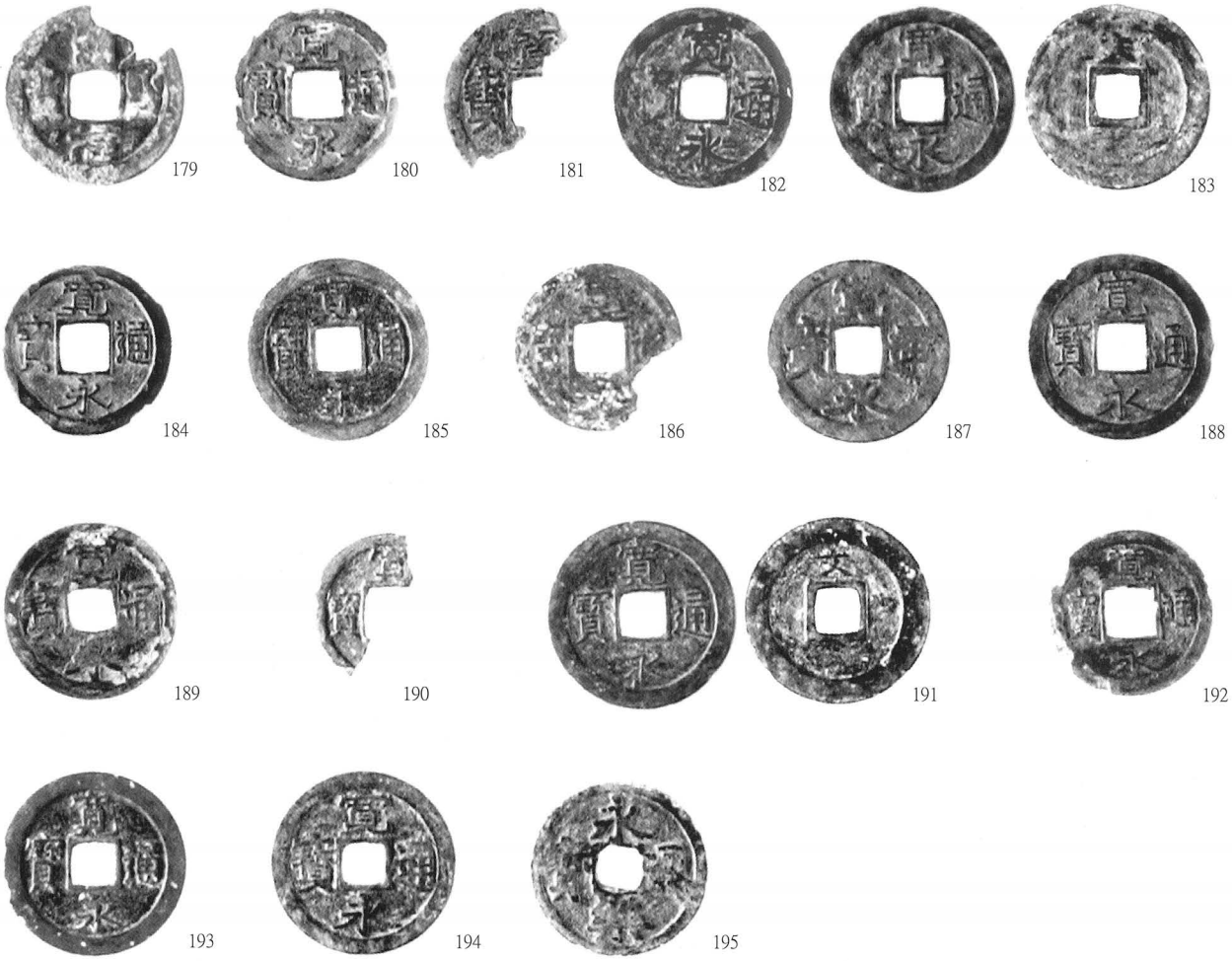


第68図　第16次調査出土

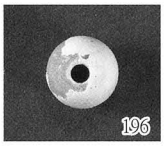


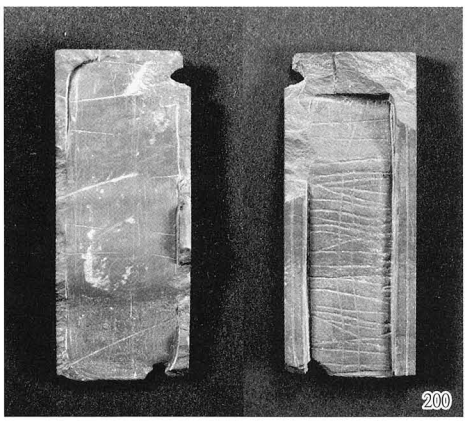
第69図　第16次調査出土

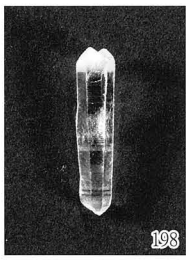


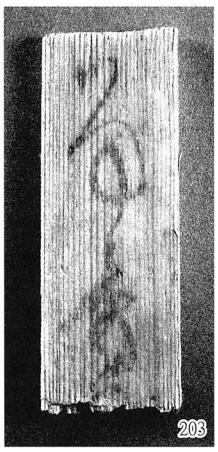


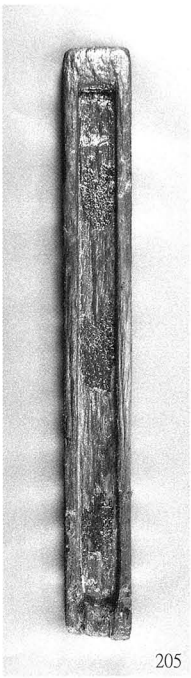
第70図　第16次調査出土

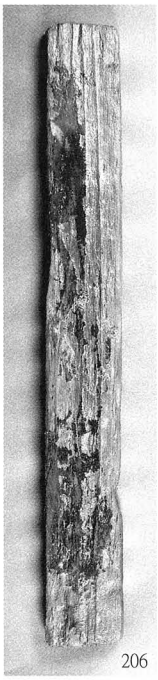




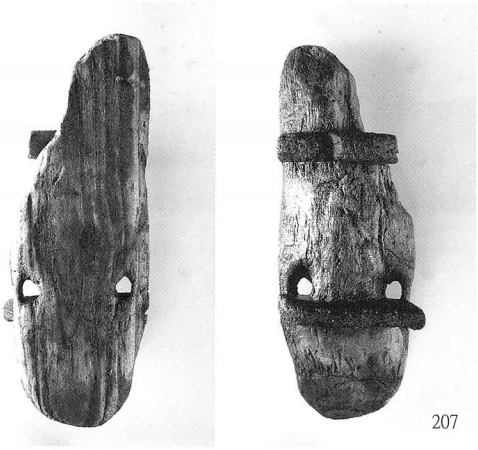


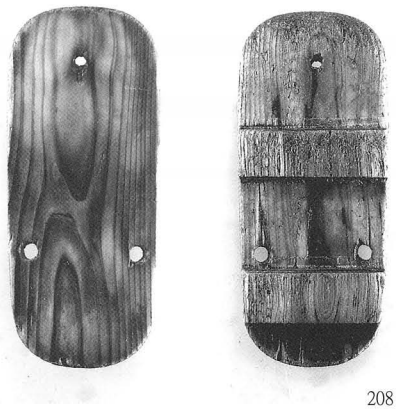






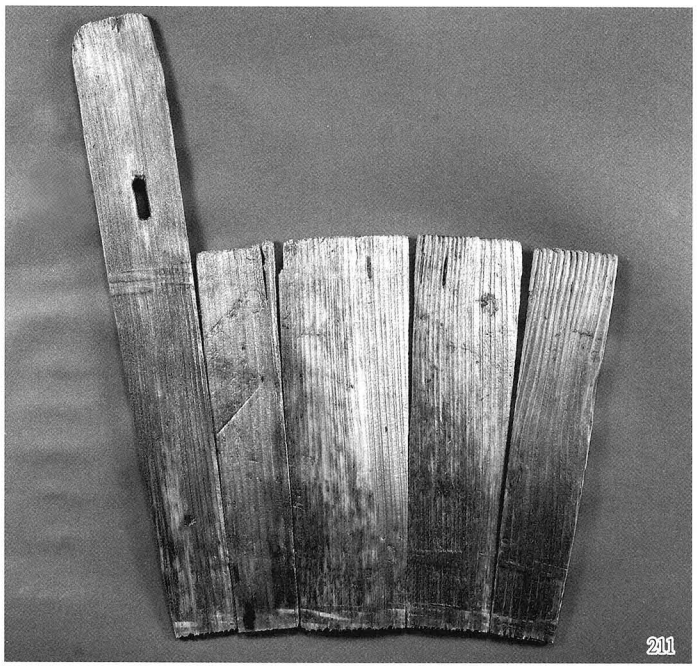
第71図　第16次調査出土


207


208

209

210


211

第72図　第16次調査出土

5．考察

第16次調査３区Ⅲ・Ⅳ層出土陶磁器について

第16次調査３区Ⅲ・Ⅳ層出土陶磁器について考察を行う。考察では、器種組成等、遺物自体の分析を行う前に、まず、それらが出土した包含層の形成過程について検討する。そのため、まず各層出土陶磁器の年代構成について検討し、Ⅲ・Ⅳ層の年代を推定する。推定は、最も新しい遺物の年代と出土数のピークがみられる年代に基づき行う。ここで推定された年代は、包含層の堆積年代若しくは遺物の廃棄年代である。次にⅢ層内、上下間での接合関係を示し資料の一括性について検討する。この分析は、Ⅲ層内でレベル差をもって出土した遺物が、短期間の一括廃棄に由来するものか、または、ある程度長期にわたる小規模廃棄の集積に由来するものかを検証する事が目的である。これらの分析を踏まえ、最後に器種組成、産地別組成について検討する。

（１）Ⅲ・Ⅳ層の年代について

Ⅲ・Ⅳ層の年代を明らかにするため、製作年代の明らかな陶磁器を用いて、各層における製作年代別の出土点数を示す（第28表）。Ⅳ層からは、全体数は13点と少ないものの、17世紀中頃から18世紀前半までの遺物が出土している。出土数のピークは17世紀そして17世紀後半にみられる。また、Ⅳ層上面からは18世紀前半の遺物が出土している。以上からⅣ層の堆積年代は、18世紀前半以前、概ね17世紀後半と推定される。さらに先述の通り、Ⅳ層からは古寛永（寛永13<1636>年が初鋳）が出土していることから、Ⅳ層の上限は17世紀中葉と推定される。

第28表　第16次調査3区Ⅲ・Ⅳ層出土陶磁器製作年代別出土数

製作年代	Ⅳ層			Ⅳ層上面	Ⅲ層			Ⅲ層上面	総計
	磁器	陶器	小計	磁器	磁器	陶器	小計	磁器	
17c前半						3	3		3
17c中頃		1	1						1
17c後半	1	2	3		3	4	7	1	11
17c	3	1	4			2	2		6
17c後半～18c前半	1		1		11		11		12
17～18c	1		1		3	4	7		8
18c前半				1	1	1	2		3
18c後半					13	3	16		16
18c					22	55	77		77
18c後半～19c前半					10	38	48		48
19c前半					18	48	66		66
18～19c					12	32	44		44
近世	3		3		40	1	41	2	46
計	9	4	13	1	133	191	324	3	341

Ⅲ層からは、17世紀前半から19世紀前半までの遺物が出土している。出土数のピークは18世紀後半から19世紀前半にみられる。最も新しい遺物の年代は19世紀前半で、輸入コバルト等を用いた磁器等の出土が全く見られないことから、Ⅲ層の年代は19世紀前半と推定され、幕末までは下らないものと考えられる。

これによりⅣ層上面は概ね18世紀前半からⅢ層が堆積する19世紀前半までの地表面であったと考えられる。また、Ⅲ層上面はⅡ層直下でレンガ等の出土があり、明治期までの地表面であったと考えられる。

（２）Ⅲ層出土陶磁器の一括性について

野外調査では、Ⅲ層を掘り下げる際、４段階に分け出土遺物の取上げを行った。①Ⅲ層上面、②Ⅲ層掘り下げ１回目、③同２回目、④同３回目の４段階である。①～④は第29表の接合関係に対応する。出土した全破片についてこれを記録し、個体別分類作業、接合作業を実施した。①～④の間で接合関係のあった資料を、接合率別に集計したものが第27表である。接合率10/10が完形品で、「～10/10」のカテゴリーは半分以上が接合しているものである。④の中でのみ接合しているものが53点中33点と最も多く60％を占める。しかし、特に磁器では①と④で接合関係がある資料の３点全てが高い接合率を示していることから、Ⅲ層出土遺物は高い一括性をもち、比較的短期間の内に廃棄された

第29表　第16次調査3区Ⅲ層出土陶磁器接合関係表

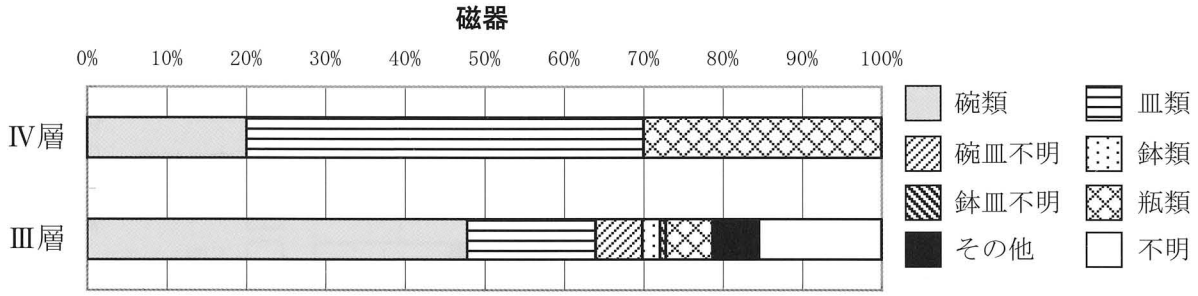
接合関係				磁器（接合率）			陶器（接合率）			計	年代			
				～1/10	～4/10	～10/10	～1/10	～4/10	～10/10		17c後～18c前	18c後	18c後～19c前	19c前
①			④				2	1		3				○
①	②		④			1				1		○		
①		③				1				1				○
①		③	④			1		1		2		○		○
	②					3				3	○			○
	②	③				1			1	2			○	○
	②		④			4		1		5	○	○		○
		③						1		1				○
		③	④			1	1			2				○
			④	5	1	4	7	11	5	33	○		○	○
			計	5	1	16	10	15	6	53				

資料であると考えられる。また、廃棄された段階に関し、接合関係が見られなかった１破片のみの資料の出土傾向をみると、磁器で112点中105点（94％）、陶器で145点中143点（99％）が④から出土している。これは接合資料と同様の傾向であり、Ⅲ層一括遺物の廃棄は④の段階で行われた可能性が高い。３区基本層序の項でも述べた通り、Ⅲ層④の遺物を取り上げた後は遺物の出土がほとんど無く、Ⅲ層最下部厚さ３～５㎝の部分は遺物廃棄時点での表土であった可能性がある。ただし現場では違いが認められず、明確にこれを分層することは出来なかった。この面の認定については今後の課題としたい。

（３）Ⅲ・Ⅳ層出土陶磁器の器種組成、産地別組成について

器種組成については第73､74図､陶器の産地別組成については第75図に示した。磁器の器種組成についてみると､Ⅳ層は出土点数が10点と少なく量比について議論できる状況にないが、皿類が半数を占め瓶類、碗類がこれに続く。Ⅲ層は、碗類が48％で最も多く、次いで皿類が16％、瓶類が5.9％である。この他、点数は少ないが蓋物、猪口、段重、香炉、紅皿、水滴などが出土している。製作年代別にみると、皿類が17世紀中頃から18世紀前半の間に収まるのに対し、碗類が18世紀後半から19世紀前半を主体としており顕著な違いが見られる。Ⅲ層出土陶磁器では、製作年代が異なり、かつ比較的高い接合率を示す資料が共伴している（第29表）。少なくとも接合率の高い資料については混入などではなく19世紀前半に廃棄されるまで伝世し、同時期に使用されていたものと考えられる。陶器は、Ⅳ層では4点と少なく碗、擂鉢、香炉がみられる。Ⅲ層では、碗類が48％で半数を占め、袋物、鉢類、皿類がこれに続く。他には仏飯器や香炉、水滴などが出土している。

産地別組成については、磁器は136点中132点（97％）が肥前で次いで瀬戸美濃（瀬戸美濃？５点を含む）が13点（10％）である。陶器は、Ⅳ層で肥前、丹波、岸がみられる。Ⅲ層では、大堀相馬が135点と全体の71％を占める。他は全て10点以下で、小野相馬、肥前、瀬戸美濃、堤がみられる。他には、僅かであるが京・信楽、丹波、岸がみられる。今回詳細な比較は出来なかったが、概ね同時期の二の丸と同様の傾向を示すものと思われる。



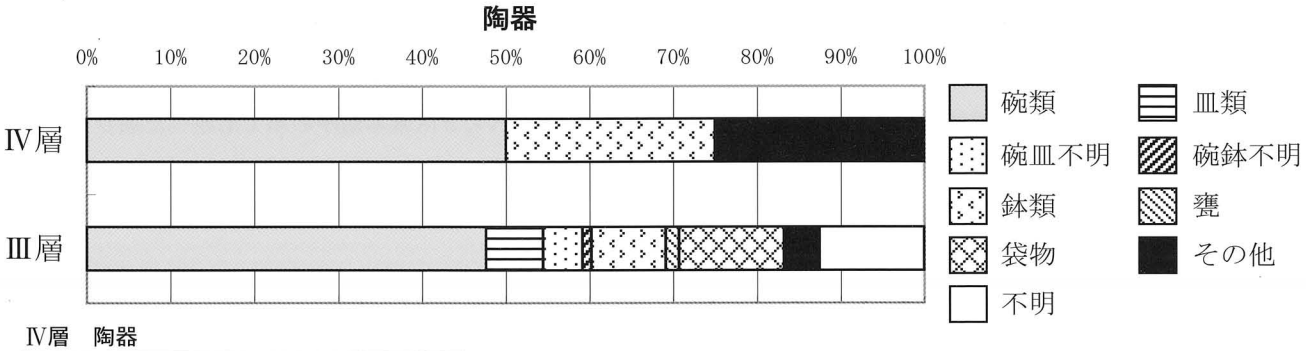
Ⅳ層　磁器

製作年代	碗類	皿類	瓶類	小計
17c後半	1			1
17c		2	1	3
17c後半～18c前半		1		1
17～18c		1		1
18c前半		1		1
近世	1		2	3
計	2	5	3	10

Ⅲ層　磁器

製作年代	碗類	皿類	碗皿不明	鉢類	鉢皿不明	瓶類	その他						不明	計
							蓋物	段重	猪口	香炉	紅皿	水滴		
17c中頃		1												1
17c後半	1	2												3
17c後半～18c前半	1	9								1				11
18c前半	1													1
18c後半	11						1						1	13
18c	10	3	1		1	2	1	1	1				2	22
17～18c				1		1						1		3
18c後半～19c前半	7								1		1		1	10
19c前半	15		1	2										18
18～19c	8		1			1							2	12
近世	11	7	5			4							15	42
計	65	22	8	3	1	8	2	1	2	1	1	1	21	136

第73図　第16次調査3区Ⅲ・Ⅳ層出土磁器製作年代別器種組成



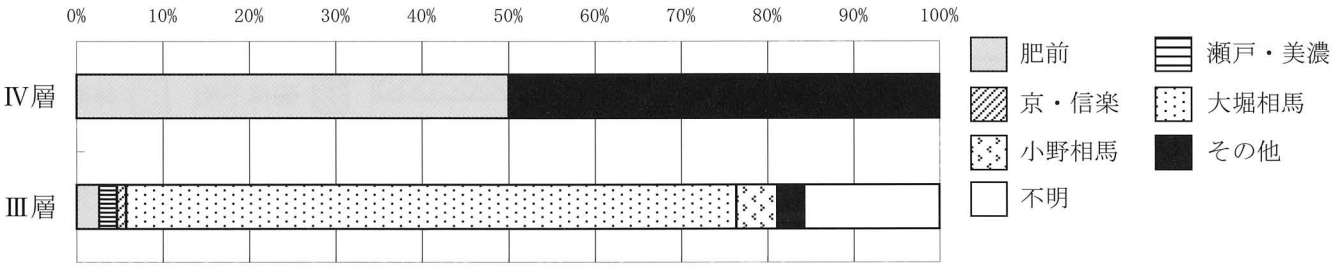
Ⅳ層　陶器

製作年代	碗類	鉢類	その他	小計
	碗	擂鉢	香炉	
17c中頃			1	1
17c後半	2			2
17c		1		1
17c後半～18c前半				
17～18c				
18c前半				
近世				
計	2	1	1	4

Ⅲ層　陶器

製作年代	碗類	皿類	碗皿不明	碗鉢不明	鉢類				甕	袋物		その他				不明	計
					鉢	片口	擂鉢	瓶掛		瓶類	土瓶急須	仏飯器	香炉	水滴	蓋		
17c前半		3															3
17c後半	2				2												4
17c							2										2
17c?			1				2			1							4
18c前半	1																1
18c後半	2	1															3
18c	40	4	3										2			6	55
18c後半～19c前半	22	1	2	1		1					3	3				5	38
19c前半	19	2	2	1	1		5	1	2	2	10			1		2	48
18～19c	5	1	1				3		1	4	4		1		1	11	32
近世		1															1
計	91	13	9	2	3	1	12	1	3	7	17	3	3	1	1	24	191

第74図　第16次調査３区Ⅲ・Ⅳ層出土陶器製作年代別器種組成



Ⅳ層

製作年代	肥前	その他		計
		丹波	岸	
17c中頃			1	1
17c後半	2			2
17c		1		1
計	2	1	1	4

Ⅲ層

製作年代	肥前		瀬戸・美濃		京・信楽		大堀相馬	小野相馬	その他			不明	計
	肥前	唐津	瀬戸・美濃	志野	京焼	京・信楽			丹波	岸	堤		
17c前半		1		2									3
17c後半	2	2											4
17c									1	1			2
17c ?					1							3	4
18c前半			1										1
18c後半							3						3
18c							45	9				1	55
18c後～19c前							37					1	38
19c前半			1				37				4	6	48
18～19c						1	13					18	32
近世												1	1
計	2	3	2	2	1	1	135	9	1	1	4	30	191

第75図　第16次調査３区Ⅲ・Ⅳ層出土陶器製作年代別産地別器種組成

６．まとめ

第16次調査では、以下①～⑦の成果が得られた。

①1区堀跡の調査では、堀の北岸および西岸を検出した。南岸は検出するに至らなかった。堀の底面については未確認であるが、17世紀代の遺物を含む粗砂層が確認された。これにより堀の規模は、南北幅が35m以上、深さが現地表面より6.35m以上、また北岸盛土上面の旧地表（Ｘ層）面より5.25m以上となることが明らかとなった。

②堀跡北岸では、新・古２段階の盛土により形成されたことが確認された。特に古段階の盛土では版築状の特徴がみられた。また、これら盛土に伴って３列の杭列を検出した。杭列１，２は北岸の検出ラインにほぼ平行し、それぞれ古段階北岸盛土（ＸＸ層）、新段階北岸盛土（ＸＶ層）に伴うものとみられる。機能的には土留めの杭と考えられる。杭列３は新段階北岸盛土（ＸＶ層）の上面から打たれた、南北方向に延びるしがらみ状の遺構である。南側でわずかに西へ湾曲する。杭には竹材が編みこまれている。杭列３を直接覆う水性堆積層（ＸＩ層）からは幕末から明治期の磁器が１点出土している。

③堀跡西岸でも新・古２段階の盛土を確認した。絵図等によれば西岸は土塁となっており、北岸と同様に版築状の特徴がみられた古段階の盛土（ＸＸＩ層）については、土塁の積み土である可能性が高い。古段階では、盛土の上面は階段状となっており、各段には径10～20cmの円礫を貼り付けた集石が検出された。杭列4はこの段階に伴うものと推定される。杭列5は、新段階盛土（ＸⅣ層）に伴うものとみられる。２列とも南北方向に延びるが、杭列５については他と異なり、盛土の落ち際で斜めに打たれた状態で検出された。

④堀の水位に関して、北・西岸盛土の直上にのる水性堆積層（北岸：ＸＩ層、西岸：ＸⅧ層）のトップレベルをみると、ＸＩ層は28.52m、ＸⅧ層は28.48mで非常に近似する。幕末から明治期の磁器が出土したＸＩ層とＸⅧ層が同時期の堆積物とした場合、西岸のＸⅧ層は、集石直上の堆積層で新段階西岸盛土（ＸⅣ層）の直下にあたるため、西岸の新段階盛土（ＸⅣ層）とそれに伴う杭列５が明治期の遺構となる可能性も考えられる。しかし、この堀については、今回の調査および地図の検討から、明治期に入り40年程でほぼ自然埋没したものと考えられるため、明治期に西岸への新たな盛土や杭列の設置等、堀のメンテナンスを行ったとは考えにくい。よって、現段階では西岸の新段階盛土と杭列５についても近世期に属する可能性が高いと推定される。また、北岸と西岸では必ずしも盛土や杭列の設置、堀の泥さらい等が並行して実施されてはいない可能性も指摘できる。

⑤２区では、現地表面下約１ｍで幕末～明治期の旧表土と考えられる黒色土層とそれに覆われる礫層を検出した。礫層には瓦等の遺物が含まれており、人為的なものである可能性がある。昨年度、登城路の北側で検出した石組側溝については検出されなかった。石組側溝については、２区より南側では堀に向かう傾斜地となるため、存在したとすればより北側にあったものと考えられる。

⑥３区では、版築状の土塁積み土を確認した。また、土塁の構築後に堆積した遺物包含層を２枚確認した。近代盛土であるⅡ層直下のⅢ層からは18世紀後半から19世紀前半の陶磁器を主体とする遺物が出土した。層内での接合関係から、比較的短期間に一括して廃棄された可能性が高いと考えられる。また、Ⅲ層直下のⅣ層からは17世紀後半を主体とする陶磁器が僅かながら出土した。土塁の構築年代については、積み土がⅣ層直下の無為物層（Ｖ層）を挟み、その下で確認されたことから、現段階では17世紀前半である可能性が高いと考えられる。

⑦遺物としては、3区の出土量が多く、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、土製品、瓦、鉄製品、銅製品、石製品、ガラスなどが出土した。

Ⅵ　理化学分析

1．放射線炭素年代測定

KS-411（Ⅳ層上面焼土遺構）埋土中より採取した炭化物試料３点についてAMSによる放射性炭素年代測定を行った。試料と方法を第30表に、測定結果を第31表に示す。

測定の結果^{14}C年代値で410±40年BP・440±40年BP・330±40年BP、補正^{14}C年代値で380±40年BP・440±40年BP・340±40年BPの結果を得た。また、これらの年代値を暦年代較正曲線により暦年較正し、それぞれ95％確率（2σ）でcalAD1440～1640，calAD1420～1490，calAD1450～1650との測定結果を得た。

第30表　放射性炭素年代測定　試料と方法

試料番号	層位	種類	前処理・調整	測定法
C-1	KS-411埋土１	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
C-2	KS-411埋土１	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
C-3	KS-411埋土１	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS

※ AMS は加速器質量分析法：Accelerator Mass Spectrometry

第31表　放射性炭素年代測定　測定結果

試料番号	測定 No (Beta-)	^{14}C年代 1) (年 BP)	σ^{15}C 2) (‰)	補正^{14}C年代 3) (年 BP)	暦年代 4)
C-1	227320	410 ± 40	-27.1	380 ± 40	交点 : cal AD 1470
					1 σ : cal AD 1450 ～ 1520
					cal AD 1590 ～ 1620
					2 σ : cal AD 1440 ～ 1640
C-2	227321	440 ± 40	-25.0	440 ± 40	交点 : cal AD 1440
					1 σ : cal AD 1430 ～ 1460
					2 σ : cal AD 1420 ～ 1490
C-3	227322	330 ± 40	-24.3	340 ± 40	交点 : cal AD 1520, AD1590, AD 1620
					1 σ : cal AD 1470 ～ 1640
					2 σ : cal AD 1450 ～ 1650

1　14C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2　δ（デルタ）^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3　補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4　暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。CalはCalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（シグマ）（68％確率）と2σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

2．珪藻分析

第32表　18年度 仙台城跡発掘調査分析業務委託試料一覧

試料No.	調査次数	地　点	遺構・層位	土　質
S-1	15次	1区	KS-405・埋土1層	シルト質砂
S-2	16次	1区堆積層	Ⅱ層（近代以降の盛土層、一部水性堆積層）	シルト質粘土、細砂の互層
S-3			Ⅲ層（粘質水性堆積層、近代）	シルト質粘土
S-4			Ⅳ層（植物遺体を大量に含む人為堆積層、近代）	砂質シルト
S-5			Ⅴ層（旧表土層、近代？）	砂質シルト
S-6		1区北岸堆積層	Ⅶ層（堀跡北岸の崩落土層）	砂質シルト
S-7			ＸⅠ層（ＸⅤ層直上の砂質水性堆積層）	粘質シルト
S-12			ＸⅤb層（堀跡北岸を形成する盛土層<新段階>）	砂質シルト
S-13			ＸⅥd層（堀跡北岸を形成する盛土層の崩落土層）	シルト質砂
S-16			ＸＸd層（堀跡北岸盛土層<古段階>：版築状）	砂質シルト
S-17			ＸＸf層（堀跡北岸盛土層<古段階>：版築状）	粘質シルト
S-8		1区西岸堆積層	ＸⅡa層（堀跡西岸の土墨崩落土層）	砂質シルト
S-9			ＸⅢf層（堀跡西岸の土墨崩落土層）	細砂
S-10			ＸⅢh層（堀跡西岸の土墨崩落土層）	細砂
S-11			ＸⅢi層（堀跡西岸の土墨崩落土層）	粘質シルト
S-14			ＸⅧa層（堀跡西岸の水際に堆積した黒色粘土質土層）	シルト質粘土
S-15			ＸⅧb層（堀跡西岸の水際に堆積した黒色粘土質土層）	シルト質粘土
S-18			ＸＸ。i層（堀跡西岸を形成する盛土層：版築状）	シルト質粘土

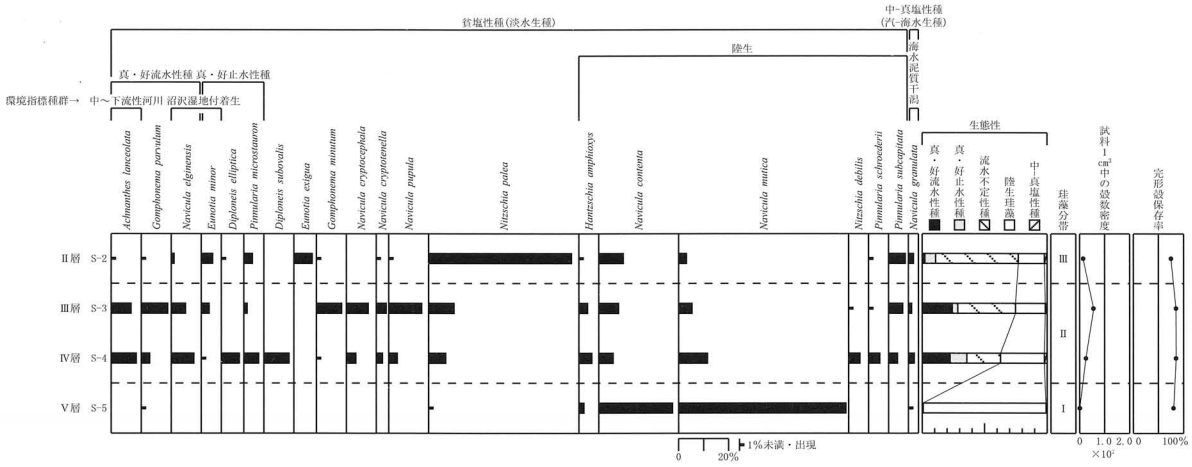
珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域など水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。分析試料は、第15次調査KS-405（暗渠状遺構）埋土１層から採取された１点と第16次調査１区（堀跡）から採取された17点の計18点である。

分析の結果、KS-405埋土１層では珪藻密度が極めて低く、珪藻が生育しにくい乾燥した環境であったか、埋土の堆積時間が早く珪藻が集積しなかった事などが推定される。

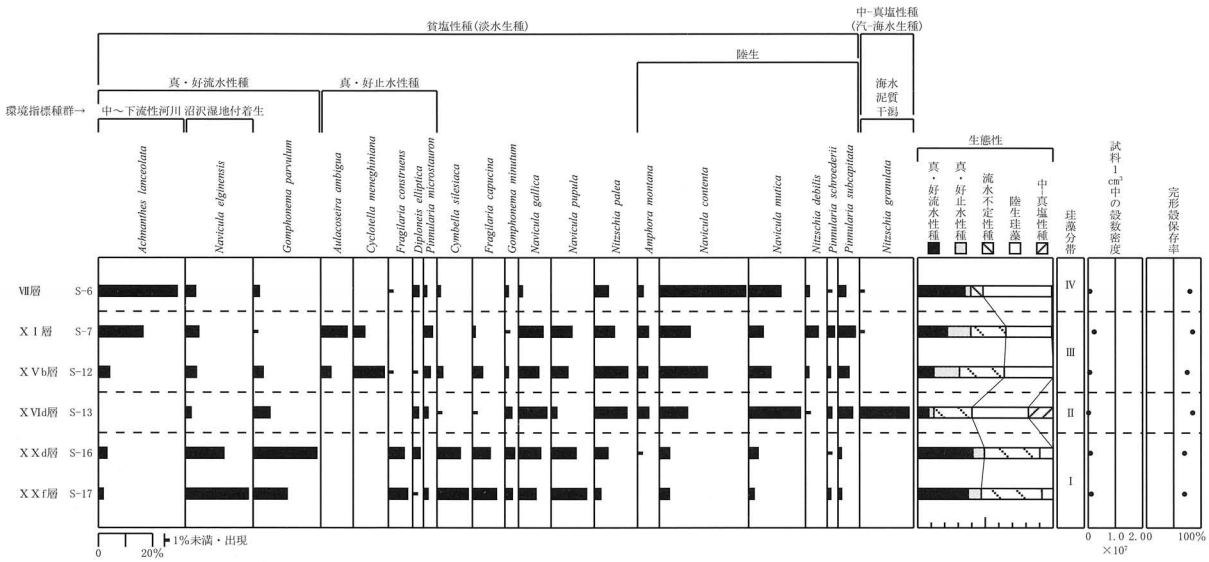
第16次調査１区の17点は、採取された箇所毎に、１区堆積層、１区北岸堆積層、１区西岸堆積層と大別し、それぞれに分析結果を示す。１区堆積層のⅤ層は、Ⅳ層堆積時の１区西部における旧表土層とみられるが、陸生珪藻がほとんどを占め、湿った土壌の陸の環境が示唆される。Ⅲ・Ⅳ層は概ね同様の傾向がみられ、Ⅴ層に比べ陸生珪藻の占める割合が低くなり、真・好流水性種、流水不定性種の占める割合が高くなる。Ⅱ層は、流水不定性種の占める割合が高く不安定な水域の環境が推定される。

１区北岸堆積層のＸＸ層は真・好流水性種と流水不定性種の占める割合が高く、水草の生育するやや不安定な流水域の環境が示唆される。また、そのような環境で形成された堆積物が盛土として用いられたものと推定される。ＸⅥd層は陸生珪藻の占める割合が高く、流水不定性種と中－真塩性種（汽－海水生種）で海水泥質干潟環境指標種群が比較的多いことから、湿った陸の環境から不安定な水域および干潟の環境が推定される。崩落土であることから、海成層を含めて用いられた堆積物が崩落したものと考えられる。ＸⅠ・ＸⅤb層は、陸生珪藻、流水不定性種で占められ、真・好流水性種、真・好止水性種を伴い、真流水性種がＸⅠ層では増加することから、ＸⅤb層では湿った環境から水の流れ込む池沼の環境が示唆され、ＸⅠ層では流水が著しくなる。Ⅶ層は、陸生珪藻と中～下流性河川環境指標種群の真流水性種が多くなることから、湿った岸の環境で引水等により流れのある水域に接する環境が推定される。

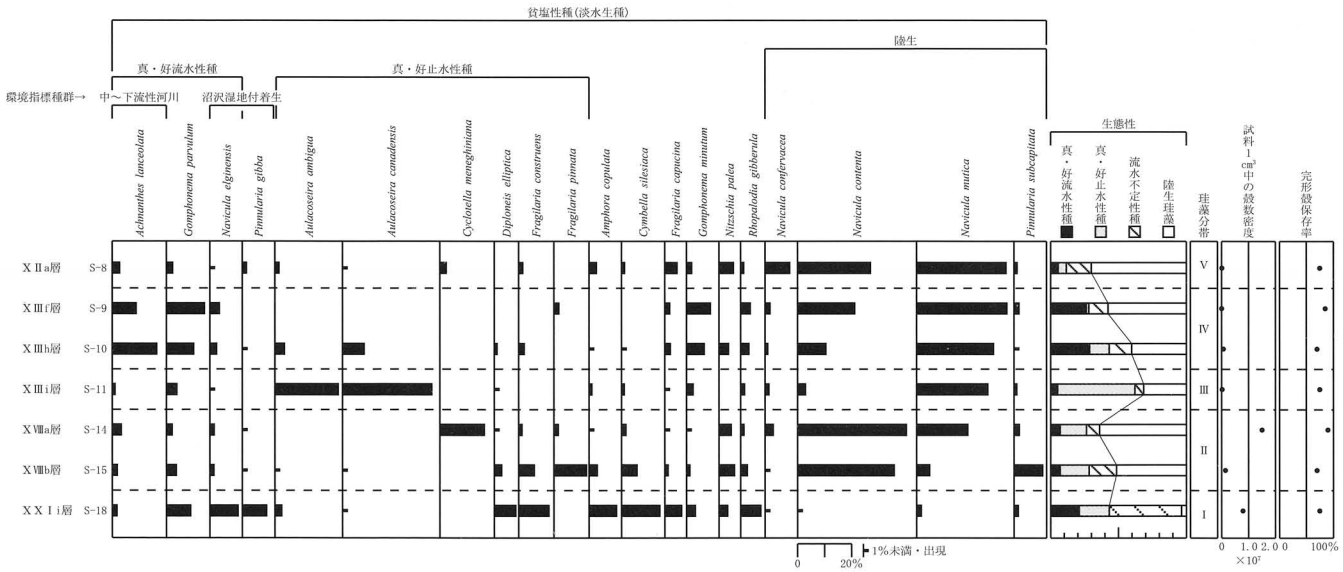
１区西岸堆積層のＸＸi層は、流水不定性種と沼沢湿地付着生環境指標種群を含む真・好流水性種がほとんどを占め、流れをもつ水域が推定される。またその環境で形成された堆積物が盛土として用いられたものと推定される。ＸⅧa層、ＸⅧb層は、陸生珪藻の占める割合が高く、真・好止水性種を主に伴う。池沼の岸の湿った汀の状況であったと推定される。ＸⅢi層は、真・好止水性種の占める割合が高く、池沼が示唆される。ＸⅢf・ＸⅢh層は、陸生珪藻が優占し、中～下流性河川環境指標種群を含む真・好流水性種が比較的多い。こうしたことから、河川から引水された流水域に接する湿った環境が推定される。ＸⅡa層は、陸生珪藻の占める割合が高く、湿った環境が示唆される。



仙台城跡発掘調査16次調査１区堆積層における主要珪藻ダイアグラム



仙台城跡発掘調査16次調査１区北岸堆積層における主要珪藻ダイアグラム



仙台城跡発掘調査16次調査１区西岸堆積層における主要珪藻ダイアグラム

第76図　第16次調査１区堆積層における主要珪藻ダイアグラム

Ⅶ　絵図・文献資料の調査

絵図調査報告

仙台城跡を描いた「肯山公造制城郭木写之略図」を実際に観察した。

1　調査概要

日時：平成18年９月28日（木）　　場所：宮城県図書館

調査指導：仙台城跡調査指導委員会　西　和夫　委員

調査者：文化財課　渡部紀　鈴木隆　鹿野仁子　　仙台市博物館　斎藤潤　　神奈川大学大学院　大川井寛子

2　「肯山公造制城郭木写之略図」について

「肯山公造制城郭木写之略図」（以下、「木写之略図」という）は、本丸と二の丸の建物跡を内部の部屋割りまで描いた絵図である。しかし、存在しなかった天守などが描かれており、計画図の性格が考えられている。本図については佐藤巧氏により詳細な検討が行われており、「天和以前、即ち延宝年代頃における城郭改造整備計画図の如きものでないかとみられる。」（佐藤：1986）とされている。また、阿部和彦氏は「仙台城の建築」（阿部：2001）において、当初は延宝年間末から天和初年に作製された模型の下図であり、のちに大部分の居館部を描き加え元禄年間の中期ころに現状のような形式になったと考えられる、としている。

第77図　「肯山公造制城郭木写之略図」の方眼範囲（斜線部）と方眼方向

3　観察結果

大きさ　縦188cm　横183cm　　平成17年度に修復を行っている

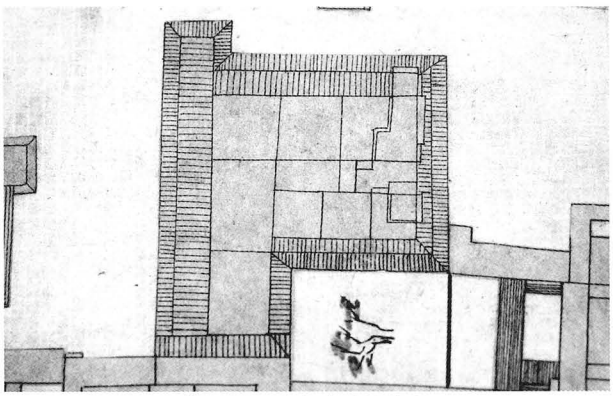
料紙に石垣、土塁、堀などが着色され、それ以外の部分のうち、第76図に斜線で示した範囲に約３㎜単位の方眼の圧痕が施されている（１間を１分）。方眼の方向は一方向で、二の丸跡東側の区画方向に一致する。方眼は大手の大身屋敷にはみられないが、大橋対岸の道や、千貫沢北側の道に施されている。

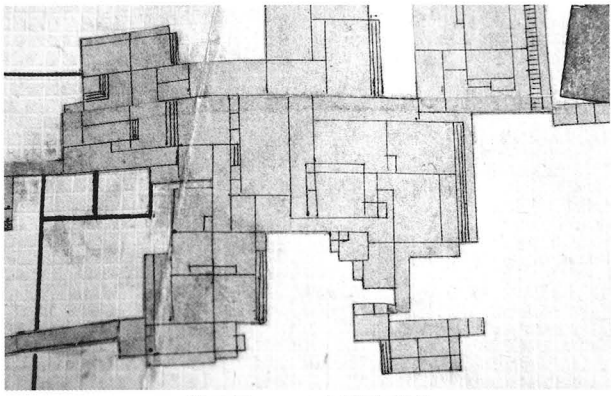
建物跡は、黄色の紙に間仕切りを描いて貼り付けているが、ゆがみが生じている箇所も見られる。紙の色と間仕切りの描き方は本丸と二の丸で異なる。本丸大広間の間仕切りが平行でなく、二の丸の描き方のほうが丁寧である。

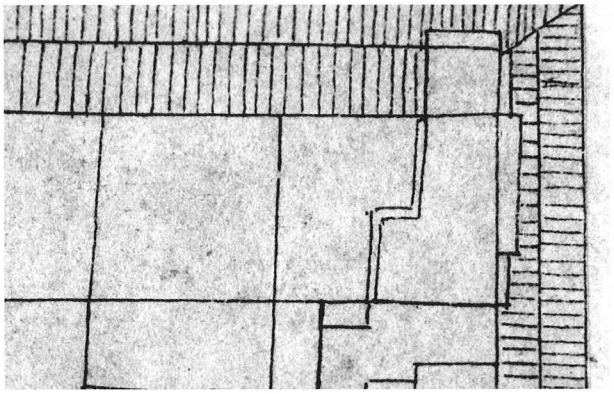
描き方の順序は、石垣、堀などの着色のあと、空白部に方眼を施し、紙を貼り付けている。樹木は方眼の後に描かれたようで、方眼に沿って絵具がにじんだ痕が見られる。

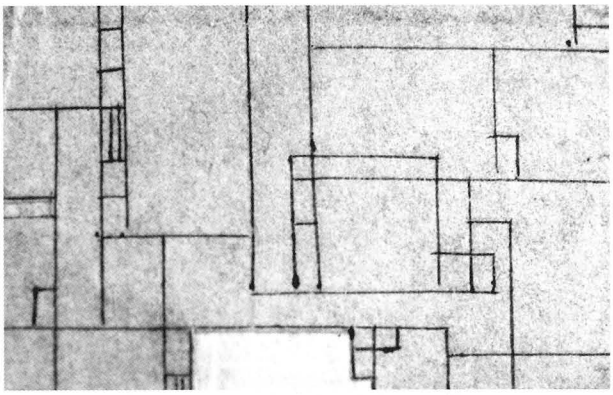
参考文献

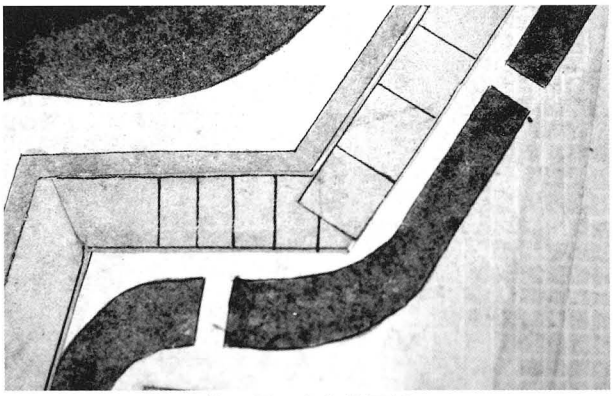
・佐藤巧「仙台城館および周辺建築復元考」『仙台市博物館調査研究報告　第６号』仙台市博物館　昭和61年（1986）
・阿部和彦「仙台城の建築」『仙台市史　通史編３　近世１』仙台市　平成13年（2001）

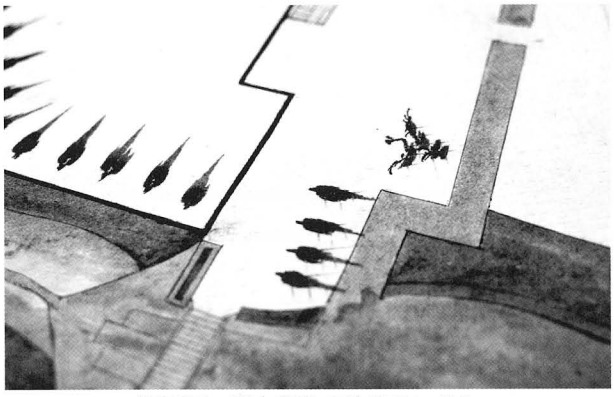

第78図　本丸大広間部分


第79図　二の丸建物部分


第80図　本丸大広間間仕切りの描写


第81図　二の丸建物間仕切りの描写


第82図　本丸北西部


第83図　樹木部分の絵具のにじみ

仙台城跡関連絵図調査　その1

はじめに

仙台城下絵図についての研究は、阿刀田令造氏による「仙台城下絵図の研究」（1936・㈱斎藤報恩会）を嚆矢とし、宮城県図書館収蔵資料については「絵図・地図解説目録」（1993）で詳細な解説が行われている。図書館や郷土資料所蔵機関等の目録を確認すると、仙台城に関する絵図についてはかなりの数の存在が認められる。今回は、これまでの先行研究および「仙台市史城館編」編さんの過程での調査成果を参考に、主たる絵図について集成した。

集成表は、県、市文化財指定されたもの、阿刀田令造氏他の研究成果で公刊されているもの、市史編さん過程での調査成果などを中心に作成した。資料番号は仮であり、今後変更される可能性があることから、各所蔵機関の登録番号および出版物に記された番号などをあわせて記した。

資料の実物を調査し評価していくべきであり、今後も継続的に調査を行う予定である。

絵図の分類

今回の報告では、絵図を以下のとおり分類した。

Ａ城下絵図

城下全体を描いたもので、ａ幕府提出用と、ｂ藩政用に細分した。藩政用には、原図と見られる精緻なものと、その写しとみられるものの2種があるため、先行研究の成果にもとづき集成表にその旨を記した。

Ｂ城絵図

仙台城を描いたもので、ａ幕府提出用、ｂ藩政用絵図、ｃその他、に細分した。ａ幕府提出用は、石垣、土塁等の修復の際に幕府へ提出した修復窺絵図である。ｂ藩政用では、城全体を描いたもの、本丸を描いたもの、二の丸を描いたものにさらに細分した。ｃその他としたものは、儀式などの際の人員配置を描いた絵図などをとりあげた。

Ｃその他

Ａ，Ｂ以外のもので、ａ御修復帳（藩の施設の個別修復記録）、ｂ姿絵図、ｃ絵画資料（城下を鳥瞰的に描いた屏風など）をとりあげた。

今後の予定

今回は、県内所蔵物件を主として収集したが、今後は他地方の機関所蔵資料についても情報収集を進めていきたい。たとえば、内閣文庫、尊経閣文庫、池田家文庫などにも仙台城絵図が保管されているため、調査の上で集成していく予定である。

第33表　仙台城跡関連絵図集成表（1）（平成19年3月段階）

大分類	小分類	番号	名称	製作年（西暦）	法量（縦×横）cm	所蔵・所収	指定	備考	目録等
城下絵図	幕府提出用	1	奥州仙台城絵図	正保2（1645）年	268×319	（財）斎藤報恩会	市	表書「奥州仙台城絵図　松平陸奥守」	報恩会A-Ⅲ61　阿刀田1　市史城館P342　市パンフ45集No.1
		2	奥州仙台城并城下絵図	天和2（1682）年	343×250	宮城県図書館	県	表書に天和2年9月23日幕府へ提出の旨記載	県絵図目録81　阿刀田10　市史城館P344　市パンフ45集No.2
	藩政用	3	仙台城下絵図	寛文4（1664）年	363×376	宮城県図書館	県	城内の建物を描く	県絵図目録73　阿刀田2　市史城館P343　市パンフ45集No.3
		4	奥州仙台城絵図	正保3～寛文8（1668）年	79.2×108.2	宮城県図書館	県		県絵図目録839
		5	仙台城下絵図	寛文8～9（1668～1669）年	166.6×196.9※	『仙台城下絵図の研究』		第二高等学校旧蔵	阿刀田3
		6	仙台城下絵図	寛文9（1669）年	190×164	宮城県図書館	県		県絵図目録74　阿刀田4　市パンフ45集No.4
		7	仙台之城図	寛文年間か	171×151	大分県臼杵市			臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書702
		8	仙台之城図	寛文年間か	157×152	大分県臼杵市		7と同じ図柄	臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書703
		9	仙台城下絵図	延宝～天和（1673～1684）年間	177×197.5	仙台市歴史民俗資料館			絵図・地図で見る仙台2No.1
		10	仙台城下絵図	延宝6～8（1678～1680）年	172×200	宮城県図書館	県		県絵図目録76　阿刀田6　市パンフ45集No.5
		11	仙台城下大絵図	延宝6～8（1678～1680）年	362×423	宮城県図書館	県	10の写し	県絵図目録77　市パンフ45集No.6
		12	仙台城下大絵図	延宝6～8（1678～1680）年	425×369	宮城県図書館	県	10の写し	県絵図目録78　阿刀田7　市パンフ45集No.7
		13	仙台城下絵図	延宝6～8（1678～1680）年	164×189	宮城県図書館	県	10の写し	県絵図目録79
		14	仙台御城下全図	延宝6～天和2（1678～1682）年	190×167	宮城県図書館	県		県絵図目録80　阿刀田9
		15	仙台藩治絵図	延宝6～8（1678～1680）年	198.4×206※	『仙台城下絵図の研究』		写し　第二高等学校旧蔵	阿刀田8
		16	仙台城下絵図	延宝年間（1673～1681）年		個人蔵		写し　通名を朱書き	市史市民生活P117
		17	仙台城下絵図	天和2（1682）年　※内容は延宝（1673～1681）年間	393×336	宮城県図書館	県	末書「天和二年御作事方」	県絵図目録75　阿刀田5　市パンフ45集No.9
		18	仙台城下絵図	天和2（1682）年	304×219	宮城県図書館	県	題簽「仙台家中屋敷図」	県絵図目録82　市パンフ45集No.10
		19	仙台御城下御絵図	天和2年（1682）年	1090.8×1090.8※	『仙台城下絵図の研究』			阿刀田11
		20	仙台城下五釐卦絵図	元禄4～5（1691～1692）年	496×602	（財）斎藤報恩会	市		報恩会A-1314　市史城館P345　市パンフ45集No.11
		21	仙台城下絵図	元禄16～享保17（1703～1732）年	156×156※	『仙台城下絵図の研究』		個人旧蔵	阿刀田12
		22	[享保年間仙台全図]	享保9（1742）年	134×118	宮城県図書館	県	印記「菊田氏蔵書記」	県絵図目録83
		23	仙台城下絵図	享保9（1742）年	135×133	東北歴史博物館			絵図・地図で見る仙台2No.2
		24	仙台城下絵図写	享保11～19（1744～52）年	280×172.6	仙台市博物館			
		25	仙台城下絵図	宝暦・明和（1751～1772）年間	131×185.5	（財）斎藤報恩会			報恩会A-377　絵図・地図で見る仙台2No.3
		26	仙台地図	安永元～7（1772～1778）年	133.3×172.7※	『仙台城下絵図の研究』		写し　個人旧蔵	阿刀田13
		27	仙台御城下絵図	安永元～7（1772～1778）年	167×180	『日本城下町絵図集・東北編』		写し　個人蔵	
		28	仙台城下絵図	安永元～7（1772～1778）年	130.2×184.8※	（財）斎藤報恩会		写し	阿刀田14
		29	仙台城下絵図	天明3～寛政元（1783～1789）年	99.9×151.5※	『仙台城下絵図の研究』		個人旧蔵	阿刀田15
		30	仙台城下絵図	天明6～寛政元（1786～1789）年	222×308	仙台市博物館	市		阿刀田16　市史城館P346　市パンフ45集No.12
		31	仙台城下絵図	文化9～14（1812～1817）年	118.1×118.1※	『仙台城下絵図の研究』		天明1・2年頃の写し　個人旧蔵	阿刀田17
		32	仙台城下絵図	文政3（1820）年		『仙台城下絵図の研究』		個人旧蔵	阿刀田18
		33	御城下町割図	天保4（1833）年	72×110	宮城県図書館	県		県絵図目録84
		34	安政補正改革仙府絵図	安政2～3（1855～1856）年	151.5×145.4※	『仙台城下絵図の研究』		第二師団司令部旧蔵　戦災で焼失	阿刀田19　市史城館P347
		35	[仙台城下略絵図]	年代不詳	54×78	宮城県図書館	県	印記「菊田氏蔵書記」	県絵図目録85
		36	仙台城下絵図	江戸中期		仙台市博物館		写し　軸装	
		37	仙台城下絵図	江戸中～後期		仙台市博物館		写し　軸装	

第34表　仙台城跡関連絵図集成表（2）（平成19年3月段階）

大分類	小分類	番号	名称	製作年（西暦）	法量（縦×横）cm	所蔵・所収	指定	備考	目録等
城絵図	幕府提出用	38	仙台城修復窺絵図	元禄7（1694）年		（財）斎藤報恩会		元禄7年11月29日付老中奉書	報恩会A-Ⅲ497
		39	仙台城修復窺絵図	宝永4（1707）年		仙台市博物館		宝永4年9月27日付老中奉書	
		40	仙台城普請奉窺御絵図	享保6（1721）年	120×125	宮城県図書館		享保6年11月19日付老中奉書	県絵図目録850　市パンフ45集No.15
		41	仙台城修復窺絵図	享保6（1721）年	118×126	（財）斎藤報恩会		同上	報恩会A-Ⅲ401　市史城館P351
		42	仙台城修復窺絵図	享保10（1725）年		『仙台城の建築』		享保10年10月28日付老中奉書	
		43	陸奥国仙台城普請窺	享保15（1730）年	128.8×122.6	宮城県護国神社		享保15年12月7日付老中奉書	
		44	陸奥国仙台城当五月破損之所図	元文4（1739）年	130×123	宮城県図書館		元文4年8月18日付老中奉書	県絵図目録849
城絵図	幕府提出用	45	仙台城修復窺絵図	元文4（1739）年	123×129	仙台市博物館		同上	市史城館P352
		46	仙台城修復窺絵図	元文4（1739）年		（財）斎藤報恩会		同上	報恩会A-Ⅲ458
	藩政用 全体	47	仙台城絵図		101×94	仙台市博物館		城内建物を描く　寛文4年城下絵図に類似	市史城館P348
		48	仙台城絵図	寛文8（1668）～天和2（1682）年間	182×162	個人蔵		方眼入り（墨書き）	市史城館P349
		49	肯山公造制城郭木写之略図		188×183	宮城県図書館	県	方眼入り（圧痕）　貼り絵図	県絵図目録840　市史城館P350　市パンフ45集No.8
		50	仙台城郭略図		184×180	宮城県図書館	県	「木写之略図」の写し	県絵図目録841
	藩政用 本丸	51	御本丸御殿略図	年代不詳	62.8×41.5	宮城県図書館	県	孔版本　文政10（1827）年以前の本丸を描く	県絵図目録842
		52	御本丸御家作御絵図	明治元（1868）年	95×94	宮城県図書館	県	袋書「古絵図明治元年十月四條殿参謀江指出写置者也」	県絵図目録843
		53	御本丸大広間地絵図		85×72	（財）斎藤報恩会			報恩会T-346
		54	青葉城御本丸之図		61.6×46.4	仙台市博物館			
		55	仙台城旧御本丸御屋形図	明和4（1767）年	105.8×262	仙台市博物館		明和4年藤博兼作成、明治26年（1893）遠藤充信書写、朱書き	市史城館P353
		56	御本丸御屋形大略之図			『仙台城の建築』			『仙台城の建築』
		57	仙台城旧本丸屋形図			『仙台藩祖尊皇事蹟』			『仙台藩祖尊皇事蹟』
		58	御本丸千畳敷之図			『仙台郷土研究』			『仙台郷土研究』
	藩政用 二の丸	59	御二之丸御指図	年代不詳	267×208	宮城県図書館	県	元禄期の改造以前の姿を描く	県絵図目録844　市史城館P354
		60	享和二年之御家作御絵図写	享和2（1802）年	253×192	宮城県図書館	県	文化元年（1806）の焼失以前の姿を描く	県絵図目録845　市史城館P355
		61	文化元年御造営御絵図写	文化元（1804）年	197×201	宮城県図書館	県	上書：仙台城文化元年御造営御絵図写（二の丸）	県絵図目録846　市史城館P356
		62	[仙台城二之丸御座敷絵図]		138×145	宮城県図書館	県		県絵図目録847
		63	御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図			『仙台城の建築』			
		64	御二丸御家作水抜御絵図			（財）斎藤報恩会			報恩会A-Ⅲ824
		65	[勤政庁絵図]	明治初年	217×160	宮城県図書館	県	袋書「勤政庁絵図」　二の丸中奥の絵図に、藩知事一家の部屋割りを付箋で記す	県絵図目録848
	藩政用 その他	66	御入部方絵図	天保13（1842）年	38×	宮城県図書館	県	一名：仙台城御座敷配置絵図　文化・文政期の本丸・二の丸の主要な部屋を描く	県絵図目録852
		67	御座敷絵図		9.7×18.8	宮城県図書館	県		県絵図目録884
		68	[御着城之節警護配置絵図]		61×78	宮城県図書館	県		県絵図目録番外1
		69	御城中席絵図並口解	嘉永元（1848）年以降		毛利コレクション			市史城館P565～603
		70	初鏡心之手綱	安政2（1855）年以降		仙台市博物館			市史城館P537～548

第35表　仙台城跡関連絵図集成表（3）（平成19年3月段階）

大分類	小分類	番号	名称	製作年（西暦）	法量（縦×横）cm	所蔵・所収	指定	備考	目録等
その他	御修覆帳	71	[御修覆帳]－仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調	寛文から元禄（17世紀後期）ころ	34.5×46.5	宮城県図書館	県		県絵図目録894　市史城館P357～369　市パンフ45集No.17
		72	御修覆帳	安永から天保（1772～1844）ころ	44.5×65	東北大学	市		市史城館P357～368　市パンフ45集No.18
		73	御修覆帳	文化・文政（1804～30）ころ	65×45	宮城県図書館	県	見返題「神社仏閣諸寺所役所萬御蔵共建替破損繕被成置候御修覆本帳」	県絵図目録893　市史城館P358～369　市パンフ45集No.19
	姿絵図	74	仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図	年代不詳	18.5×406.5	仙台市博物館	市	千田家資料	市史城館P370
	絵画資料	75	文久二年仙台城下図屏風	文久2（1862）年	87.5×160	（財）斎藤報恩会	市		報恩会A-Ⅲ　市史城館P372　市パンフ45集No.13
		76	慶応元年仙台城下図屏風	慶応元（1865）年		仙台市博物館			市史城館P372
		77	明治元年現状仙台城市之図	明治元（1868）年	38×95	仙台市博物館	市		市史城館P372　市パンフ45集No.14
		78	仙台領奥州街道絵図	江戸時代中期		仙台市博物館			市史城館P371
		79	仙台青葉城中御崖作眺望図巻	文化・文政（1804～30）ころ		仙台市博物館			市史城館P371
		80	仙台年中行事絵巻	嘉永2（1849）年ころ		仙台市博物館			市史城館P371

法量の※について：『仙台城下絵図の研究』では法量が尺貫法で記されているため、センチメートルに換算した。

目録等の凡例

阿刀田：阿刀田令造『仙台城下絵図の研究』

県絵図目録：宮城県図書館『宮城県図書館所蔵　絵図・地図解説目録』

報恩会：㈶斎藤報恩会『郷土資料図書分類目録』

市史城館：『仙台市史　特別編7　城館』

市史市民生活：『仙台市史　特別編4　市民生活』

市パンフ45集：『仙台市文化財パンフレット第45集　仙台城下絵図の魅力』

Ⅷ　総括

本年度は仙台城跡遺構確認調査の第２期５ヵ年計画の１年目であり、本丸大広間北東周辺の遺構確認調査（第15次）、三の丸巽門跡周辺の遺構確認調査（第16次）を行った。

これまで大広間跡の調査では、その位置や規模、柱間（６尺５寸基準）等を確認している。一昨年度の第10次調査では、通路の可能性がある、大広間車寄付近から御成門付近へ延びる石敷き溝状遺構を検出した。また、御成門跡の現存する礎石が門の北東角にあたる事をほぼ確定した。昨年度の第12次調査では、大広間雨落ち溝跡北辺の北約３mで石敷きを伴う礎石建物跡を１棟検出した。礎石は４石がL字形に並び、東西の軸線は大広間跡東西軸線より北へ20°振れる。礎石の柱間は約1.5mである。大広間跡北側周辺は能舞台の推定地であったが、この建物跡の全体形状、規模が不明である点やその建物が大広間に先行する事実から、能舞台との関連性を指摘するには至らなかった。この建物跡の評価は、今後大広間跡に先行する遺構の拡がりを明らかにし、周辺遺構全体の位置関係の中で行っていく必要がある。また、雨落ち溝が改修を受け、それに伴い新たに暗渠状遺構が取り付くなど遺構の変遷が明らかになった。同年実施した第13次調査では、堀跡の規模、位置の解明には至らず今年度第16次調査への課題となった。土塁裾部の調査では、巽門跡から長沼へと続く石組側溝を良好な状態で検出した。土塁については、厚さ約3.5mの版築状の積み土を確認した。

今年度の第15次調査は、大広間北東周辺（１区）および同南東周辺（２区）における遺構確認を目的として実施した。大広間雨落ち溝跡および礎石跡の北東角、南東角を確認した。両角の礎石跡については、隣接してそれぞれ２基検出され、南東角においては直接の切り合い関係が認められた。北東角についても時間差のある可能性が高いことから、建替の有無等について今後更なる検討が必要である。また、大広間の北東周辺では古い順から、南北溝跡（KS-407,404）、整地層（Ⅲ-１層）、東西塀跡（KS-406）、暗渠状遺構（KS-405）、東西塀跡（KS-403）の変遷が明らかとなった。大広間とその東側に展開する建物、庭園との位置関係や本丸御殿全体の配置、それらの時間的変遷を検討してゆく上で重要な成果である。今後、大広間の北側（第12次調査）や西側（第５・７・10次調査）における遺構の変遷と総合し、本丸北側における御殿構成の時間的変化を検討してゆく必要がある。昨年度に続き大広間に先行する石敷き遺構を検出した。大広間の内外に拡がることから、改めて大広間とプランの異なる遺構の存在が確認された。これらは共伴する瓦片などから近世期の遺構と考えられる。大広間成立以前の、築城期における遺構の規模やプランの検討は、今後も重要な課題の一つである。これらの成果を総合し、仙台城の築城から廃絶まで、本丸の果たした役割が時間的にどのような変遷を辿ったのか、この問題に考古学的な検討を加えていくことが、今後の本丸跡における調査の基本的な課題である。

第16次調査は、堀跡（１区）、石組側溝（２区）、土塁（３区）に関連する遺構の確認を目的として実施した。１区では、それぞれ３列、２列の杭列を伴う堀跡の北岸、西岸を確認した。また西岸では斜面に貼り付いた階段状の集石を検出した。堀の規模は、南岸が未確認であるため南北幅35m以上、深さが現地表面より6.35m以上となる。北・西岸共に盛土により形成されており、版築状の堆積構造が認められた。北岸の盛土は、この堀北側の登城路が土橋である可能性を示す。北・西岸の盛土には２時期の変遷が認められるが、絵図等で確認される堀の形態上の変化と、どのように対応するかは今後の検討課題である。２区では現地表面下約１mで幕末～明治期の旧表土と直下の礫層を検出した。礫層には遺物が含まれ、人為的なものである可能性がある。石組側溝は検出されず、登城路の幅を確認するには至らなかった。３区では版築状の土塁積み土を確認した。また、土塁構築後に堆積したⅣ層からは17世紀後半、Ⅳ層直上のⅢ層からは18世紀後半から19世紀前半を主体とする陶磁器他の遺物が一括で出土した。特にⅣ層の年代は、三の丸の土塁構築が17世紀前半に行われた可能性を示している。これについては、近年巽門から清水門へ抜けるルートを大手とする説に関連して、堀の形状・規模と共に今後の更なる検討が必要である。

参考文献

小倉強 「松島瑞巌寺と仙台城大広間」『仙台郷土研究』第２巻第12号 昭和７年（1932）

小林清治編 『仙台城と仙台領の城・要害（日本城郭史研究叢書２）』 昭和57年（1982）

小林清治 『伊達政宗』 昭和34年（1959）

佐藤巧 「仙台城居館の変遷とその構成・機能」『近世武士住宅』 昭和54年（1979）

西和夫 『建築技術史の謎を解く（続・工匠たちの知恵と工夫）』 昭和61年（1986）

西和夫 『図解古建築入門』 平成３年（1991）

仙台市教育委員会 『仙台城』 昭和42年（1967）

仙台市教育委員会 『仙台城三ノ丸跡』 昭和60年（1985）

仙台市教育委員会 『仙台城址の自然』 平成２年（1990）

東北大学埋蔵文化財調査研究センター『年報１～18』 昭和60～平成17年（1985～2005）

『仙台城跡石垣修復等調査指導委員会 第１～９回資料』 平成９～12年（1997～2000）

仙台市建設局 『仙台城石垣修復工事専門委員会 第１～15回資料』 平成13～16年（2001～2004）

仙台市教育委員会 『仙台城跡調査指導委員会 第１～15回資料』 平成13～18年（2001～2007）

仙台市教育委員会 『仙台城跡１～６』 平成13年～17年（2001～2006）

京都国立博物館『金色のかざり－金属工芸にみる日本美－』 平成15年（2003）

渡部薫『仙台城本丸大広間の復原的研究』 平成15年度神奈川大学建築学科西研究室卒業研究・修士論

『奥州仙台城絵図』 正保２・３年（1645･1646）（齋藤報恩会蔵）

『仙台城下絵図』 寛文４年（1664）（宮城県図書館蔵）

『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』（仙台市博物館蔵・千田家資料）

『御本丸大広間地絵図』（齋藤報恩会蔵）

『青葉城御本丸之図』（仙台市博物館蔵）

『御本丸御家作御絵図』 明治元年（1868）（宮城県図書館蔵）

『仙台城旧御本丸御屋形図』 明治26年（1893）遠藤允信追記（仙台市博物館蔵）

『伊達治家記録』（貞山公治家記録）

『仙台古文記』 慶長7年（1602）（伊達家御給主 高梨家文書 平成５年（1993） 所収）

『御本丸拝見覚書』 安永４年（1775）安倍彦右衛門記（仙台市史 昭和４年（1929）所収）

『能楽全書 第四巻 能の演出』東京創元社 昭和54年（1979）

西秋良宏編『東京大学コレクションⅠ 加賀殿再訪』 東京大学出版会 平成12年（2000）

追川吉生『江戸のミクロコスモス 加賀藩江戸屋敷』 新泉社 平成16年（2004）

甲崎光彦『武家屋敷－尾張藩上屋敷－』 季刊考古学53 平成７年（1995）

成瀬晃司『東大構内の遺跡から』 季刊考古学53 平成７年（1995）

『特別史跡彦根城跡表御殿発掘調査報告書』彦根城博物館 昭和63年（1988）

矢野顕蔵『仙台藩祖尊王事蹟』 明治32年（1899）

伊達邦宗『伊達家史叢談 巻之五』大正10年（1921） 復刻版『伊達家史叢談』今野印刷 平成13年（2001）

第二師団司令部『仙台城沿革』第二師団司令部 大正15年（1926）

小倉強『仙台城の建築』仙台工業高等学校 昭和５年（1930）

阿刀田礼造『仙台城下絵図の研究』㈶斎藤報恩会 昭和11年（1936）

小倉強「仙台城大広間絵図に就て」『仙台郷土研究 第十二巻第十一号』仙台郷土研究会 昭和17年（1942）

仙台市文化財保護委員会『仙台城』仙台市教育委員会 昭和42年（1967）

佐藤巧『近世武士住宅』叢文社　昭和54年（1979）
渡辺信夫編『日本城下町絵図集・東北編』㈱昭和札文社　昭和55年（1980）
佐藤巧「仙台城の建築と姿絵図」『東北大学建築学報　第21号』東北大学建築学科　昭和56年（1981）
㈶斎藤報恩会郷土資料図書分類目録　其一（東北地方関係古文書目録）　其二（常盤文庫）昭和62年（1987）
宮城県図書館『宮城県図書館所蔵絵図・地図解説目録』宮城県図書館　平成５年（1993）
高倉淳ほか５名『絵図・地図で見る仙台　第一輯』今野印刷　平成６年（1994）
東北歴史資料館『東北歴史資料館　資料集37　宮城の古絵図』東北歴史資料館　平成６年（1994）
仙台市史編さん委員会『仙台市史　特別編４　市民生活』仙台市　平成９年（1997）
仙台市教育委員会『仙台市文化財パンフレット第45集　仙台城下絵図の魅力　杜の都のうつりかわり』平成13年（2001）
仙台市博物館『仙台城－しろ・まち・ひと－』　平成13年（2001）
吉岡一男ほか６名『絵図・地図で見る仙台　第二輯』今野印刷　平成17年（2005）
臼杵市教育委員会『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』　平成17年（2005）
仙台市史編さん委員会『仙台市史　特別編７　城館』仙台市　平成18年（2006）
『復刻古地図　安永年間　仙台御城下絵図』人文社

報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと
書名	仙台城跡７
副書名	－平成18年度　調査報告書－
巻次	7
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第309集
編著者名	渡部　紀・鈴木　隆・鹿野仁子
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　仙台市青葉区国分町3丁目7-1　TEL022-214-8544
発行年月日	2007年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	調査地点	コード 市町村 04100 北緯	コード 遺跡番号 01033 東経	調査期間	調査面積	調査原因
仙台城跡（せんだいじょうあと）	宮城県仙台市（みやぎけんせんだいし）青葉区川内地内（あおばくかわうちちない）	大広間跡（６次）［第15次調査］	38°15′02″	140°51′35″	2006.6.1～2006.8.4	311㎡	重要遺跡の遺構確認調査
		三の丸跡（２次）［第16次調査］	38°15′07″	140°51′41″	2006.9.1～2006.11.30	522㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡・雨落ち溝跡・塀跡・堀跡・土塁	陶磁器・瓦・金属製品・石製品・木製品	第15次調査では、大広間跡の北東・南東角を確認し、それに先行する石敷き遺構を検出した。また大広間の北東周辺では塀跡や暗渠状遺構など、遺構の変遷が明らかになった。 第16次調査では、杭列や集石を伴う堀跡の北岸、西岸を検出した。三の丸の土塁内部では、18世紀後半から19世紀前半の陶磁器等が出土した。

仙台市文化財調査報告書第309集
仙　台　城　跡　7
— 平成18年度　調査報告書 —
2007年３月
発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課　022（214）8554
印刷　株式会社　建設プレス
仙台市青葉区折立三丁目2－10
TEL 022（302）0177